



靖國神社みたままつり

7月13日、この日は新暦のお盆の入りである。迎え火といって、盂蘭盆の行事の一つとして、昔は7月13日の夜先祖の精霊を迎えるために、家の門前

で麻幹(麻の皮を剥ぎ取った茎)を焚いたものである。いつの頃からか麻幹の日は夕刻、提灯を持って先祖のお墓に詣り、提灯で足元を照らしながら先祖の霊を家まで導いて行く迎え火の行

事が私の周りの家でも行われている。今日から靖國神社「みたままつり」が始まる。その前夜祭の日である。例年のとおり、早目にお墓参りを済ませて、靖國神社に向かう。どんよりと雨雲の垂れ込める梅雨空ながら、小雨も

報 特 攻

平成22年8月

第 84 号

財団法人 特攻隊戦没者 慰霊平和祈念協会
 〒105-0014 東京都港区芝 2-5-19TABビル
 電話 03 (5730) 1016
 F A X 03 (5730) 1017

http://www.tokkotai.or.jp
 振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能
 発行人 羽 淵 徹 也
 印刷所 ヨシダ印刷株式会社

靖國神社みたままつり	1
懸け雪洞に見る靖國の心	3
平成22年度都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭	4
殉國沖繩學徒顯彰六拾五年祭	5
戦没者追悼式	8

平成22年度豫科練雄飛会慰霊祭	9
徳之島の第43回戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊祭に参列して	10
慰霊飛行に参加して	11
鈴木利男書画展「生か死か」	13
第39回萬世特攻慰霊祭に参列して	15
第56回知覧特攻基地戦没者慰霊祭参列の旅	16
沖繩における平成22年度「義烈空挺隊慰霊祭」に参加して	18
沖繩における義烈空挺隊慰霊祭	19
義烈空挺隊慰霊祭	21
観音湯の話	22
回天の追憶と祈り(抄その三)	23
特集・特攻ライブラリー	
特攻インタビュー(第2回)	
陸軍航空特攻 中村 真氏	31
新刊図書紹介	54
事務局からのお知らせ	55
事務局からの報告等	55
書中見舞い・入会案内等他	56

上がって心地よい風の吹く夏の宵である。大鳥居から第二鳥居前にある下乗札までの外苑参道両側には、沢山の屋台店が連なり、焼き鳥、焼きそば、焼きとうもろこしなどの香ばしい匂いが漂い、その裏には、昔懐かしのお化け屋敷まで開設されている。17時前後に

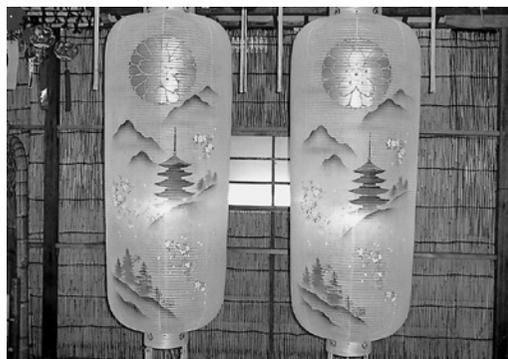
目 次

は、既に若者を中心に、学校や勤め帰りの参詣人で賑わっていた。大村益次郎銅像の周りには、民謡や盆踊りの舞台が作られ、浴衣姿やはつぴ姿の人々も見受けられる。

やがて宵の18時、神殿より鳴り響く大太鼓の音を合図に、一斉に点灯された大小約3万個の懸け提灯や懸け雪洞が、境内や参道一面を明るく照らし出して「みたままつり」の前夜祭は始まった。幽玄な中にも華やかな雰囲気醸し出し、大勢の参詣者で賑う靖國神社の「みたままつり」は、今や都心で催される新暦の一大盆祭として定着しているが、昭和22年7月13日〜16日に、神社の正式行事として斎行されてから



右青森ねぶた・左弘前ねぶた



福岡・八女提灯

今年で満63年、64回目を迎えた。この「みたままつり」の由来や意義については、東京大学名誉教授小堀桂一郎博士著『靖國神社と日本人』（平成10年8月・PHP新書）や靖國神社報「やすくに」第624号（平成19年7月1日）掲載の京都産業大学功教授の論稿「みたま祭の来歴と意義」に詳しいが、この「みたま祭」の由来と意義に関して、次のような興味ある記述があるので、前回に引き続き再度紹介させていただく。

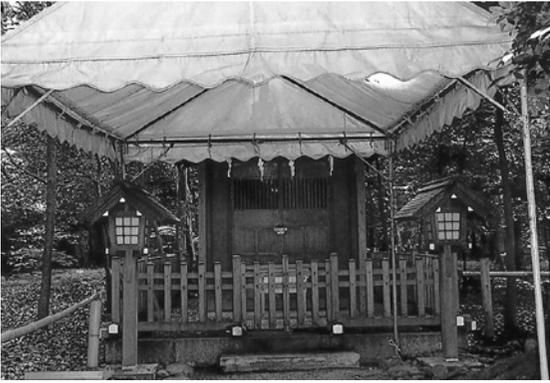
終戦直後の昭和20年9月、靖國神社を所管する陸軍省は「軍の解散前に、支那事変・大東亜戦争の為に死没した軍人・軍属等213万余柱の英霊」の「大合祀祭」実施を提唱する際、「敵の戦闘行動に因り死没したる者は、軍人・軍属に限定することなく全般的に合祀せらるゝ」ことを要望した。それに対して宮内省は、「柱数・氏名不明の一般戦死者」を本殿に合祀することは適当でないが、そのような人々の「慰霊祭を（別所）実施せらるゝ場合は、行幸（親拝）を御願ひする」ことも可能と回答している。その結果、昭和20年11月20日、昭和天皇の行幸・御親拝を仰いで臨時大招魂祭が斎行された、ということである。ところが、その後間もない12月15日に、占領軍総司令部は「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ保証、支障、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」という、いわゆる「神道指令」を通達し、政教分離の名の下に、特に靖國神社を攻撃目標として、精神面からこれをなきものにしようとした。しかし、国民の間には祖国のために身を捧げた戦死者の慰霊・鎮魂のことがまず第一に心にかかり、昭和21年7月、長野県遺族会の有志80余名が自発的に上京し、靖國神社境内の相撲場で、民謡と盆踊りの奉納大会が賑

やかに催された。これに啓示されて、翌22年7月からは、神社の正式行事として斎行されるようになった、とのことである。

靖國神社では、昭和24年7月の第3回「みたま祭」以来、7月13日夕刻、みたま祭前夜祭に先立ち、旧招魂斎庭において、大東亜戦争に際し「先陣に死し職域に殉じ非命に斃れた人々で、靖國神社に奉斎されざるみたまの慰霊祭」を「諸霊祭」と称して執り行うことが慣例となっている。この「諸霊祭」では、復員局・厚生省から「祭神名票」が送られないため、神社で合祀されていない「軍人・軍属等」も、また外地や内地で戦災（空襲・原爆等）により死没した一般の人々も、すべて一緒に慰霊することになった、とのことである。今年も、拜殿の左奥に鎮座されている鎮霊社（元宮の左の社）において「諸霊祭」が斎行された。

一方、政府主催の「全国戦没者追悼式」は、日本遺族会などの早くからの強い要望により、ようやく昭和38年5月の閣議決定を受けて、同年8月15日（停戦公表の日、月遅れの盆）に初めて実施されたが、これは前記靖國神社の「諸霊祭」を含めた「みたま祭」の延長戦上にあるものと言えよう。

右の閣議決定文には「今次の大戦に



向かって左・鎮靈社 (諸靈祭斎場)



向かって右・元宮

おける全戦没者(軍人・軍属及び準軍属のほか、外地において非命にたおれた者、内地における戦災死没者等をも含む)に対し、国をあげて追悼の誠を捧げる・・とあり、しかも、「宗教的儀式を伴わない」と断りながらも、御臨席の天皇・皇后両陛下にあわせて「全国民が一斉に黙祷するよう勸奨」している。また、昭和39年の第2回追悼式は、靖國神社の境内で行われている。更に、「終戦二十周年」の第3回追悼式からは、規模を拡げて国立の日本武道館で実施されることになったが、その際、正面中央の標柱に「全国戦没者之霊」と明記され、それへの拝礼・献花が今日まで続いている。神道の立場から見れば、この標柱は、全戦没者の神霊が宿る神籬ひのろぎの一種(榊や御柱の類)にほかならない、と所教授は指摘しておられる。更にまた、同教授は、ともあれ、7月の賑やかな「みたま祭」と8月の厳かな「全国戦没者追悼式」が、これからも共に永く続けられるよう念じてやまない、と述べておられる。全く同感である。このことは、靖國神社に寄せる日本人の誠の心の表れである。

(飯田正能記)

○懸け雪洞ほんぼりに見る靖國の心

靖國神社の「みたままつり」には毎年、各界名士の揮毫になる数百の懸け雪洞が献灯されるのであるが、英霊に対する追悼、国を憂い未来を思う心、家族や友を愛する心、人生訓、等々を表した言葉や詩歌、美しい日本の風物や故里の野山、花鳥の姿、等々を描いた絵、いずれの書画も作者の真情の籠もった力作であり、深く胸を打つものがある。その中の幾つかを紹介させていただく。

・元皇族・皇太后女官長北白川祥子様
いくとせも 代は移りたり 靖國の
宮居榮えて 百四十年

・元皇族・崇敬者総代 島津 肇子様
靖國神社の歌 鎮魂頌より
うつし世の数の苦しみ

た、かひにますものあらめや
あはれ其も 夢とすきつ、
かそけくも なりにしかなや
今し 君 安らきたまふ

とこしへの ゆたのいこひに
・崇敬者総代(当協会会長) 山本 卓眞氏

此の年も社頭に首脳の姿なし
真の道義に開眼すべし

・崇敬者総代(元拓殖大学総長) 小田村四郎氏

明治天皇御製
をりにふれて(明治三十七年)
世とともに語りつたへよ國のため
命をすてし人のいさをを

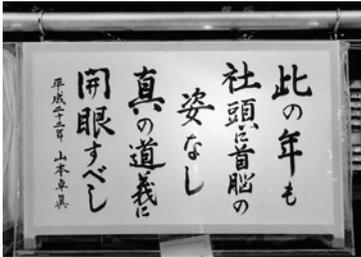
・崇敬者総代(京都産業大学教授) 所 功氏
「威一其徳」
平成二十二年庚寅教育勅語百二十年
アナウンサー 鈴木 史朗氏
20世紀最大の功績国は 日本ではな
いか(ピーター・ドラッカー)アメ
リカ経済学者・経済史教授・文明評
論家)

・作家 北 康利氏
靖國の英霊に恥ずるところなかりし
か 先人への感謝の思いと謙虚さ
それが次世代へと語り継がれていく
限り 英霊はこの国の防人であり続
ける

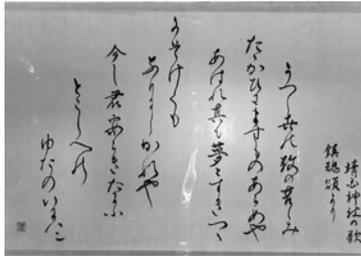
・書家 清水 正尚氏
重き命を皇国に 捧げ給いしその勲
春は櫻に匂い出で 国の姿を飾るな
り あ、尊しや靖國の神

・歌手 小嶋美智子氏
命の尊さ六十四才 人生これから
今ある幸せ 英霊に感謝

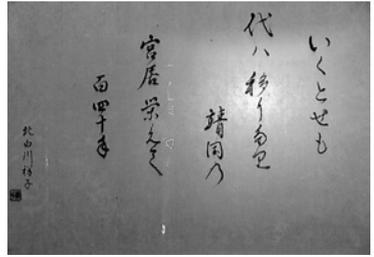
・書家 小栗 楓子氏
蝶飛んで 天界の人思ひけり



山本卓眞会長



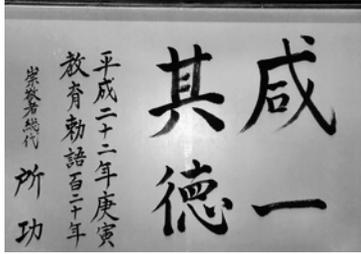
島津肇子様



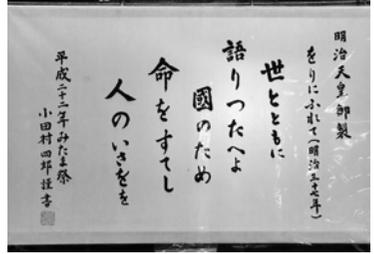
白北川祥子様



阿南惟正氏



所 功氏



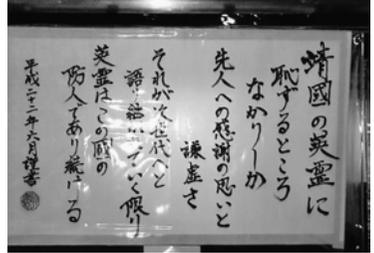
小田村四郎氏



靖国神社遊就館



小栗楓子氏



北 康利氏

**平成22年度
都城市特別攻撃隊戦没者
慰霊祭**

理事長 藤田 幸生

平成22年4月6日11時から、都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭が、都城特攻慰霊碑前において、同碑奉賛会（会長 長峰誠氏）の主催により、380余名（うち御遺族30名）参列の下に執り行われ、この慰霊祭に、当協会を代表して参列した。

陸軍の特攻基地慰霊祭に参列するのは初めてであり、都城という町も初めての訪問であった。地の利も分からないまま、宮崎空港から高速バスで現地を訪れた。途中の風景は、既に桜は終わりかけていた。早朝、南房総の館山を出て、羽田発宮崎行きの一飛機で飛び、地図を頼りに5時間掛けてやっと慰霊碑前に辿り着いた感じであった。

陸軍墓地跡にある特攻慰霊碑前には、大きなテントが張られ、陸上自衛隊の音楽隊が演奏していた。既に沢山の方々が椅子に座っておられたが、顔見知りの方は見当たらなかった。ただ一人、菅原前理事長（現副会長）にお会いできただけであった。

慰霊祭は、定刻に開始され、式次第

都城特攻振武隊はやて慰霊碑



所在地 都城市都島町旧陸軍墓地
建立 昭和52年11月15日
建立者 都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会
管理 都城市役所内
慰霊祭 都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会
毎年4月6日奉賛会主催で実施

に沿って、例年どおり執り行われた。都城基地からは、多くの陸軍特攻の「振武隊」が出撃されている。昭和52年の慰霊碑建立時、79名の方が特攻戦没と判明していた。その後、特攻隊員・援護隊員・殉職者等百余名の方が判明しているという。関係者に陸士57期生の方が多かった。

顔見知りの方がいなかったこともあり、ゆつくりと落ち着いた気持ちで、参拝、献花をすることができた。天候にも恵まれて、慰霊祭は滞りなく終えることができた。

殉國沖繩學徒顯彰六拾五年祭



平成22年6月23日(水) 16時から、靖國神社において「殉國沖繩學徒顯彰六拾五年祭」が厳肅に斎行された。元

国士館大学教授金城和彦先生を代表とする「殉國沖繩學徒顯彰會」の主催によるものであるが、今年は、同会代表として会務を取り仕切って来られた金城先生御夫妻が共に体調を崩され、顯彰祭の案内等の事務が滞っていたため、その斎行も危ぶまれていたが、若い学生達の熱意と努力により、ようやく斎行に漕ぎ着けることができたとのことである。

6月23日は、沖縄「慰霊の日」である。沖縄戦最後の激戦地となった糸満市摩文仁の丘の平和祈念公園では、沖縄県の主催による「沖繩全戦没者追悼式」が、菅首相、仲井真弘多知事のほか、衆参両議院議長、遺族ら約5500人が参列して盛大に執り行われた。仲井真知事は、平和宣言の中で

「沖縄の米軍基地負担の軽減、普天間飛行場の危険性の除去を早急に実現すべき課題である」と指摘し、更に「50年前の今日、日米安全保障条約・日米地位協定が発効した。大きな節目の年を契機に、県民の目に見える形で負担が軽減されることを願う」と訴えた。

就任後初めて沖縄入りをした菅首相は、追悼式で、沖縄の基地負担について、「全国民を代表してお詫び申し上げる。他方、この負担がアジア太平洋地域の平和と安定につながってきたことに率直にお礼の気持ちを表させていただきたい」と述べた。その上で「基地の負担軽減と危険性の除去に一層真剣に取り組むことを約束する」と強調した。

平和祈念公園内の「平和の礎」に刻まれた全戦没者の刻銘は、今年新たに80柱が追加されて総数24万931柱に達した。この数は、沖縄本島における陸海軍の戦死者及び沖縄作戦中の特攻戦死者、一般住民の戦没者も含めた数になるが、マスコミが報道するのは、戦争の犠牲となった一般住民の事例がほとんどである。

今日、沖縄戦は、多くの住民を巻き込んだ無謀な戦闘と評価付けられ、住民の犠牲の面を強調する風潮が強い

が、圧倒的に不利な状況下であって、将兵はよく勇敢敢闘し、官民また率先協力してよく奮闘し、身を賭した3箇月にわたる抗戦により、本土防衛のための防波堤としての重任を全うした、その尊い英霊の顕彰とその史実の継承こそが大切なのではないか。

戦後65年を経た今日なお現地沖縄の人々の心には強烈な思いが染み込んでおり、この日現地の慰霊追悼行事は、摩文仁だけではなく、各地の慰霊碑、就中、各従軍学徒の碑でも行われているが、中央における沖繩戦戦没者慰霊行事が、唯一、靖國神社における本顯彰祭であるのは、些か寂しい思いがする。ましてや、マスコミがこれを報道することもない。

業・農林・水産、市立商業学校、私立開南中学校の9校から1880余名が「鉄血勤皇隊」及び通信隊に編入され、半数は第一線の戦闘に、半数は野戦築城に従事した。4月1日の米軍上陸以来、これらの少年兵が、爆雷を抱いて米軍戦車に体当たりを敢行する壮烈なる光景が各地区の戦場で見られたが、5月中旬首里城の急を救おうとして「学徒斬込隊」が志願編成され、50余名が一体となって敵陣に突入し、壮烈な戦死を遂げた事実はその代表的なものであった。

沖繩戦は、正に軍官民一体の総力戦であった。牛島満軍司令官の率いる第32軍は、19年11月、3個師1旅のうち精鋭第9師団を台湾に抽出され、兵力補充のため17歳から45歳までの男子の軍務徴集の外、中学校生徒を動員して「鉄血勤皇隊」を組織し、女学校生徒は「従軍看護隊」に編成して、敵上陸時の戦闘隊員に投入した。中学3年生以下の下級生は通信隊員として、上級生は勤皇隊員となつて軍事訓練につき、20年3月には沖繩師範男子部、県立第一・第二・第三の各中学校、同工

女子学徒の場合は、「ひめゆり学徒隊」として有名であるが、それは沖繩師範学校女子部と県立第一高等女学校を「姫百合学舎」と呼んでいたのに因

ら動員された従軍看護婦は総数約540余名に及び、各戦線において、弾丸雨注の中、健気にも身を挺して負傷兵の看護に当たり、幾多の悲痛なる哀話を綴つたが、中でも6月18日には、陸軍病院は解散となり、女学生の動員も解除されたので、伊原の洞窟にあつ

た第三外科病院では、女学生が従軍服を脱いで学生服に着替え、解散式を済ませた瞬間、米軍の急襲馬乗り攻撃が加えられ、全員殆ど脱出の余裕なく、一挙にうら若き女学生27名の命が奪われた悲劇もあった。その他戦死した女学生の数は動員数の45%250余名を数えた。男子部の44%と共に動員学徒の約半数が尊い命を国に捧げて戦死した。誠に痛恨の極みである。



戦の庭に赴きし在りし日の乙女たち



本顯彰會では、昭和32年以来毎年、靖國神社において、これら沖繩殉國学徒の慰靈顯彰祭を斎行して今年第54回

目を迎えた。御遺族や関係者の高齢化に伴い、参列者も漸減しており、特に今年は、冒頭に述べた事情もあって参列者が激減した。それでも約30名の参列者があり、そのうち、約半数の学生や若者など志を継ぐ者のいることは一筋の光明である。

祭典は、国歌斉唱、修祓の儀、献饌の儀、齋主祝詞奏上と進み、祭文奏上となったが、この度は、國學院大学神道文化部三年生の上野重太郎君が祭文を奏上し、沖繩戦は、先の大戦において唯一、軍、官、民一体となって戦った祖国と民族の防衛戦であった。この戦闘の真実の姿を語り継ぎ、尊い命を捧げた若い学徒達の慰靈顯彰を続けなければならぬ、との決意を述べた。

○御遺文

古波津 昇命

球九七〇〇部隊独立工兵第六六大隊 摩文仁にて戦死 当時十七歳 謹んで母上に

世の中の平和な島沖繩も、すでに戦いの巷と化せり。小生も鐵血勳皇隊として、皇國の兵士となり、十九で出征、

ここに遺書をしたたむ。

小生運悪くして散るとも、魂は死なず、きつと勝つ。戦いは我が國の興亡に関する天下分け目の戦いなり。なにも思い残すことはなく、父と共に暮らす。

後は母上を始め古波津家の発展を祈る。小生も決死敢闘悔いなし。

若桜散るべき時は今なるぞ

十九の春に撃ちてし止まん

○御遺詠

小渡 壮一命

球九七〇〇部隊勳皇隊本部

首里にて戦死 当時十六歳

身はたとひこの沖繩に果てるとも

七度生まれて敵亡さん

安谷屋 盛治命

球九七〇〇部隊野戦重砲隊

真壁にて戦死 当時十六歳

大君の御旗の下に死してこそ

人と生まれしかひはありけり

君のため何かをしまむ若桜

散つて甲斐ある命なりせば

編注 (飯田正能記)

①「沖繩県民斯克戦へり」これはかの

沖繩戦の末期、海軍沖繩根拠地隊司令官であった大田實海軍少将が海軍次官宛に送信した訣別電文の一節である。

これによって、沖繩戦では、軍官民が一体となって祖国防衛のため、如何に奮戦努力したかが窺える。

「機密第〇六二〇一六番電六分ノ一、二、三、四、五、六発 沖繩根拠地隊司令官宛 海軍次官

左ノ電ヲ次官ニ御通報方取計ヲ得度

沖繩県民ノ実情ニ関シテハ県知事ヨリ

報告セラルベキモ県ニハ既ニ通信力ナ

ク三十二軍司令部又通信ノ余力ナシト

認メラルルニ付本職県知事ノ依頼ヲ受

ケタルニ非ザレドモ現状ヲ看過スルニ

忍ビズ之ニ代ツテ緊急御通知申上グ

沖繩島ニ敵攻略ヲ開始以來陸海軍方

面戦闘ニ専念シ県民ニ関シテハ殆ド顧

ミルニ暇ナカリキ

然レドモ本職ノ知レル範圍ニ於テハ

県民ハ青壯年ノ全部ヲ防衛召集ニ捧ゲ

残ル老若婦女子ノミガ相次グ砲爆撃ニ

家屋ト家財ノ全部ヲ焼却セラレ僅ニ身

ヲ以テ軍ノ作戦ニ差支ナキ場合ノ小防

空壕ニ避難尚砲爆撃ノ下ニ風雨ニ曝

サレツツモ乏シキ生活ニ甘ジアリタリ

(中略)

看護婦ニ至リテハ軍移動ニ際シ衛生

兵既ニ出発シ身寄無キ重傷者ヲ助ケテ

真面目ニシテ一時ノ感情ニ駆ラレ

タルモノトハ思ワレズ 更ニ軍ニ於テ

作戦ノ大転換アル夜夜ノ中ニ遙ニ遠隔

地方ノ住居地区ヲ指定セラレ輸送力皆

旧鹿屋航空基地特別攻撃隊 戦没者追悼式

評議員 小倉 利之

平成22年4月3日(土)、鹿屋市今坂町小塚公園内、慰霊塔前広場において、鹿屋市主催により、旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式が執り行われました。

前日は、特に西日本は強風に見舞われ、追悼式の実施が危ぶまれましたが、当日は嘘のように風もなく、桜花爛漫、青空の澄みわたる素晴らしい天気となりました。

追悼式は、予定通り開式の言葉で始まりました。一同拝礼。国旗掲揚は、海上自衛隊第一航空群のラップパ隊による吹奏により行われ、国歌斉唱は、申良消防本部の音楽隊の演奏に引き続き斉唱いたしました。



特攻隊戦没者慰霊塔

機によるもので、3個隊による飛行が行われました。UH-60J単機、SH-60K3機、P-3C3機の素晴らしい編隊飛行でした。英霊も新しい機種に見入っておられたことと思います。

式辞は、主催者を代表して嶋田芳博鹿屋市長が「908名の戦没者が、この鹿屋基地を飛び立って散華されました。その悲惨な過去を振り返り、我々は、国の恒久平和の確立のために全力を尽くす責務があります」との式辞を述べられました。

追悼の言葉は、鹿屋市議会議長、遺族代表、戦友代表、海上自衛隊第一航空群司令らが述べられましたが、生存者代表のお話の中で、先輩も同期も後輩も高齢になりましたが、何時までもこの慰霊と顕彰は必要であります」と述べられました。参加者は皆、そのよ



慰霊塔副碑

うに感じました。

参列者総員による献花が行われ、慰霊塔の前に設けられた祭壇に、白菊を献花いたしました。鹿屋市長、市議会議長、遺族、戦友代表、衆議院議員、県議会議員、自衛隊関係者、遺族会その他各会代表者、一般参列者等が慰霊塔に向かって掌を合わせ、若くして国悼の祈りを捧げました。

第一航空群儀仗隊による弔銃発射の儀式があり、その後、遺書朗読がありました。したが、思わず涙が出て参りました。

戦友達によって「同期の桜」が歌われましたが、約30名の斉唱で、英霊と共に歌っているのでしょうか、素晴らし



儀仗隊による弔銃発射

い響きでした。

主催者の挨拶、遺族代表の謝辞、国旗降納、一同拝礼、閉式の言葉で、式典は予定通り終了いたしました。

この式典は、鹿屋市の主催であり、英霊のために、職員一同心を込めて忙しく働いている姿は、感謝、感謝の気持ちで見え参りました。特に、若い職員が、職務とはいえ、心からのもてなしをして下され、これにもまた感心いたしました。

また、海上自衛隊第一航空群による慰霊飛行、儀仗隊等の協力、地元消防本部の音楽隊による素晴らしい演奏等有り難うございました。来年以降もよろしく願っています。



戦友達による「同期の桜」の斉唱



満開の桜の下での豫科練雄飛会慰霊祭 (受付)

次に慰霊塔建立の由来について述べたいと思います。

○特攻隊戦没者慰霊塔建立の由来

第二次世界大戦における沖繩の戦闘は、戦史にも類例のないほどに熾烈なものであった。ときに戦局はようやく我が軍に不利となり、ここに態勢挽回の秘策を試みるに至った。即ち敵国海空軍兵力の全滅を期して企てた「特攻攻撃」である。ときまさに昭和二十年春であった。

平成22年度豫科練雄飛会慰霊祭
 評議員 小倉 利之

そしてこの壮烈なる特攻攻撃発進の地こそ、当鹿屋であって、以来八十二日間の戦闘は熾烈を極め、日々若人達は黒潮おどる沖繩へと飛び立った。

あたら青春に富む尊い生命を祖国のため敢然と捧げたこれら若人達・・・世上ともすれば敗戦のかげにこのような尊い犠牲を忘れがちである。

こんにち、この結果はどうであったにしても、これら身を挺して祖国の

平成22年4月6日(火)、豫科練雄

飛会(堺 周一会長)の平成22年度慰霊祭が靖國神社で行われました。

靖國神社境内の桜は、3月21日に開花宣言があったものの、その後低温の日が続いたため、開花が遅れてい

ましたが、この日の慰霊祭に合わせたかのように丁度満開の模様となりました。境内は平日にも関わらず、多くの参拝者や花見の人々で賑わっていました。

慰霊祭は、ご遺族、ご来賓、豫科練出身者及び有志約250名が参集殿に集合し、式典内容等説明の後、拝殿に参列して正午から行われました。

慰霊祭式典は、国歌斉唱、修祓、献饌、祝詞奏上(神官)、祭文奏上(堺会長)、献歌(全員で「海行かば」斉唱)の後、2班に分かれて本殿に昇殿参拝、「国の鎮め」の奏楽のうちに、玉串奉奠、

難に殉じた人々の祖国愛は賞賛されるべきであり、これら若人の至情至純の精神は、その御霊と共にとこしえに祭られ、史実とともに後世に誤りなく伝えられなければならない。

その最もゆかりの深い地として、また本土最南端海軍航空基地として、多くの特攻隊員(九百八名)が飛び立って再びかえることのなかった最後の地の「鹿屋」にその御霊を祭る慰霊塔

黙祷、撤饌、直会神酒、退下で、滞りなく終了いたしました。

その後、総員靖國會館前に集合して記念写真を撮影したあと、靖國會館2階宴会場において、招魂観桜祭が実施されました。

ご遺族・ご来賓の紹介、ご祝辞のあと、懇親会が催され、軍歌・同期の桜を斉唱し、お礼の言葉があつて閉会となりました。

靖國の桜は、靖國神社が招魂社として創建された翌年(明治3年)、この地に初めて植えられた桜が始まりです。日本を象徴する桜は、靖國神社に鎮まります英霊にとって誇りの象徴でもありました。現在靖國神社の境内には、約600本の桜があり、その多くはソメイヨシノやヤマザクラの品種です。毎年、気象庁が靖國神社のソ

を建立すべく昭和三十二年十月鹿屋市長を会長とする「旧鹿屋航空基地特攻隊戦没者慰霊塔建立期成会」が結成され、全国に協力をよびかけたところ、市内はもとより広く各方面からおおくの浄財が寄せられた。

これに基づき航空隊を眼前に眺望する小塚丘にその神霊をとこしえに平和の礎として祭る慰霊の碑を昭和三十三年三月二十日に建立したものである。

メイヨシノの開花状況を調べて東京の桜の開花を発表します。(靖國神社の「参拝のしおり」より)

英霊の遺詠には、「天駆け行かん今日こそは桜花と共にいざ散らん」や「悠久の大義に生きん若桜ただ勇み行く沖繩の空」等、この靖國の桜を心に留めて詠んだであることが推察できます。

英霊は常に靖國の桜を心に留めていたものであり、また、靖國神社御創建の目的が「国家のために一命を捧げられたこれらの人々の霊を慰め、その事績を後世に伝える」ものであって、その英霊の慰霊顕彰には、靖國神社と靖國の桜は、なくてはならないものであり、そのことを我々は決して忘れてはならないと思います。

徳之島の第43回戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊祭に参列して

理事長 藤田 幸生

65年前の4月7日は、大日本帝国海軍の聯合艦隊終焉の日です。

今年も4月7日(水)、徳之島、枕崎などで慰霊祭が行われました。私は徳之島の慰霊祭に参列しましたので、その状況を報告致します。

戦後、昭和43年になって、その最初の慰霊塔が、「徳之島」に建てられました。高松宮宣仁親王殿下から「戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊塔」の御揮毫を戴き、伊仙町犬田布岬に、高さ26メートル(大和の艦橋の高さ)の塔と、その前方、艦首の位置に当たる磯の上に「火焰の像」が建っています。これは、最近文化勲章を受章された彫刻家中村晋也先生の、若かりし日の設計によるものです。

今年、塩害等で傷んだ塔が、全国の皆様が仰いだご寄付により修復されて最初の慰霊祭でした。65年目の慰霊祭が、枕崎と同じ日に、徳之島の現地で行われました。

奄美新聞の報道によると、ご遺族以

下関係者約500名が参列しました。ご遺族や中村晋也先生、地元3町長ほかの皆さんたちです。

当日は、沖繩から海上自衛隊第5航空群のP3Cが2機、慰霊飛行に飛来し、また、東シナ海にいたイージス艦「ちようかい」が、塔の建つ犬田布岬沖に来航して慰霊航行をしました。戦艦大和を旗艦とする第二艦隊が到達し

得なかつた目的地沖繩から艦隊を迎えに来てくれた形です。「イージス艦」は、現在の海自にとって「大和」のような存在です。「大和」が沈んだ時間に合わせて、飛行はオントップ、艦は汽笛吹鳴・・・、地上では黙祷を捧げました。天候は、当時と同じ曇り空で、強風でした。

慰霊祭の中で、協会を代表して以下の祭文を奏上しました。

祭文

今年もまた、この四月七日が廻つてまいりました。戦艦「大和」以下出撃艦隊戦没者の御霊に謹んで申し上げます。

六十五年前の昭和二十年四月六日、沖繩周辺の敵艦船に対する陸海軍協同総攻撃の一環として、戦艦「大和」、軽巡洋艦「矢矧」以下駆逐艦八隻から成る艦隊は、瀬戸内海から出撃しました。

しかしながらその途上、ここ徳之島沖において、雲霞の如き敵航空機に捕捉され、「大和」「矢矧」以下駆逐艦四隻は勇戦奮闘空しく四月七日午後二時過ぎ、遂に海に没しました。

これは明治以来、国民と共に多くの困難を乗り越えてきた帝国海軍聯合艦隊の実質的な終焉であったのであります。

大東亜戦争末期、燃料にも事欠く状態に陥り、座して滅するよりはと、再び生還を期し得ないことを覚悟して征途に就き、身を挺して同胞と国土を護るべく散華されたのであります。

終戦後、生きて焦土に残された私達は、昭和天皇の御詔勅を体し、皆様方の精神に反しないようにと、決死の覚悟で復興に努め、短期間に世界中が瞠目するような経済発展を成し遂げました。しかしながら、この間の余りにも

経済合理性を優先し過ぎた負の面が、所謂バブル崩壊と冷戦終結を機に一举に顕在化するに至りました。更に加えて、人づくり教育の失敗から、伝統的な良い意味の日本精神の崩壊、亡国の兆しを思わせるような社会現象を引き起こしているのであります。それが、

日本社会の実態であります。人としてあるべき価値観が、大きく揺らいできております。

目を外に転じて、二十一世紀の地域情勢、国際情勢を見ましても、眼前に広がる東シナ海においてさえも、中国海軍の急速な膨張など益々混迷の度を加えております。その中で我が国が、

独立国家の尊厳と民族としての誇りを堅持し、毅然として生き抜いていくためには、今こそ皆様方が成し遂げた行為の根源にある、日本人の崇高な精神の大切さに気付き、これを学んでいかなければなりません。皆様方にお応え

するため、この伝統的な日本人の心をもう一度呼び起こし、時空を超えて揺るぎない日本の国を実現していくよう努力することをお誓い申し上げて祭文奏上を終わります。

在天の御霊安らかにお眠り下さい。

平成二十二年四月七日

(財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会 理事長 藤田 幸生



普天馬基地問題の余波もあり、島は騒然としていましたが、慰霊祭は齊々と執り行われました。これからも、徳之島、枕崎では、毎年この日のこの時間に、慰霊祭は続けられていくことでしょう。可能な限り出席していきたいと思いましたが、ただ、島は遠く、ご遺族等も加齢による不自由さから、本土の枕崎に参加する人が多いと感じてい

ます。徳之島の慰霊塔は、都井岬のよ
うな芝生に覆われた岬に、蒼然と建っ
ております。「海炎の像」を含めて、
芸術作品であります。

翌8日の午前、前日とは打って変

わった晴天の中、慰霊塔を再訪しまし
た。静かに塔に向かって参拝し、「海
炎の像」の向こう遙かに広がる東シナ
海を眺めるとき、感慨深いものがあり
ました。今後とも、戦没者慰霊活動を
通じて、戦没者に感謝を捧げ、過去に
生起した事実とその経緯を尋ね、過ち
は反省し、それらを忘れることなく、
これからの生き方に活かしていきたい

慰霊飛行に参加して

会 員 町田 志都香

平成22年4月7日、「戦艦大和を旗
艦とする艦隊戦士の慰霊祭」への参列
を決めたのは、慰霊顕彰援護委員を拜
命して未だ間もない頃だった。

「海上自衛隊の航空機が、沖繩から
慰霊飛行をすることになった。P-3
Cに搭乗して徳之島へ向かうよう
に・・・」と打診されて驚いたのは、
3月のお彼岸明けだった。上空から慰
霊塔を遙拝し、艦隊が眠る南溟を眼下
に手を合わせる機会は稀である。この

と思います。そのことこそが、真の意
味の「慰霊」になると思うからです。
添付の写真は、当日のもので、
「大和」が没したときと同じく、曇天
強風でした。



戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊塔

飛行は幾重にも妨がれた人達との縁だ
と思う。

寒かった東京とは違い、半袖が心地
よい那覇は生温かい雨が降っていた。
「低気圧の影響で明日は揺れることが
予想されるので、酔い止めを飲むとい
いですよ」と搭乗員に勧められ、前日
に薬を買って朝食後に服用した。飲み
込むのを躊躇するような味だった。

プロペラ機を見ると、子供の頃に南
紀白浜から乗ったYS-11を思い出
す。

第5航空隊の格納庫で、記念写真を
撮ってくれた。機内に座って飛行機が
動き出しても、滑走路へは進まない。



慰霊祭会場

着陸する民間機を何度も見送って、離
陸したのは、65年前の戦闘が始まる頃
だった。

私と戦艦大和の出会い、20年前に
遡る。

学生時代の夏休み、「たまには路線
バスに乗って、熊野の山並みを眺めな
がら本宮まで帰ろう」と父に言われ、
田辺駅で待ち合わせてバスに乗った。
「あれ？珍しいなあ・・・元氣か？」と
父に声を掛けたのは、近くのお寺の住
職だった。「和尚さん、京都からお帰
りですか？・・・」と楽しそうに答えた
父に「和尚さんは戦艦大和の生還者だ
よ」と教えられたのが最初の出会いだ。



イージス艦「ちょうかい」の慰霊航行

乗客は私たち3人だけだった。「大和
の話は今度ゆっくりする」と言われて
歳月は流れた。

和尚さんと父は、親子ほとんど年は違
うが、気があつたらしい。町の会合な
どで同席すると、必ず隣に座って話を
したと聞いている。

神職だった父が亡くなり、一年祭が
過ぎた頃、母と二人で虎屋の羊羹を手
土産に和尚さんを訪ねた。西日が照ら
す百日紅の大木には鳥が止まり、苔む
す庭石をそうつと歩いて本堂へお参り
した。正座をして抹茶を頂き、戦艦大
和の話聞いたのは5年前、蟬時雨の
賑わう夕暮れであった。和尚さんの言

葉の向こう側には、体験に基づく事実があった。それは私の知らない昭和史の一部だった。

天の川の下で、「今日のお話を、他の人に伝えても良いですか?」と聞くのと、優しい声で「ええよ。あんたは孫と同じくらいの年なんや。若い人にも話してくれ」と言っつて、和尚さんは駐車場まで見送ってくれた。

ここに話の一部を記します。

和尚さんが海軍に入ったのは、修行していたお寺から大学に通っていた最中だったという。学徒出陣で召集されて入隊した。古鷹山での厳しい訓練。横須賀の砲術学校で生涯の友を得た。彼は大学で電気工学を学んでいた。実は家は牧場を経営していたので、当時は口にする事の珍しかったチーズやバターがあると聞き、和尚さんは喜んだ。「平和になったら僕の家へ遊びに来いよ。バターもあるし、チーズもあるから食べに来い」と言われて、「そうか、食べたいなあ。平和になったら遊びに行きよ・・」と二人並んで歩いていると、遠くから高松宮様が自転車に乗ってこちらへ向かって来られるお姿が見えた。直立不動で敬礼!すると、二人の前に自転車が止まり、「君たち、食事は美味しいかね?」と質問された。「はい、美味しいです」と答えたそうだ。

「宮様は、我々の食事の事まで心配して下さいさるんだなあ。びつくりしたなあ・・」と語り合った。

後日、二人は戦艦大和の乗員になった。

大和の士官室

では、兵学校卒

と学徒出陣で入隊し任官した同期生が、死生観の相違から大喧嘩になった。止めに入った和尚さんも殴られ、巻き込まれた後で、上官に一喝され、全員で加茂鶴を呑み、肩を組んで「同期の桜」を歌った。「明日、死ぬのか?俺たちは、明日死ぬんだな・・」と言っつて何度も「同期の桜」を歌った。

昭和20年4月7日、沖繩に向かう途中で大和は最期を迎える。この日は曇りだった。味方の飛行機の援護もなく、艦隊は壊滅した。測距儀を担当していた和尚さんは、大和と共に海に沈んだが、弾庫が爆発した浮力で海中から海面へ飛ばされて、渦に巻き込まれる事なく生還したのである。重油で真っ黒になった海の中で目を瞑り、息苦しくなる前に、観音様の姿が見えたという。子供の頃に亡くしたお母さんに似た観



戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊塔

音様、その時、体は海豚のように泳ぎ、シューツと水を切るような動きをして浮上するまでに、魚雷が通過したのか?と思うような音も聞こえて来たという。色んな物にぶつかって海面に放り出されると、柔道畳が流れて来た。周囲の戦友たちと励まし合い、漂流しているところを「冬月」に救助され帰還した。

和尚さんは過去2度、徳之島の慰霊祭に参列している。1度は大和乗員として、2度目は大和乗員であり、僧侶として戦友の慰霊祭を執り行うためだった。鹿児島県の慰霊祭は神式がほとんどなので、仏式でするのはどうか?と思い、お断りしたら、戦友の一人から、「仲間の中には仏教の人もいるやろう?戦友のために仏式で慰霊祭をしよう。あんたがお経をあげてくれ」という声が上がった。「わしは出来んぞ。泣いてお経が読めるか!お経が読めんからわしはアカン。他にも僧侶はおるやろう」と断ったが、「それがええんや、心が通じるから、それでええんや」と説得されて執行したと話していた。



戦艦大和と共に沈んだ第二艦隊6艦戦士の慰霊像

何故、徳之島に戦艦大和の慰霊塔があるのか和尚さんに聞いた。「それはな、大和と共に沈んだ艦の乗員だと思われ身体の一部が、潮流に乗って徳之島に漂着した、という話があるんや。第二艦隊は10隻あって、4隻しか助からなかった。6隻沈んだ大勢死んだ。せつかく助かった人の中には、見方の艦に救助される前に力尽きた者もおる。途中で鮫にやられた戦友もおる。その人たちがも知れない、身体の一部、手や足などが犬田布岬の磯に打ち上げられたらしい。それを見つけた島の人が、気の毒に思っつて岬に埋めてくれたという話があるんや。そ

の岬に慰霊塔が西を向いて建ってな
あ、塔の高さは大和の艦橋と同じ高さ
で、観音様が手を合わせたような形に
見える。岬から見たら大和が沈んだの
は西やから、西を向いて建ってるんや。
海軍では、死んだら遺骨は海の中やか
ら、殆ど戻ってこんなからなあ・艦が
沈んだ場所へ向けて手を合わせるん
や」という話を聞いて、慰霊塔は遥拝
所の役割なのだと思った。

那覇を離陸したP3-Cは、徳之島
を直指して北上した。海の上を飛んで
いるのに雲しか見えない。時折、雨粒
が小さな窓を濡らし、強風が機体を揺
らす。大和が沈んだ時刻に合わせて慰
霊塔へ近付いていく。

雲が切れた。眼下にイービス艦が見
える。犬田布岬が大きくなって慰霊塔
がハッキリと見えた。大勢の人影も分

鈴木利男書画展

「生か死か」

鈴木利男さんは、当会報「特攻」第
71号（言葉の書画「今甦る若者決死の
声」展―平成19年5月発行・7〜9頁
掲載）及び第82号（海軍飛行機整備予
備学生の会（相模野会）に思う―平成
22年2月発行・36〜44頁掲載）で紹介

かる。P3-Cに同乗した人たちと手
を合わせて黙祷した。

慰霊塔に集まった人たち、イービス
艦の乗員、P3-Cの搭乗員たちが、
合わせた手の先には、国難に殉じた人
の眠る海がある。御霊が鎮まりますよ
うに願ひ、窓から海を見て、目を閉じ
た。ここには、どれだけの人が眠って
いるのだろうか？

慰霊とは、死者の霊魂を慰めること
だ。それは、人によって表現方法が多
岐に渡るように思う。絵の上手な人は、
故人を偲ぶ想いを絵筆に込めて、自分
の描く絵の中に、死者との交流を持つ
こともあるだろう。花の好きな人は、
美しい花を手向けて、亡き人を慰める
時もあると思う。それらに共通するの
は、相手への敬意から生まれた感謝の
心が通っている事ではないだろうか？

したように、昭和19年9月横浜国大建
築科を繰り上げ卒業、海軍飛行機整備
予備学生として厚木航空隊に入隊、翌
20年4月小松海軍航空隊予科練生教
官、同年6月海軍少尉任官、九州海軍
燃料廠勤務、石炭液化開発業務に従事
し、幾多の予科練生出身特攻隊員の出
撃を見送り、また部下の非業の事故死
に遭遇するなどの体験に基づき、戦後
は美術関係の画房や総合プロデュース

沖繩から東京へ帰る飛行機の窓に富
士山が見えた。その姿が慰霊塔の形の
ように見えて、「そうだ！徳之島へ行
こう」と思った。

5月12日、私は徳之島へ行き、慰霊
塔に参拝した。

高松宮様が揮毫された「戦艦大和を
旗艦とする艦隊戦士慰霊塔」の文字は、
鮮やかな金色に輝いていた。塔の内側
に戦艦大和戦死者の名簿が飾られてい
る。和尚さんと一緒に大和に乗った親
友の名前が刻まれていた。彼は大和と
共に眠っている。

和尚さんが担当していた測距儀は艦
橋の上だから塔の天辺なんだ・和尚
さんの顔が浮かんで紺碧の空を見上げ
た。

慰霊塔は、観音様が手を合わせたよ
うな形に見える、と和尚さんは言った

けれど、私には神社の鳥居のように見
えた。

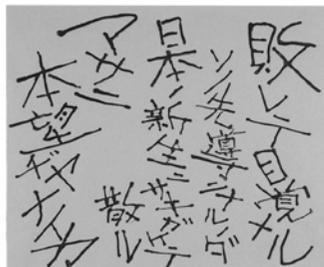
艦橋から艦首の距離には、人の顔が
描かれた像が建っている。慰霊塔から
磯を直指して歩いてみた。6人の顔が
彫られている。この彫刻は、戦艦大和
と共に沈んだ艦たちを表現した文化勲
章受章者の作品だと島民が教えてくれ
た。

犬田布岬には、百合が咲いていた。
ハブに気を付けながら慰霊塔の修復に
携わった心温かい島民たちと百合を摘
んで献花した。米、塩、御酒、牛乳、
虎屋の羊羹ほか、一人一人が好きなの
を持ち寄って色んな物をお供えした。
西に向かつて手を合わせ、皆で靖國神
社のお供え物を分け合って頂き、帰路
に就いた。

会社を経営される傍ら、若者の死を悼
む鎮魂・慰霊の思いを筆に込めた書画
を多数制作し、度々個展を開催してお
られる。平成19年9月21日〜12月10日
には、それまでに開催された「今甦る
若者決死の声」展や「言葉の書画」展
等の個展に展示された書画が靖國神社
遊就館の特別展に展示され、展示作品
の全てを靖國神社に奉納されている。
今年85歳、間もなく86歳の御高齢に

も拘わらず、言葉の書画に関わる制作
意欲は益々旺盛で、4月19日〜24日に
は、日本橋高島屋横の壺中居で「生か
死か―鈴木利男書画展」を開催され、
古来日本人が生み出した伝統的生死観
を表した素晴らしい名言、名作を、卓
越した独特の書画に表現されており、
訪れる人々に深い感銘を与えている。
これは、鈴木利男氏自身の死生観でも
あると思われるが、拓殖大学日本文化

研究所顧問の井尻千男元教授が、紹介文の中で述べておられるように、「生者と死者をわかつものは何か、つなぐ



敗れて目覚め。ソノ先導ニナルノダ。日本ノ新生ニサキガケ散ル。マサニ本望ヲチャナイカ。海軍大尉 白淵磐

昭和二十年四月六日出撃した戦艦大和の話である。学生出身の士官と、兵学校出身の士官同士が死について論争し合った。最後に白淵士官の言葉で皆納得したという。私(鈴木)の知人であった吉田満(戦艦大和の最期の著者の話である。



ものは何か、幽明境を異にするというが、その境はほんとうにあるのか、生者のための方便にすぎないのではないか。少なくとも言葉の力は生死の境をやすやすと超越している。言葉の領域においては生者と死者の区別がない。鈴木氏がこれまでに開いた個展はすべて生死を超越した言葉への敬意と愛だったといえる。・・・言の葉に喚起されたイメージを一幅の絵に仕立てている。鈴木利男流儀の画讀一如。色ひときわ鮮やかにして自在である」と。今回の個展では、30数点の題材(言の葉)に基づく書画のいづれもが、強く心に訴える響きを持つていたが、特に、特攻精神に関わる次の書画に魅せられたので、お許しを得て、掲載させていただきます。

これは、第二艦隊の旗艦として戦艦大和が沖繩に向け特攻出撃した、その艦内で、海兵出身と学徒出身の若い士官同士が死の意味について論争し、乱闘にまでなった時、これを制し、皆を納得させた、哨戒長・白淵大尉(二次室長、ケップガン)の持論であり、言葉である。当時、海軍少尉・副電測士として戦艦大和に乗艦勤務し、九死に一生を得た学徒出身の吉田満氏が、終戦直後の昭和20年秋に執筆し、その後占領軍の検閲、発禁処分、大幅修正発刊等迂余曲折を経て、講和条約発効後の昭和27年、ようやく無修正原文のまま出版された著書『戦艦大和ノ最期』に掲載されている。その部分を引用させていたと、次のとおりである。(飯田正能記)

天号作戦ノ成否如何 士官ノ間ニ激シキ論戦続ク
必敗論圧倒的ニ強シ(中略)
痛烈ナル必敗論ヲ傍ラニ、哨戒長白淵磐大尉(二次室長、ケップガン)、薄暮ノ洋上ニ眼鏡ヲ向ケシママ低ク囁ク如ク言フ
「進歩ノナイ者ハ決シテ勝タナイ 負ケテ目ザメルコトガ最上ノ道ダ
日本ハ進歩トイウコトヲ輕ンジ過ギタ私的ナ潔癖ヤ徳義ニコダワツテ、本當ノ進歩ヲ忘レテイタ 破レテ目覚メル、ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ワレルカ 今日覚メズシテイツ救ワレルカ 俺タチハソノ先導ニナルノダ 日本ノ新生ニサキガケテ散ル マサニ本望ヲチャナイカ」
彼、白淵大尉ノ持論ニシテ、マタ連日「ガンルーム」ニ沸騰セル死生談議ノ一応ノ結論ナリ 敢ヘテコレニ反駁ヲ加ヘ得ル者ナシ
出撃氣配ノ濃密化トトモニ、青年士官ニ瀰漫セル煩悶、苦惱ハ、夥シキ論争ヲ惹キ起サズンバヤマズ
艦隊敗残ノ状ステニ蔽ヒ難ク、決定的敗北ハ単ナル時間ノ問題ナリ何ノ故ノ敗戦ゾ 如何ナレバ日本ハ敗レルカ マタ第一線配置タル我ラガ命、旦夕ニ迫ル何ノ故ノ死カ 何ヲアガナヒ、如何ニ報イラルベキ死カ
兵学校出身ノ中尉、少尉、口ヲ揃ヘテ言フ「国ノタメ、君ノタメニ死ス ソレデイイチャナイカ ソレ以上ニ何ガ必要ナノダ モツテ瞑スベキチャナイカ」
学徒出身士官、色ヲナシテ反問ス「君国ノタメニ散ル ソレハ分ル ダガ一体ソレハ、ドウイフコトトツナガッテイルノダ 俺ノ死、俺ノ生命、マタ日本全体ノ敗北、ソレヲ更ニ一般のナ、普遍的ナ、何カ価値トイフヤウナモノニ結び附ケタイノダ コレラ一切ノコトハ、一体何ノタメニアルノダ」
「ソレハ理屈ダ 無用ナ、ムシロ有害ナ屁理屈ダ 貴様ハ特攻隊ノ菊水ノ「マーク」ヲ胸ニ附ケテ、天皇陛下方歳ト死ネテ、ソレデ嬉シクハナイノカ」
「ソレダケチャ嫌ダ モット、何カガ必要ナノダ」
遂ニハ鉄拳ノ雨、乱闘ノ修羅場トナル「ヨシ、ソウイフ腐ッタ根性ヲ叩キ直シテヤル」
白淵大尉ノ右ノ結論ハ、出撃ノ直前、ヨクコノ論戦ヲ制シテ、取捨ニ成功セルモノナリ

第39回萬世特攻慰靈祭に参列して

理事 栗原 宏

平成22年4月11日(日)、鹿児島県南さつま市(旧加世田市)の万世特攻平和記念館前にある、萬世特攻慰靈碑「よろずよに」の前において執り行われた第39回慰靈祭に、当協会を代表して参列しました。

鹿児島市からバスで約1時間、南さつま市の郊外にある萬世特攻慰靈碑の前には大テントが張られ、御遺族50名



慰靈祭会場 (万世特攻平和祈念館と慰靈碑前)



慰靈碑前の供花の列



御遺族による献花



慰靈祭会場風景

を含む約400名が参列して慰靈祭が執り行われましたが、13時丁度に、海上自衛隊鹿屋基地から飛来したP3C1機の慰靈飛行があり、多くの参列者がテントの外に出て見送りました。

その後、御遺族、旧隊員及び御来賓個々の紹介があつて、式典が開始されました。式次第に従い、国旗掲揚、この萬世特攻基地から出撃して散華された201名の特攻英霊に対する黙禱、慰靈碑奉賛会会長の追悼の言葉と進み、御遺族代表として遠路新潟県佐渡市から出席された渡部陸男氏(第104振武隊故渡部佐多雄少尉の弟)の慰靈の言葉がありました。特攻出撃

から1週間後に自宅に届けられた両親等家族に対する思いの遺書の一部を綿々と述べられ、多くの参列者の心を打ちました。

式典は整齊と進められ、参列者全員が碑前の献花台に献花し、最後に陸上自衛隊第12普通科連隊音楽隊の演奏による加藤隼戦闘隊の歌を全員で斉唱して、約2時間にわたった式典が終了しました。来年は節目の第40回慰靈祭を迎えるので、更に多くの参加者を迎えて盛大に開催したいとの主催者側の話がありました。

帰路、鹿児島中央駅に向かう送迎バスの車中で、同席した老婦人の御遺族

とたまたま話す機会がありました。話によりますと、父は、特攻戦死した兄の出撃基地は、知覧とばかり思っていて亡くなりました。3年前にこの萬世飛行場から出撃したことが判り、あと何年來られるか判りませんが、妹の私が、父に代わって参列しています。毎年慰靈祭の生花を頂いて帰り、父と兄の墓前に捧げ、慰靈祭に行ってきたことを報告しています、と話してくださいました。御遺族の心情を思うと、この慰靈祭が末長く継続されることを願っています。

第56回知覧特攻基地戦没者 慰霊祭参列の旅

理事長 藤田 幸生



知覧特攻平和観音堂



特攻平和観音堂内祭壇



慰霊祭式場風景

毎年春のゴールデンウィークには、鹿児島県南九州市の知覧町において、陸軍航空の「知覧特攻基地戦没者慰霊祭」が行われております。今年もまた5月3日(月・憲法記念日)に、知覧特攻慰霊顕彰会(福元作男会長)主催で、南九州市挙げての支援の下に、56回目の慰霊祭が執り行われました。今回は、我が特攻協会代表として参

列しました。私は海上自衛隊出身であるため、陸軍の慰霊祭に参列するのは、熊谷、都城に次いで3度目であり、最近は、陸軍関係の慰霊祭を重点に参列するようにしております。知覧を訪れるのは2度目で、今回は家内と二人で参列しました。ここ数年、春は南九州の元特攻基地で行われている慰霊祭に参列しております。この時期のこの地方は、多くの花々が咲き乱れ、気候も良く、また各種の温泉もあり、更にまた、美味しい食べ物も豊富です。今回は、2泊3日の旅として計画してみました。霧島の

「新婚旅行」が話題になっていることもあり、人並みに高千穂峰、天の逆鉾、霧島連峰、霧島神宮、古宮址などを訪ねてみたかったです。5月2日早朝羽田発で、空路鹿児島に向かいました。鹿児島空港到着後、連泊予定の「霧島ロイヤルホテル」に荷物を預けて、徒歩で周辺を巡りました。目の前にある高千穂牧場を訪ねて昼食をとった後、足を霧島神宮に伸ばして参拝しました。各地はどこも、連休中、好天に恵まれ、家族連れの人々と車で満ち溢れていました。牧場の中は、鯉のぼりが舞い、新緑の芝生の上で子供達がボール

遊びなど楽しんでいました。宮崎の口蹄疫発生の影響から、みんなの靴の消毒マット、通路への石灰の散布が行われていました。また、牧場から霧島神宮へ向かう道路沿いには、交差点にお巡りさんが立直して、禁止されている牛などの家畜類を載せた車の移動を監視していました。人の世の絶え間ない営みを感じた次第です。標高500メートル程のところにある霧島神宮は、高千穂峰に降臨した天孫をお祀りしているお宮です。大鳥居と大木の深い森に囲まれた朱塗りの立派なお社が印象的でした。参拝者が長蛇の列になって、行儀よくお参りをしておりました。この日は、この神宮周辺でゆったりと時を過ごしました。正に、古い日本神話の世界にタイムスリップしてしまった感じでした。翌日の慰霊祭を控えて、気持ちが悪くなりました。

翌3日は、知覧特攻慰霊祭の当日です。好天に恵まれました。朝早くホテルを立ち、JR日豊本線「霧島神宮」駅經由「鹿児島中央」駅に出ました。約1時間の特急列車「きりしま」の旅は、連休にもかかわらず、5両編成の列車はお客が少なく、パラパラの状態でした。これでは、列車の本数が少なくなるのも当然で、JR九州の経営が

思いやられます。

鹿児島中央駅から知覧の慰霊祭会場までは、主催者が準備してくれた貸切バスで移動しました。9時発の3台ほどのバスは満席でした。11時発の便も準備されていました。参列者にとっては大助かりで、主催者に感謝です。乗車時、当協会の白田理事と出会いました。お姉様達と一緒で、御遺族として毎年のように出席されているのとこのとでした。

10時30分頃、知覧の町に到着しました。受付開始は11時からでしたので、それまでの間に、「特攻の母」として知られている鳥濱トメさんの「富屋食堂」を訪ねました。思っていた以上に会場からはかなり離れていました。体育館での受付を終わって「特攻平和会館」を訪れ、当協会としてCD「あ、特攻」の委託販売などでお世話になっている川床さん、山口さん、売店で力

竹さん他の皆さんにご挨拶をしました。皆さんお元気そうで、特攻隊戦没者慰霊という同じ活動をしている沢山の人々に会うことができました。心強く頼もしく感じました。慰霊祭は、13時に予定通り始まりました。

知覧特攻平和観音堂の前に張られた特製の大テントの中には、1100名を超える沢山の人々が集いました。御

遺族、戦友の皆さんはもとより、全国各地の関係諸団体、遠くは北海道から、更には台湾から参列された戦友の邱錦春さんなどです。子供達の姿も目立ちました。現役やOBの自衛官や、施設建設支援者などで、地域におけるこのような大規模な慰霊祭に参列するのは、初めての経験でした。それは、今後の慰霊活動が続いていくための一つの理想的な姿のように見えました。

慰霊祭は、例年通りの式次第で執行われました。開始に当たり、海上自衛隊鹿屋航空基地から飛来したP3C機が3度にわたり低空で上空通過の慰霊飛行をしてくれました。陸上自衛隊の音楽隊演奏とともに、南九州各地の慰霊祭は、陸海空自衛隊協同の参加を得て、分け隔てなく実施されており、それは、鹿児島地方協力本部のご尽力のお陰であると、心から感謝申し上げます。

慰霊祭は、観音様のお祭りとして、僧侶出仕から退場まで、先ず仏式で行われました。読経と焼香が順次終わつたあと、特攻慰霊顕彰会福元作男会長の「追悼のことば」、県市の各代表、御遺族代表、借行会代表、特操会代表、少飛会代表による「慰霊のことば」がありました。続いて、(社)詩吟朗詠錦城会による献詠、献花、音楽隊の献

奏、南九州市長の挨拶、軍歌の慰霊斉唱をもって、慰霊祭は滞りなく終了しました。

それぞれに想いの籠もった「追悼のことば」でしたが、特に福元顕彰会長のそれは、戦没者の気持ちに率直に想い、残された者達への思い遣りに溢れ、現代の私達が今後なさなければならぬことを考える上でも、素晴らしく、参列者一同に深い感動を与えてくれました。

事前に受付で、昼食のおにぎりが配られていたこともあり、終了後は、そのまま解散になりました。来た時と同じ特別バスで、鹿児島中央駅まで送っていただきましたが、途中希望して、三角兵舎跡地を見せてもらいました。式場から意外と離れた場所に、今は、高い木立の中に、ひっそりと慰霊碑が建っていました。その静かな佇まいには、かえって往時を偲ばせるものがありました。この離れた場所を、特攻隊員達が行き来していたことが分かり、訪ねてよかったと思えました。

JR鹿児島中央駅まで送っていたものの皆さんとお別れしました。再びJRの普通列車に乗って、霧島神宮駅経由「霧島ロイヤルホテル」に帰着しました。長い1日の充実した体験でした。

ホテルの窓からは、高千穂の峰々が、遠く、近く望まれました。「日本の起源」と「特攻」を同時に思い浮かべるとき、また一つ何かを学ぶことができたように感じました。翌日の4日は、高千穂河原や霧島連峰、えびの高原を周ることにしました。

最終日の4日は、「霧島ロイヤルホテル」を発ち、霧島神宮の門前から定期観光バスに乗り、再び霧島神宮の参拝から始まりました。「みやまきりしま」の咲く林の中を曲がりくねった観光道が走っていました。その新緑の中を登り、標高970メートルの高千穂河原に着くと、そこは古宮址、ぼつんと立つ古い鳥居が出迎えてくれました。高千穂峰への登山口でもあります。駐車場脇に、ビジターセンターがあり、そこには高千穂峰に登れない人達のために、様々な展示がされていました。

双眼鏡で、遥かに峰を仰ぎ、また一方、四季の姿を写真やビデオ、模型等で見せてもらいました。天の逆錐のレプリカを見て、その見慣れない形に神話の世界を遙かに想像しました。残された僅かな時間で、古宮址まで登って参拝してきました。そこは、遠く高千穂峰自体を拝む形になっていました。過去に、高千穂峰の噴火で社殿が焼失し、境内の垣根と石垣が残る古宮址に

**沖縄における
平成22年度「義烈空挺隊慰
霊祭」に参加して**

理事長 藤田 幸生

平成22年6月5日(土)、全日本空挺同志会沖縄支部(支部長 桃原優氏)主催による「義烈空挺隊慰霊祭」が執り行われ、当協会代表として参列しましたので、報告いたします。

私は、この慰霊祭に参列するのは、初めてでした。全く知識のない状態からスタートしました。当協会の評議員であり、空挺出身の田中賢一先輩(陸士52期)や関係の皆さんから懇切丁寧なご指導を頂きながら準備を進めました。そのお陰で、前大戦における義烈空挺隊の作戦行動を知るとともに、こ

立つと、鳥居越しに峰を仰ぐ形になります。現在、参詣者で賑う霧島神宮の華やかな朱の社殿と対比することは不適當かも知れませんが、熊野本宮大社の旧社地と同じような、靈気のようなものを感じさせられました。

観光バスの時間の都合で、ゆっくりした時間は取れず、心残りでした。次の機会があれば、是非と思いました。高千穂河原から霧島連峰沿いに、



の沖縄空挺作戦の概要、意義などを理解することができました。

空挺と海上自衛隊出身の私との接点を思い返してみました。それは、ごく僅かです。防衛大1年の夏季訓練で習志野空挺部隊訪問時、83m鉄塔吊り下がり11m鉄塔からの飛び降り体験から始まり、統幕副官時に接した那須元空挺団長の武人らしさ、小学4年生(昭和27年)で訪ねた川南の空挺飛行場跡地の姿、最後は白井長官のとき、

えびの高原まで、ミヤマキリシマ、ノカイドウ、オオヤマレンゲなど春の花々が美しく咲く林の中を移動しました。明るい日差しの中で、中岳、新燃岳、獅子戸岳の麓を縫って進む。空気の美味しいドライブでした。

えびの高原は韓国岳(1700m)の麓の高原(1100m)です。霧島の連峰縦走の入り口です。噴火で二つに分かれた峰の岩肌が印象的でした。

我が国の起こりと、大陸との深い関係

を、改めて考えさせられました。

えびの高原からは、龍馬新婚の旅の後を辿りながら山を下り、鹿児島空港に降り着きました。今回の旅は、特攻隊戦没者慰霊の旅でしたが、口蹄疫から感じた現代の人の営み、神話から始まる日本の起源、自然の美しさ、厳しさ、食べ物の美味しさ、陸軍と海軍の違い、同期生の有り難さなどなど、多



初降下訓練に随行して見た、防大同期の山本空挺団長の勇姿などが、時系列無しで次々に浮かんできます。

今回の参列準備を不安のうちに進め

くのを感じ、考えさせられる学びの旅でした。

できるだけ多くの人々に、春の南九州路を旅し、特攻巡礼、温泉巡り、自然の花々を愛でて楽しんでほしい、そのために改めて「春の南九州特攻慰霊巡拝の栞」のようなものを作ってみました、と思いました。良い旅でした。



ていると、その山本勝元団長が、現在の全日本空挺同志会の会長として、慰霊祭に参列することを知りまして、早速事前に連絡を取り、よろしくと挨拶

しました。同期とは有り難いものです。沖縄では、本当にお世話になり、雨の中無事に参拝でき、懇親会にも参加できました。

さて、沖縄の慰霊祭です。前日の4日、沖縄入りして、第5航空群高橋群指令、沖縄海友会阿波根会長、小西副会長を表敬訪問しました。既に梅雨入りしていて、天気予報は雨が続くとのことでした。5日の慰霊祭の日は、朝7時ホテル発で、第15旅団の濱田さんの車で迎えを受け、山本会長と読谷村の慰霊塔の参拝に向かいました。

この濱田さんには、最初から最後まで公私にわたり、本当に行き届いた心の籠もったお世話を頂きました。この場を借りて御礼を申し上げます。今回の慰霊祭が素晴らしく、気持ちを通じたものになりましたのも、濱田さんのご尽力と、現地での空挺同志会、現役皆さんの気持ちの通じ合いによるものであります。感激しました。

大雨の中でした。読谷の元飛行場跡にある慰霊塔前には、既に関係者が準備

をして待っていてくれました。参拝

しましたが、戦没の地の粗末な木製の半ば朽ち果てた慰霊塔が、原っぱの中にボツンと立っている情景に、理由はともあれ、申し訳ない気持ちで一杯になりました。地元の事情で、今後場所を移して、石碑にすることで調整が進んでいるとのことでした。雨の中、現役

の空挺隊員達十数名と参拝いたしました。神主さんから渡された白石を碑前に一つお供えしました。雨に打たれた石は、曇り空に白く輝いて見え、暗闇の中で、私達に何かを語り掛けているように感じました。そのあと、気持ちを込めて埋めました。

次は、摩文仁の丘の慰霊碑前で行われる慰霊祭です。雨に濡れて靴は泥まみれのまま、高速道路を通って、南部の摩文仁の丘に向かいました。本番のこの慰霊祭が行われた11時から12時の間は、不思議なことに、空はからりと晴れ渡り、打って変わって爽やかでした。空華之塔と隣接した木立の中に佇む「義烈空挺隊慰霊碑」は、周辺がき

れいに清掃されて生花に囲まれていま

した。設けられた祭壇には供え物が供えられ、張られたテントの中には椅子が並べられていました。沖縄にいるO Bや現役の皆さんのご尽力によるものでした。慰霊祭は、神式で、沖宮の宮司さんによって齋行され、全国から集まった空挺同志会の皆さん、現役の習志野から見えた永井空挺団長以下約10名、地元旅団で勤務している現役の皆さん、更には、今年初めて参列されたという地元

の御遺族(戦没者の実妹)お二人が付添付きで見えておられました。慰霊祭は、神儀に加えて「空の神兵」を斉唱し、献歌しました。大きな力強い歌声が、静かな木立に響き渡りました。慰霊祭の間中、見たこともないような白い大きな蝶々が、木立に囲まれた慰霊碑の周囲をふわふわと飛び回っていました。まるで、戦没者の皆さんの御霊のようでした。ここにも白石を一つ、碑の真前に埋めました。

参列者は百名余りでしたが、感動的な心に残る慰霊祭で、今後の理想的な形

に思えました。

義烈空挺隊慰霊碑の周辺には、沢山の慰霊碑や戦跡があって、これらも巡りましたが、晴れ渡った空の下、緑と岩肌、青い空と青い海、白い波打ち際、静かな佇まいに、激戦は想像もできない平和なひと時でした。

夕刻の懇親会には、飛び入りで参加させてもらいました。当初は、知人もいないし、場違いで迷惑かと思っ

た遠慮していましたが、慰霊祭に参列して、急に出たいという気持ちになり、山本会長とも相談して出させてもらうことにしました。ご迷惑をお掛けしましたが、参加させていただいて良かったと思っています。

沖縄における 義烈空挺隊慰霊祭 (空挺同志会沖縄支部) 協会会員 濱田 種夫

沖縄は既に、一足早い夏を迎えている。南国の強烈な太陽に、紺碧の空と海、そして、ハイビスカスや原色の花々が、見事なコントラストの風景を創り出している。ここで65年前、国土防衛

のための血みどろの大激戦が行われたことを想像するのは難しい。 沖縄本島南部の糸満市に、沖縄守備隊・第32軍司令部終焉の地、摩文仁の丘があり、現在そこは平和祈念公園と

なっていて、観光のスポットにもなっている。そこには、幾重にも並ぶ「平和の礎」と平和祈念資料館があり、高い丘に向かう道を頂上に向かって上ると、沖縄線戦没者を追悼する各県の

慰霊碑が整然と並んでいる。その慰霊碑群の西端の一隅に「義烈空挺隊慰霊碑」がある。

義烈空挺隊慰霊祭は、昭和51年に、全日本空挺同志会が「義烈空挺隊慰霊碑」を建立して以来、毎年欠かすことなく、空挺同志会沖縄支部の主催で行われている。全日本空挺同志会は、旧

陸軍挺進部隊出身者、陸上自衛隊空挺団出身者、現役の空挺団隊員や空挺団に勤務したことのある隊員によって構成されている。例年、慰霊祭の参列者は、現職の自衛官がほとんどで、旧軍関係者は、今では陸軍航空隊関係者の会である沖縄翼友会会員のみになってしまう。

本年度は、特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会から藤田理事長が参列され、また、義烈空挺隊隊員山城准尉の御遺族であるお二人の実妹とその御家族が初めて参列された。

沖縄戦に義烈空挺隊が投入された経緯は、次のとおりである。

昭和20年4月1日、沖縄本島に上陸した米軍は、瞬く間に読谷、嘉手納両飛行場を占領し、その1週間後には両飛行場の使用を開始した。沖縄守備隊の砲撃による飛行場使用妨害も効を奏せず、両飛行場より発進する戦闘機により、陸海軍特攻機が、艦船突入前に

空しく撃墜される状況に至った。その両飛行場を一時的にでも制圧し、米戦闘機の迎撃を回避し、米軍艦船への陸海軍航空機特攻を成功させる目的で、義烈空挺隊が沖縄に投入された。

義烈空挺隊は昭和20年5月24日夕、独立第三飛行隊の12機の爆撃機に搭乗し、熊本県の健軍飛行場を発進し、途中4機が機関故障のため、九州に不時着し、8機が沖縄に到達した。内5機が読谷飛行場に、内2機が嘉手納飛行場に胴体着陸を敢行し、所在の航空機施設、燃料等の集積物資を破壊炎上させ、同飛行場を大混乱に陥れ、最後は全員散華された。

義烈空挺隊には、2名の沖縄出身の隊員がいた。山城金榮准尉と比嘉弘春伍長である。両隊員は攻撃目標を嘉手納飛行場としていた。

比嘉伍長の搭乗機は、機関故障のため、沖縄に辿り着けず、九州地区に不時着した。その際、比嘉伍長は左耳を失う重傷を負う。

山城准尉の搭乗機は沖縄上空に達し、米軍の夜間戦闘機の攻撃を躲し、激烈な対空砲火を冒して突入に成功した。山城准尉は、沖縄本島北部の大宜味村喜如嘉の出身で、長身で体格が良く、優しい人であったと遺族は言う。最愛の妻と愛娘を残しての特攻出撃

であった。出撃前の報道に対して、愛する妻と娘の為に突入すると語った。

慰霊祭では、空挺同志会沖縄支部長の祭文奏上の後、空挺同志会会長と第一空挺団長が追悼文を奉読した。

ここでは、全日本空挺同志会顧問・田中賢一先生の追悼の辞を紹介する。

「義烈」の碑に詣でて

魂魄寄り添う摩文仁の丘 鎮まるか
義烈の士 思い出す百余のをのこ
奥山隊長の指差す所 なんか遅れをとるべきや

戦勢日に非なれども 乃公いずんばの意気 挺身殉国の耿き心 我が後に続く者あらん 散るべきときぞ美しく

梓弓 引きかへさざる ますらをの
ころ 錬りしきも 笑顔で発ちし健
軍の基地

風吹けど雨降れど 巖として立つ義
烈の碑 訪う人に 語る石ぶみ 人知
るやいなや 我が国にかかる人 あり
しを

つづく者ありと思えばひたすらに
もののふのみち駆けしをのこら



山城金榮准尉

をのこらの抱きし心後の人

思っておさん石ぶみを見て

語りてもなお語りても尽きざるは

義烈隊員 在りし姿を

国思う心うけつく平成の

さきもり達ぞみそなわせあれ

義烈空挺隊の関係者の多くが御高齢となり、あるいは物故され、慰霊祭への参加も困難になっている。義烈空挺隊の意志を受け継ぐためにも、慰霊祭が形骸化することのないように、今一度、義烈空挺隊を知る方々にお話を聞き、義烈空挺隊隊員に思いを致す必要を強く感じている。

義烈空挺隊慰霊祭

田中 賢一

この慰霊祭の特色

- ・ 碑のある出撃地健軍と目標地沖繩の両方で行われている。
- ・ 自衛隊空挺関係者が主催している。

健軍で行われた慰霊祭

碑は自衛隊健軍駐屯地内にあり、毎年空挺同志会熊本県支部の手で行われていたが、今年は碑の裏に義烈戦死者の氏名を刻んだ金属板を詰め込んだのでその披露も兼ねて盛大に行われた。参加者は90名で、空挺関係者は60名、他は地元自衛隊並びに友好団体の人だった。空挺関係者の中で昔の空挺隊員は僅か1名で、他は自衛隊空挺関係者だった。時の流れを知る傍らこの行事が永続することを現している。

往時を偲ぶ歌

- 一、南陲の空 雲荒れて
菊水の旗 いく度か
わが陣頭に 翻えり
若き命は燃えたちぬ
その名床しき健軍に
出撃の陣ととのいぬ
われ育みし故郷よ
栄あれ永久にいざさらば

二、人生わずか 五十年

下天の内を比ぶれば
夢まぼろしと人はいう
その半ばにて散るとても
見はてぬ夢に変わらなし
今こそ往かん 美しく
後つぐ人にこと伝てて
われに続けや 若人よ

三、奥山諏訪部の両雄は

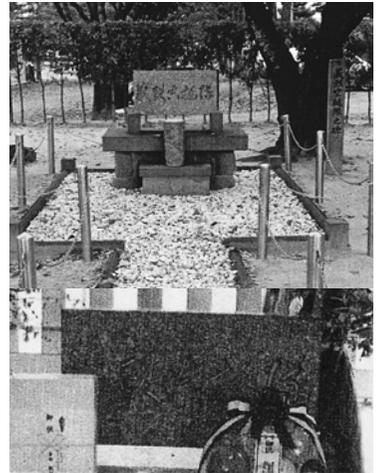
笑を湛えて手を握り
心に残るくまもなし
今日この為に我ら皆
春療乱の 花の日も
秋蕭条の 月の夜も
鋭心磨きひたすらに
武夫の道あゆみ来し
四、金峰山に 沈む陽に
うち連れ帰るとも鴉
幼き思い 今絶ちて
爆音消ゆる西の果て
雲間に洩るる月三更
奥山ついた 突入す
唯一言の 無線にて
永久に絆はと絶えたり

四、金峰山に 沈む陽に

唯一言の 無線にて
永久に絆はと絶えたり

沖繩で行われた慰霊祭

（あとは沖繩の部）
碑は摩文仁台上にあり、毎年空挺同志会沖繩支部の手で行われている。沖繩支部は習志野の空挺団から沖繩の自衛隊に転属した現職自衛官及び退職し



健軍の慰霊祭



摩文仁の慰霊祭

ず、次の歌を捧げた。

つづく者ありと思へばひたすらに
もののふのみち駈けしをのこら
をのこらの抱きし心後の人に
語りきかさんこの石ぶみは
語りてもなお語りても尽きざるは
義烈隊員 在りしすがたを
国おもう心うけつぐ平成の
さきもり達ぞみそなわせあれ

五、北飛行場 異変あり

（健軍の記事に掲載した歌の続き）
着陸するな回避せよ
敵の電波は乱れ飛び
阿修羅の如き活躍に
応じて立てり特攻機
若き命は燃ゆるとも
天地懸河の 大勢を
止むる術は既になし
六、「待つありて眺むる
月の涼しさ」と

詠いし人よ今いざこ
ハイビスカスの花紅く
平和の姿よみがえる
星辰めぐり六十年余
征きにし人の面影は
久遠の若さ保ちあり
若人 義烈空挺隊
ああ 義烈空挺隊

た者で構成されている。

今回は支部所属の会員に空挺同志会
会長や習志野の空挺団長以下が加わり
80名が参列した。私は昨年まで参加し
ていたが、歩行覚束なくなり参加でき

観音湯の話

田中 賢一

健軍飛行場の近くの黒髪町に、今は廃業してしまつたが、観音湯という銭湯があつた。

義烈空挺隊が健軍に移つてから毎日の激しい訓練を癒すのは入湯だつた。飛行隊の兵舎まで行けば浴場があつたが、手狭なので町の銭湯に行く者もいた。谷川曹長、荒間伍長、菊田伍長、川崎伍長、中本伍長の5人は、よく連れだつて黒髪町の銭湯に行つた。訓練の汗と泥で汚れた軍服をまよつていたが、銭湯の女主人の堤はつさんは、この5人を我が子のように慈しみ、茶菓を出したり、繕い物を引き受けたりしてくれた。5人は故郷の母や姉を思い出し、座敷に上がり、話し込んだ。話は子供の頃の思い出が多く、訓練のことや自分らの任務について語ることはなかつた。

そんなことが10回ばかりあつた後、5人は胸に落下傘部隊の徽章をつけた最上装の軍服に身を固め、この家の玄関に立った。「小母さん、いろいろお世話になりました。今から出発します。この金はまだ私共には使い途がなくなりましたから」と、谷川曹長が代表し

て述べ、金一封を差し出した。

はつさんは大方の察しはついたが、どこに行くのか尋ねるわけにもゆかないので、涙を抑えて見送つた。一、二、三日後に配達された手紙を見て、はつさんは畳の上に泣き伏してしまつた。

「おばさん、毎度御無理申し上げます。に有り難くお礼申し上げます。待機中の私達も愈々最後の任務に向かい突進致します。私達にいつも親切に慰めて下さつたおばさんの気持ちには感謝のほかありません。私達も笑つて風に向かい笑つて元気一杯に戦い、笑つて国に殉じ、笑つて皆様の御期待に報ゆる覚悟です。どうぞ元気に皇国護持の為東亜防衛の為頑張つて下さい。最後に御親切に対し感謝とお礼を申し上げ御一同様の健康を祈り上げます。愛機南に飛ぶ 乱筆にてさようなら 谷川鉄男」

葉半紙に鉛筆で認め、軍用の封筒に入れ投函してある。日付けはないが、出撃の日の午前中に書いたらしい。

義烈空挺隊のことは連日新聞紙上を賑わした。全員玉碎と聞き、はつさんは涙にくれ、何とかあの人達の御霊を慰めてやらねばならぬと、置いていった75円を基金として、自宅横の道に面して普賢菩薩像を建て、毎朝拝礼を欠かさなかつた。



普賢菩薩像



谷川曹長以下が堤さんに別れを告げる (故松本武彦画)

はつさんは昭和54年、75歳で逝去され、息子の堤憲蔵氏も平成21年に逝去され、現在は憲蔵氏の妻幸子様が普賢菩薩を守護し、英霊の供養を続けておられる。

「観音湯」は戦後60余年も地域の人に愛され癒しの湯として親しまれてきたが、平成21年12月末廃業された。

普賢菩薩の横の石碑に刻まれた文
此処ニ祀ル仏像ハ普賢菩薩ト云ウ普賢菩薩ハ三尊ノ一体トシテ釈迦如来ノ右ニ位置シ衆生ヲ救イ給ウ慈悲深イミホトケニシテ一心ニ信心スレバ願イ之ニ叶イ人々ノ苦悩ヲトリ去リ不老ノ徳ヲ与エ給ウ

太平洋戦争モ敗色濃イ昭和二十年春醋ノ頃毎日入浴ニ来ル一連ノ兵士アリ全国ヨリ選抜サレタ精鋭ノ特攻下士官其ノ名モ義烈空挺隊奥山隊員ト聞ク五月二十四日沖繩作戦ニ特攻出撃ノ為最後ノ決別ニ見ユ

彼等憂国ノ志士達ハ別離ノ水ヲ水筒ニ押シ戴キ後事ヲ託シテ出撃全員万朶ノ桜ト散ル

嗚呼一掬ノ涙万斛ノ恨既ニ筆舌ノ及ブ所ニ非ズシテ慟哭ノミ

カクシテ有志達トノ約束ドオリ昭和二十年九月二十四日普賢菩薩像ヲ設立シ朝夕普賢観音経ヲ読経シテ奥山隊百十三柱ノ英霊ニ捧ゲル

昭和四十七年五月建立

堤 はつ



堤 はつさん (昭和47年)

回天の追憶と祈り

(抄その三)

鳥巢 建之助

〔編注〕筆者は海軍兵学校58期の海軍

中佐で、昭和5年海兵卒、水雷学校高等科、潜水学校乙種、甲種などを修了し、呂65潜、伊165潜の両艦長、第11潜水戦隊参謀を歴任。19年海軍大学校甲種学生を経て第6艦隊水雷主務参謀となり、戦争末期には回天特攻作戦担当参謀を務めた。戦後は回天や潜水艦に関する多くの著書を執筆されたが、実は、鳥巢さんは海兵に入られる前1年間、編者と同じ旧制福岡高校に在学しておられる。修猷館中学から将来の学者を目指して福岡高校理科(3回生)に入学されたが、父親から「男の兄弟が多い中で一人も軍人を出してないのはお国に対して申し訳ない、お前が軍人になってお国のために奉公してくれないか」と懇願されて、海兵受験を決意したとのことである。したがって、旧制福岡の同窓生に準じた抜いで、同窓会の会合にも度々出席され、卓話を拝聴したこともある。

表題の小冊子は、平成11年5月、同窓会月例会の卓話(演題「私の海軍生活の思い出」)の際に頂いたもので、

その前年、鳥巢さんが卒寿を記念して纏められた私家版(A5判58頁)で、特に、回天特攻隊員の慰霊顕彰に関して書き残された貴重な資料でもあると思われるので、その一部を紹介させていただいた。」

七 回天、洋上作戦へ転換決す

昭和20年4月15日の夜、眠れぬ夜は司令部庁舎の傍らにある「六号艇神社」にお参りするのが例であったが、その夜も境内に足を運び、社前に深く頭を垂れた。35年前の明治43年(1910年)4月15日、広島湾内で沈没し、殉職した佐久間勉艇長(海兵29期大尉)以下艇員15名の霊を前にして、同じ運命を辿っていった黒木大尉の声や、彼の遺骨を抱いてウルシーへ突入していった仁科中尉の顔を思い出した。また、我が友、井元正之や戦友達が叫び続けていた、交通破壊戦こそ潜水艦の本務だとの意見が耳の底に甦ってきた。

次の朝、私は起き抜けに、佐々木半九参謀長(海兵45期)の部屋へ行った。そして、潜水艦の沖繩への突入を中止し、洋上で使用してもらいたい、と懇願した。

参謀長は、またかと思つたに違いな

い。私は、沖繩への突入は元も子もなぐす戦法であり、この際回天も魚雷同様、洋上で臨機応変に活用すべきである、と進言した。

「回天の洋上使用には成算があるかね」

「大丈夫です。航行艦襲撃訓練も相回数を重ね、立派な成績を取っています。大津島の板倉少佐も低速の輸送船団ならば自信があると言っていますし、潜水艦長も回天搭乗員もこれを切望しています」

「なかなか難しい問題だね。第一、長官が承知してくれるかどうかだね」
確かに今までのところ、長官は反対のようであった。

参謀長は、いつどこで襲撃できるかどうか分からぬ洋上で、しかも非常に難しい航行艦を襲撃することは、回天では至難であると考えている三輪茂義長官(海兵39期)が承知する筈はないと思っており、また、参謀長自身もまだ私の意見を十分支持するまでの確信を持たない現状では、彼自身の腰が重いのは無理もなかった。しかし、私は食いが下がった。

やっと参謀長は重い腰を上げ、長官室へ行った。私は折る気持ちで参謀長の後ろ姿を見詰めていた。しかし、長官は予想どおり反対であった。「回天

を搭載して、いつ、どこで会敵するか分からない洋上で作戦することは、なかなか困難であり、回天搭乗員の精神問題から考えても賛成しかねる、また太平洋の真ん中で航行艦を襲撃するなどということは、君が言うように、そう容易なものじゃなく、成算ありとは考えられぬ」と言われるのだ。

いちいちもつともであるが、これらのことは考えに考え抜いた上での意見具申であり、私は既に覚悟していた。「主務参謀の意見がどうしても聞いていただけなければ、参謀は勤まりません。誰か他の人と替えていただきたいのです」参謀長も困ったようであった。「じゃ、君から直接長官に話してみ給え」そこで私は提言した。「それじゃ、幕僚会議を開いていただき、その席に長官も出してもらい、そこで私の所信を申し上げることにしてはどうでしょうか」と言った。参謀長は「それはいいだろう」と賛成し、午前10時から作戦室で幕僚会議が開かれた。

作戦室のテーブルに参謀らが座り、やがて長官が入ってくると、少し離れた円テーブルの席に着いた。参謀長が立ち、「今から緊急幕僚会議を開きます。では水雷参謀、意見を述べ給え」と私を指名した。私は次のように話した。

「航空機、対潜艦艇で嚴重な警戒網を張り巡らしている沖繩周辺に、潜水艦をつぎ込むのは、いたずらに潜水艦を墓場に投げ込むようなものであって、こんな作戦を繰り返していたならば、残りの潜水艦も、瞬く間に全滅してしまうのではありますまいか、この際、潜水艦の使用海面を洋上に変更し、敵の警戒の虚を突き、進出鬼没の妙を発揮すべきであります。

回天も魚雷も、洋上で、臨機応変に、潜水艦長の判断によって使用させるべきであつて、長い敵の補給路のどこかで出血を強いることが、最も得策ではないかと考えられます。そして、これには次のような利点があります。

第一に、随時、随所に自主的に攻撃が可能になります。

第二に、敵の警戒は困難になり、被害を減少させることができます。

第三に、戦果の確認が容易になります。

第四に、回天戦、魚雷戦の使い分けが自在となります。

第五に、敵の兵力を分散させ、その攻撃力を弱めることができます。

第六に、空船を攻撃するような心配がなくなります。

もちろん、航行艦に対する回天の襲撃が、停泊艦襲撃に比べ、非常に困難

であることは言うまでもありませんが、低速で運動が比較的不自由な船団に対しては十分成果があります。最も重大なことは、沖繩のような警戒嚴重な局地への突入は、元も子もなくしてしまふ危険が大であることで、潜水艦長は言うまでもなく、回天搭乗員も、戦果発揚のため、洋上作戦を熱望しております。どうか、潜水艦の真価を発揮させるためにも、回天搭乗員の死を無駄にしないためにも、この際は非洋上使用に切り替えていただきたいのであります」と、ここ約2ヵ月間、大津島や光基地で訓練してきた航行艦襲撃の成績を合わせ説明しながら、一生懸命懇願した。

三輪長官は沈黙考の態であつた。私は心の中で祈りながら、長官の顔を見詰めた。息詰まる教分が過ぎた。「よろしい。それでは今度出撃する伊47潜と伊36潜の2隻に限り、洋上で使用してみることによしよう。ただし、うまくゆかなければ、また沖繩への突入に切り替える」と、長官の決断が下つた。私は長い念願が叶えられた思いで、大きく吐息した。責任の重大さを痛感せずにはおれなかつた。

会議終了後、この潜水艦使用方針が、長距離秘密電話で、日吉の慶應義塾の中にある聯合艦隊司令部へ伝えられ

た。井浦先任参謀が渋谷竜輝参謀(海兵52期)に説明し、了承を得た。続いて霞ヶ関の大本営につながれた。井浦先任参謀が藤森担当部員(海兵56期)に説明するのだが、なかなか理解しない。業を煮やした井浦先任参謀は「おい水雷参謀替わってくれ」と私に受話器を渡した。またしても彼と私の間で口論となつた。彼は三輪長官と大体同じような理由で反対し、なかなか納得しない。私は最後に「潜水艦作戦のことは、聯合艦隊があり、六艦隊があるのだ。長官が決裁し、聯合艦隊でも了承済みだ。こんなことに一々、大本営が口出しするのは止めてもらいたい」と怒声を発した。彼も今度の2隻に限りということでしぶしぶ納得したが、私は潜水艦作戦の救い難いものに直面したと感ぜずにはおれなかつた。

しかし、とにかく、回天の洋上作戦の難関三つを乗り越えることができたが、問題はこれからであつた。果たして私の念願が、構想が実現できるか、否かの本番は目前にある。私は一刻もぐずぐずしている場合ではないので、すぐに広(呉の東の町)の水上機航空基地に待機中の潜水艦搭載用二座水艇を司令部前の海上に即刻着水するように命じた。15分もすると、所定水面に着水、大津島へ向かつた。

徳島湾外に着いてみると、回天訓練の最中で、数条の白い航跡が、午後の太陽に輝いている。遙かな沖合いに潜水艦が浮上し、高速度で白波をおっている。白波は魚雷艇の航跡で、その前方を回天が高速度で水中を突進しているのである。魚雷艇は全身波しぶきを浴びながら、回天の航跡を見失うまいと必死の追跡をやっているのである。昨春秋以来、来る日も来る日も寒風と戦い、激浪に全身を濡らして、回天と取り組み、昼は海上訓練に、夜は兵器や射法の研究に、二十歳前後の若人たちは全身全霊を打ち込んだのであるが、これまでに既に7人の殉職者を出し、48名が戦死していた。

訓練状況を上空から暫く見ていた私は、水艇を大津島基地の発着所前に着水させ、第二特攻戦隊司令部に行き、長井司令官、有近六次先任参謀、板倉指揮官の3人に、本日午前、決定された洋上作戦につき説明、今後の訓練や作戦につき打ち合わせを行った。

板倉指揮官は(参謀兼務)はすぐに光基地に連絡するとともに、搭乗員達を集め、航行艦襲撃に対する更に突っ込んだ研究、準備に取り掛かつた。

回天基地の大津島でも光でも、大きな張りが出てきた。次の日から航行艦襲撃訓練が、実戦さながらの状態で行

われていった。その直後、水雷戦隊の駆逐艦が目標艦として協力することに。駆逐艦を目標にして襲撃、その艦底を航過して命中の成否を確認する実戦的訓練は、若い搭乗員達にとつて、血潮の奔騰を感じずにはおられなかった。

一方、潜水艦の方でも内殻と同じ強度の交通筒が全回天に対して装備され、潜水艦は潜航のまま回天内への出入が可能になった。

八 天武隊の出撃

20年4月中旬、伊47潜と伊36潜で、「回天特別攻撃隊天武隊」が編成され、伊47潜は4月20日、沖繩とウルシーを結ぶ中間附近へ出撃、伊36潜は4月22日、沖繩とサイパンを結ぶ海域へ出撃が決定された。

両艦の奮戦模様は省略するが、伊36潜は4月27日の夜明け前、水平線の彼方に一団の黒い影を発見した。菅昌徹昭艦長(海兵65期)は小山のように近づいてくる黒影を、沖繩へ向かう大船団であることを確認し、早速回天の全機突撃を決心した。それは長い間夢想だにできぬ千載一遇の好機であった。

「戦闘・魚雷戦・回天戦」が発令された。

明け初めた西太平洋の真っ只中を威

風堂々正に海を圧して大船団がゆく。対勢が方位角50度、距離約7千メートルになった。魚雷攻撃には遠過ぎる。回天攻撃には天が与えてくれた詭え向きの関係位置となった。

艦長は回天攻撃を決意し、深い祈りを込めて回天の発進を命じた。4基の回天は勇躍突進して行った。

潜水艦は駆逐艦が近づいてくるのを認め、深々度に潜航し、聴音で戦果を確かめる戦法をとった。

4基の回天が目標に到達するまでの時間はおおよそ10分前後であった。2人の水中聴音員は、回天の駛走状況を逐一報告してくる。四つの鋭い音源が大きな広い船団の音源の中へ突入してゆく。そして、次第にその中に溶け込んでゆくかのようである。非常に長い時間が過ぎて行つたように感じた。しかし、実際は10分を過ぎたばかりであった。突如、大爆発音が聞こえてきた。やがて二発目、三発目、四発目、約5分の間に全基が、4隻の輸送船に体当たりを敢行したのであった。恐ろしい大爆発音と震動が潜水艦を身震いさせた。

八木梯二中尉、安部英雄二飛曹、松田光雄二飛曹、海老原清三郎二飛曹の4人の若人は敵船もろとも海底に沈んでいった。

4月27日の夜、伊47潜は、伊36潜の戦闘速報を受信した。折田艦長以下全乗組員は、伊36潜に負けてなるかと張り切った。特に6名の回天搭乗員の血は湧き返つたに違いない。しかし、会敵の機は10日間訪れなかった。新しく装備したレーダーと双眼鏡による見張りを頼りに暗夜の海上を索敵していた。5月1日20時頃、対空レーダーが固定目標を捕捉し、精密探知中と報告した。折田艦長は、直ちに目標へ向針し、増速した。

遂に待ちに待った敵船団を捕捉できた。距離約2万5千メートル、輸送船団らしい。暗夜のことだし、回天は使えない。潜水艦はしぶきを浴びながら突進を続ける。レーダーは、はつきりと船団の映像を捕捉している。距離は約10千メートル。これ以上の水

上突撃はかえつて発見されるおそれがあり、折田艦長は潜航突撃に移った。水中聴音器はすぐ音源を捉えた。「艦首方向に集団音感三！」水中全速力で15分間航走し、夜間潜望鏡で目標を捜すこと約5分、水平線の上に黒い輪を伏せたようにして、僅かに盛り上がったものが見え出した。

「コレ！船影らしい。約6千」右7度」航海長が度盛りを読む。右へ20度変針し、10分間水中高速。この間艦内では

魚雷戦の準備が完了していた。微速力に落とし、潜望鏡を上げ、暗夜の海に敵影を捜す。

「コレ船影一つ。方位角右約60度、距離約4千、船種不明」

「左5度」折田艦長は、最良の射点と判断した。

「右4度の音源が一番高い、感4、その左右にも数隻の音源あり」「目標はだんだん右へ移動する、いま左1度」艦長は「今だ！」と決断。「発射雷数4、魚雷深度3メートル」・「発射始め！」・「用意ーテ！」

午後9時3分、確認している敵船の中央部を照準し、4本の魚雷を3秒間隔で発射した。

「航海長、命中まで何分かかるか！」

「2分40秒です」「長いね」その長い2分40秒が過ぎたが、手応えがない。潜望鏡の船影も、聴音の音源も変わらない。

艦長は苛立ち、「二番連管、発射用意急げ！」と下令した。その時、潜望鏡の視野に水柱1本が立った。

「1発命中！」次いで2本目、3本目の水柱が上がった。それとほとんど同時に「カチ」続いて「ドカーン」と爆

発音が3発響き、艦体を強く揺さぶった。「音源の周囲に雑音が大きくなった。沈没するらしい」「他の音源は急

激に遠ざかる」確かに何物かを撃沈したのである。

次の日から途端に忙しくなった。5月2日○九三〇、音源を捉え、直ちに「総員配置につけ!」「回天戦、魚雷戦用意!」「深さ19、急げ!」の号令が矢継ぎ早にかけられ、回天搭乗員6名も回天内に潜り込み、発進準備を完了し、司令塔に報告した。

音源の方向約7メートルに大型駆逐艦2隻と、更に遠距離に輸送船2隻を発見した。魚雷攻撃は無理であったが、回天ならば成功の算あり、と艦長は判断し、「1号艇、3号艇発進用意!」と、柿崎中尉と山口一曹に先発を命じた。

発進して21分と25分後、ほぼ同一方向に第一、第二の大爆発音が聞かれた。「駆逐艦を含む船団の音源は消滅しました」と聴音報告がきた。折田艦長以下全員、柿崎、山口両艇は2隻の駆逐艦か商船を撃沈したと確信した。それから間もなく、聴音器は音源を捕捉した。そして、大型駆逐艦2隻が北西方向へ航進するのを発見した。

艦長は再び回天攻撃を決意した。「4号艇発進用意!」古川上曹は、手際よく発進用意を完了した。艦長は、敵の針路、速力、全没航走時間などを指示した。これで敵船の近くで浮上し

観測、突撃が可能と推定された。あとは搭乗員の腕次第である。ベテランの古川上曹は、余裕綽々「御健闘を祈ります。さようなら」と言い、突進して行った。

指示した全没25分が過ぎ、30分頃には轟発音が聞かれる予定であったが、35分が過ぎ、45分が過ぎた。しかし何も起こらなかった。艦長は切齒した。あとは神仏に祈るのみであった。

48分、聴音報告が入った。「音源の消滅した方向に今、回天の感度が出ました」「突入時の全力突撃だ!」その直後、大轟発音が、長い余韻を引いて伝わってきた。

「やったぞ!古川上曹!」艦長以下、全乗員の眼に涙が浮かんでいた。その夜、大きく位置を変え、残りの回天3基の整備をやり、5月5日、沖繩とグアムの間で待敵した。海水温度の影響か、聴音の精度が低下したように感ぜられた。そこで、3時間ごとに潜望鏡を上げ、海面を直接見張るとともに、その間、対空レーダーを使用した。

6日午前9時、対空レーダーが約40キロに固定目標をつかまえた。聴音室は緊張し、必死に聴音し、居住区では通風モーターも扇風機も止め、一切の雑音を防止した。もちろん推進器も最

微速とした。10時過ぎ、遂に音源をつかまえた。「音源左30度、感2」「総員配置につけ!」「回天戦、魚雷戦用意!」艦長は潜望鏡に飛びつき、聴音方向に潜望鏡を廻した。艦影が一つ入った。灰色の巡洋艦である。距離約8千メートル、速力16ノット前後と判断。回天の攻撃は可能と見た。しかし敵艦は大角度の之字運動をやりながら航行しているようであった。

「2号艇、6号艇発進用意!」を下令したが、6号艇は電話がうまく通じない。艦長は、2号艇の前田中尉を発進させることに決心した。

回天突進後間もなく、敵艦の音源の感度は高くなり、低くなり、また高くなる。盛んに避退運動をやっている敵艦が推察される。20分が過ぎた。回天と目標艦の死闘が続けられているのを思いながら、折田艦長は苦悩した。そして魚雷による救援作戦を考えた。

「発射雷数4、魚雷深度4メートル」と発令した。ところがこの号令が発射管室に届かぬかぬかの時、グワーンと大爆発音が響いた。命中!発進後24分であった。「その後目標附近、騒音大となり、推進器音は消滅しました」との報告を聞

き、艦長は、「巡洋艦は撃沈!」と艦内に知らせた。5月6日夕刻、伊47潜は浮上し、戦闘速報を発信した。5月7日夜、ラジオ放送は、久しく聞かれなかった軍艦マーチに続いて、天武隊の戦果を報道した。それは次のとおりである。「臨時ニュースを申し上げます。五月六日午後八時、大本営発表 四月下旬以来、沖繩周辺海域に敵を索めて出動中の我が潜水艦は、敵の輸送船団並びに護衛部隊に対し壮烈果敢なる攻撃を加えつつあるが、今日までの報告により判明せる戦果次の如し。

- 一、轟沈 軽巡洋艦 一隻
- 二、撃沈 輸送船 一隻
- 三、撃破 輸送船 一隻
- 四、この戦闘に殊勲の潜水艦長は、海軍少佐折田善次、同じく菅昌徹昭なり

以上 大本営のこの発表は、もちろん、折田、菅昌両艦長の戦闘速報に基づくものであり、しかも、潜望鏡による視認、確認ではなかった。したがって、多くの疑念を残すものがあつた。しかも戦後の研究でも立証されていない。しかし、空の空なるものとは言い難く、筆

者は、本件につき、次のように考えている。

九 歓声と驚喜

輸送船の喪失は、陸軍、海軍、民間の各種の船舶があり、調査が困難なこと、あるいはその当時、報道が禁止された可能性も考えられ、結局、闇から闇に葬られたとも考えられよう。歴史の真実はまだ不明のままのものも多いのである。そして厳然たる史実は、多くの回天の若人が突撃し、大爆発が起こっていること、そして潜水艦は2隻とも帰還しており、両艦長は自信をもって言明していることである。そして後でまた触れるが、マッカーサー司令部のサザランド参謀長が、回天の恐怖をはっきり言明していることである。

戦争の末期、歓声を発し、終戦の直後、驚喜したことを時々想起するのであるが、それは次のような経験によるものである。

戦争は既に断末魔であった昭和20年7月30日朝、私は呉にあった第六艦隊司令部の作戦室で、当直勤務中であつた。すると、作戦中の伊58潜水艦「戦闘速報」が届いた。それを見た途端、思わず私は「やった」と叫んでいた。それはこれまで一度もなかった歓声であつた。伊58潜の電報には、次のように書かれてあつた。

「7月28日、回天2基発進、油槽船及び駆逐艦撃沈、29日、アイダホ型戦艦に対し、魚雷6本発射、3本命中撃沈「確実」

1944年秋、神風特別攻撃隊がレイテの空に出現し、間もなく11月20日ウルシー環礁に水中特攻隊が姿を見せた時、連合国軍の恐慌は言語に絶するものであつた。

さて天武隊の伊36、伊47の作戦は、艦長が自由に判断し、臨機応変、神出鬼没に行動し、魚雷と回天を使い分けて成功した洋上作戦であつたが、海軍戦史、潜水艦戦史の中で、脚光を浴びるものではなかつた。しかし、この天武隊の作戦は、2隻の潜水艦が無事帰投し、戦果の説明を公表する幸運に恵まれた。そして潜水艦戦を大転換させることができた。

「ところで君、先般、終戦処理打ち合わせのため、陸軍の河辺虎四郎中将と二人でマニラのマッカーサー司令部へ出頭し、サザランド参謀長に面接した。すると真つ先に海軍代表の私に真剣な表情で尋ねてきた。「回天を搭載した潜水艦が、洋上に何隻残っているか？」と。私は戸惑つたが、答えた。「約10隻ばかり」と。これを耳にした途端に、彼の血相は変わり、震えるような声で、『それは大変だ！一刻も早く引き揚げさせてもらわねば困る』と叫んだ」と。横山少将は、サザランド参謀長の態度を思い浮かべながら語つた。

こうして日本海軍潜水艦戦は、世界無敵のアメリカ海軍に痛烈な打撃を与えることになるのである。

私は、横山少将の話を耳にした時、無限の感銘というべきか、正に驚喜ともいふべき胸のうずきを禁せずにはおれなかつた。

この時私は、伊58潜艦長橋本以行中佐(海兵59期)は間違いなく大物を仕留めたと確信したのであつた。しかしそれが、インディアナポリスであり、アメリカ海軍を震撼させ、更に後々まで問題を残した軍艦であつたことを知るには幾歳月かが掛かつた。そして、私自身が直接間接深い因縁があつたことを実感するまでには、また年月が掛かつた。

「第二次大戦米海軍年表」によると「護衛駆逐艦アンダーヒル(DES-682)はルソン沖で、人間魚雷により損傷し、米軍艦によつて沈められた。北緯19度20分、東経126度42分」とあるが、「米海軍駆逐艦作戦史」では次のように生々しく描かれている。

その歓声の直後、広島への原爆、ソ

「米海軍少佐R・M・ニューカム指揮の護衛駆逐艦アンダーヒル(排水量1400トン)は、タンカー及び輸送船合計7隻を護送する護衛部隊の一艦として、7月24日の午後、ルソン島の

北端の東方250カイリ附近を航行中であつた。午後2時、船団が針路を変え新しい護衛配備につこうと行動している時、アンダーヒルは海中に異様な反響を聞いた。何かおると見て、直ちに戦闘行動を開始した。

最初は浮遊機雷ではないかと考え、砲撃で撃沈しようとした。ところが、急に潜望鏡が現れ、敵潜水艦らしいと分かつた。そこで、哨戒艦と2隻で協同攻撃に移り、爆雷攻撃を開始した。アンダーヒルの生き残り士官の一人は、次のように言っている。

「艦長が『日本の敵潜1隻捕捉、油と破片確認』と報告しているのを聞いた。ところがその直後、誰かが『突っ込んでくる』と叫ぶのが耳に入り、衝突の予感で神経が硬直した。次の瞬間、二つの鋭い衝撃を感じ、途端に大爆発が起こつた。受聴器は吹っ飛び、海図室は真っ暗になった。手探りで受聴器を探していると、海水がドッと浸入してきた。聴音室へ行こうとしたが、駄目だった。艦首も艦橋もマストも何もかも吹っ飛んでしまつていた」

アンダーヒルの戦闘記録は、何一つ残っていない。また、記録することのできた士官は全滅してしまつた。したがって、当時の詳しい事情は分からない。しかし、艦自身が、何が起こつた

かを身をもって説明している。

側にいた哨戒艦の報告によると、「潜望鏡を発見した時、ニューカム艦長は、敵を撃沈するための行動を開始し、艦首が大きく波を左右にかき分けながら突進して行くのが見えた。ところが、その直後、大爆発が起こり、艦橋が見えなくなり、荒れ狂う火災が湧き起こつた。附近の海面に大小様々の破片が雨のように降り注いだ。

火災が消えた時、煙突から前の方は切断されていた。このちよん切られた艦首は、あれよあれよという間に、渦を巻きながら右舷の方へ沈んでいった。艦首がなくなつたアンダーヒルは、ずたずたに引きちぎられた機械類を振り落としたながら、海面をのたうち回つた。この哀れな残骸は、数時間後友軍の大砲で撃沈された。

護衛駆逐艦アンダーヒルは、正しく回天に激突され、撃沈されたのであるが、228名の乗組員中112名が戦死し、士官は14名中、ニューカム艦長以下10名が艦と運命を共にした」

このアンダーヒルの撃沈は、伊53潜の前任回天搭乗員勝山淳中尉(海兵73期)が、態勢が悪く、魚雷攻撃も回天突進も不利な状況で、大場艦長(海兵62期)がやや躊躇していたのを、特に切望し、唯一人突進し、奇蹟とも言う

べき殊勲を立てたのである。

それから6日後、アメリカ海軍は悔いを千歳に残すとも言ふべき油断によつて生起したインディアナポリスの沈没という一大悲劇に直面するのである。インディアナポリスの沈没は、正に奇蹟中の奇蹟とも言ふべき事件であるが、この悲劇に至るまでの経緯は、これまた最高の栄光から最悪の悲惨への、天国から地獄への道でもあつた。

インディアナポリスと

マックベイ艦長

インディアナポリスは、アメリカ海軍の代表とも言ふべき花形であつた。

1932年(昭和7年)11月15日、インディアナポリス型の第一艦として就役した。1929年のロンドン軍縮条約後に建造された最初の大型艦であるが、1933年夏、ルーズベルト大統領を乗せて大西洋を巡航し、その年の暮れ、スワンソン海軍長官を乗せ、太平洋地区巡航をやり、ハワイまで出掛けた。その翌年、ニューヨーク沖での観艦式では、ルーズベルト大統領が艦橋に立ち、全艦隊を観閲した。

太平洋戦争開戦の際は、1941年12月7日、パール・ハーバーの南方500マイルにあるジョンストン島沖

で艦砲射撃訓練中であつたが、すぐ日本艦隊搜索に従事した。その後太平洋の隅から隅まで走り回り、後年は第五艦隊司令長官スプルアンズ大將が搭乗し、沖繩戦に参加した。艦長はチャールズ・マックベイ大佐であり、これまた、アメリカ海軍の超エリート士官であつた。

このチャールズ・バトラー・マックベイ三世は、当年47歳、過去27年間の海軍勤務は、正に順風満帆というところであつた。

77歳の父親マックベイ二世は、数隻の戦艦艦長、ワシントン海軍工廠長、艦隊司令長官まで勤め、大將になつている。

祖父は幾つかの銀行頭取をやり、学校の基礎固めに大きく貢献し、アメリカ海軍強化への功労者であつた。だが、人間の運命とは分からぬものである。

1945年3月30日、沖繩戦の劈頭、神風特別攻撃隊の体当たり攻撃を受けた。特攻機の爆弾は、上甲板を貫き、兵員食堂と寝室と燃料タンクをぶち抜き、その下で爆発した。9名の兵員が戦死し、船体に二つの大きな穴を開けた。艦は浸水のため左舷に傾いたが、応急処置で沈没は免れた。艦は慶良間諸島内で応急修理を済ませ、自力で

8千哩の大航海をやり、4月末、サンフランシスコ湾のメーア・アイランド工廠で突貫工事に入った。そして運命の巡り合わせであろうか、広島と長崎へ投下する原爆の運搬という重大任務を果たすことになった。

大工事、出航準備、原爆運搬命令―出航、ハワイ寄港、マリアナ諸島テニアン入港、原爆陸揚げ、グアム島アラ港入港などの一連の行動の後、いよいよ最後の航海へ出発するのであるが、艦にとってマックベイ艦長にとって全乗員にとって、知る由もない地獄への道であった。

7月29日、日曜日、艦内でミサが行われ、艦は何の不安もなく、16ノット弱のスピードで、ベティ航路を西進していた。之字運動だけは、申し訳的にやっていたが、作戦行動中は閉鎖が建前の防水扉は開けたままであった。

グアムの第五艦隊司令部の参謀たちの間で、護衛駆逐艦のことが話に出たが問題にされず、単独航海であった。敵潜情報がないではなかったが、戦争は遙か北方に移っており、この海面に現実には潜水艦が出た情報はなかった。夕刻から艦長の指示で之字運動は中止し、レイテへの262度の針路で直進していた。

伊58潜は、第六艦隊司令部が指示し

ている沖縄―パラオの南北線とグアム―レイテの東西線の交差点への針路を航行中であった。

29日夕刻、天候は悪化、暗雲が垂れ込め、視界は最悪となった。橋本艦長は月が出るまで潜航することにした。30メートルの海中を2ノットの速力で南西へゆっくり進んでゆく。

午後10時30分に起こすように命じて狭い艦長室のベッドに横になつていた艦長は、「艦長10時半になりました」と伝える哨戒員の声に起き上がり、サツと顔を洗うと、例によって艦内神社に礼拝し、司令塔に上がった。

哨戒長(航海長)田中宏謨(海兵72期)が「異状なし」と報告した。

艦長は「深さ19」と下令、20メートルになった時、「第二潜望鏡上げ」と命じ、潜望鏡に飛びつき、全周を丹念に観測するとともに、聴音室に四周をしっかりと搜索せよと命じた。

夕刻、辺りに立ち込めていた暗雲はいつの間にか消え失せ、水平線が見分けられるまでになっていた。東の空には半月が、約15度の高度に上がっていた。波はほとんどなかった。

潜望鏡には月のほか何も見えない。聴音手からも、「何も聞こえません」と報じてくる。

艦長は、レーダーの準備を命じなが

ら、「総員配置につけ!」:「潜航止め、浮き上がれ!」:「メインタンクブロー」と、次々に号令をかけていった。

やがて潜水艦は、漆黒の姿を洋上に現した。海水に濡れた鋼鉄の胴体や後甲板に乗っている4基の回天が、淡い月光に映えている。

信号長がハッチを開き、飛鳥のように飛び出した。次いで航海長が後に続いた。それから数秒、「敵艦らしきもの左90度!」航海長が叫んだ。スワ!とばかり身をひるがえして艦橋に駆け上がり、航海長が指さす遙かの水平線に双眼鏡を向けた。正しく黒い影が真東方向、月光に映える水平線上に浮き上がって見える。

距離約1万メートル、間髪を入れず「潜航!」艦長の鋭い叫び声が艦橋、司令塔に響き渡った。姿を現すこと約1分、潜水艦はあつという間に水面下に没した。時に7月29日午後11時5分頃であった。

夜間潜望鏡にしがみついた艦長は、ピタリ、月光下の敵艦を凝視し続けた。

「敵影発見!魚雷戦用意、回天戦用意!」艦長の号令が鋭く響き渡る。前部発射管室では、半裸の水雷科員が、掌水雷長の指揮のもと、魚雷発射準備を無我夢中で進めてゆく。回天搭乗員は、交通筒を潜り、回天の下方から回

天に入り、発進準備を始めた。

午後11時9分、潜望鏡に映る艦影が段々大きくなり、三角形の形がはっきりしてきた。

橋本艦長は力強く「発射雷数6:、5号艇、6号艇回天発進用意!」と下令した。

中井、白木両一飛曹は、発進準備を完了し「5号艇よし」「6号艇よし」と報告した。

敵艦は刻々に接近して来たが、やがて三角形の頂点が二つに分かれた。これは明らかに戦艦か重巡洋艦か、とにかく大型艦である。しかも、方位角は段々大きくなって、真正面に突っかって来ていないことがはっきりしてきた。橋本艦長は「しめた!」と思つた。距離4千と観測した時、「距離2千、方位角右45度」と予告し、予め方位盤に測定させた。正に理想的な態勢である。

息詰まる数分間が過ぎていった。山のような黒い影が、黙々として近づいてくる。

11時26分、艦長は神に祈るように、「発射始め!」と発令した。方位盤手は発射押しボタンに指をあてがって、「発射始めよし」と復唱する。

いよいよ最後の一瞬である。艦長は「右60度、千5百」と方位角、距離の

改定を命ずる。「右60度、千5百よし」と、方位盤手が力強く復唱する。

夜間潜望鏡の中央十字線と目標の艦橋が一致する寸前、艦長は「用意！」と言い、「打て」と叫んだ。方位盤手の指が力強く押しボタンを圧する。艦首の魚雷が鈍い音を立てながら、2秒間隔で飛び出してゆく。

艦長は、潜望鏡に映っている敵艦を追い続ける。影絵のような敵艦は、何事もないように不気味に近付いてくる。1分足らずの時間が例えようもなく長い。

突如、艦首1番砲塔の右側に水柱らしいもの、続いてその後方の2番砲塔の真正面に水柱が上がり、同時にバツと赤い炎が出た。次いで3番目の水柱が、2番砲塔と艦橋の間に立ち上った。命中音と爆発音がじかに聞こえてくる。

回天内の白木、中井の両一飛曹は、「なぜ出してくれんのですか。敵が沈まないならば、仕留めに出して下さい」と再三、電話で催促してくる。

敵艦は、遂に動かなくなったが、なかなか沈まぬ。橋本艦長は、止めを刺すための次発装填をやるうと深々度に潜入した。

艦長が、「回天を出してくれ」との搭乗員の電話を無視したのは、魚雷で

九分九厘撃沈可能と信じたことと、真夜中であり、回天の使用は困難と考えたからであった。

伊58潜は、次発装填を終わり、深度を浅くし、潜望鏡を上げたが何も見えない。そこで浮上し、辺りを搜索したが何も見えなかった。そこで、水上航走をしながら、「戦闘速報」を発信した。

我々が、伊58潜が「アイダホ型戦艦撃沈確実」を知ったのは、翌朝であるが、この大事件の詳細を知ったのは、戦後、相当の時間が経ってからであり、その悲惨極まる史実を完全に知ったのは、1958年、リチャード・ニューカムが「アバンダン・シップ」という表題で出版し、次いで1959年（昭和34年）11月、亀田正（海兵54期）訳で、出版協同社から刊行されてからであった。

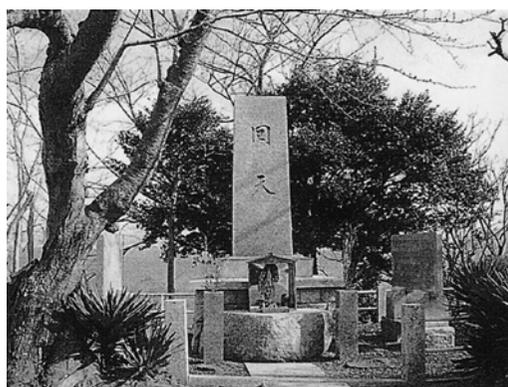
このインディアナポリスの沈没事件は、ニューヨーク・タイムズが、1945年8月16日付け社説（終戦の翌日発表）に書いている。

「インディアナポリスの沈没は、我が海軍史上最悪のページである。その悲惨な物語は我々が勝利を得た今日、最も悲しい記録である」と。

だが、その後の経過は正に想像を絶するものであり、米海軍首脳たちを窮地に追い込んだ。そして、マックベイ

艦長を軍法会議にかけ、有罪にするだけでなく、遂に彼を自殺に追い込んだのである。そして、半世紀を過ぎた今でも、問題がくすぶっている。それは、現在（1998年）フロリダに住む12歳のハンター・スコット君という少年が2年間の研究で、マックベイ艦長の無罪を主張する論文を発表し、アメリカ国内で大センセーションを巻き起こしていることである。

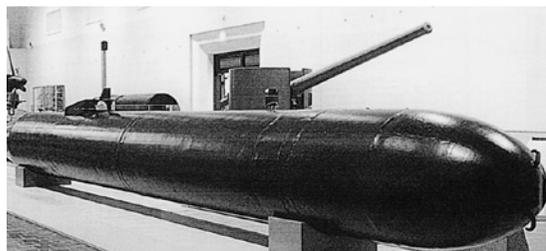
回天特別攻撃隊多聞隊の伊53潜と伊58潜の棹尾の殊勲は、正に特筆大書に値するであろう。



大津島・回天碑



大津島・回天記念館



靖國神社遊就館内展示の「回天一型改一」

特集

特攻インタビュー(第2回)

陸軍航空特攻

中村 真氏

特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
特攻ライブラリー取材スタッフ

「編注・当協会では、特攻に関連する

史実とその精神を後世に伝承するため、特攻関係者の体験談等を取材し、記録することを企画し、有志会員により「特攻ライブラリー」を立ち上げ、先ず、関係者のインタビュー記事を記録することにいたしました。特攻出撃の如何を問わず、特攻体験をされて九死に一生を得た方、特攻出撃を待機された経験のある方等で、映像と写真を含めたインタビュー取材を引き受けて頂ける方がおられましたら、自薦他薦を問わず、当協会事務局(担当大澤)までご連絡下さい。」

中村 真氏軍歴(略歴)

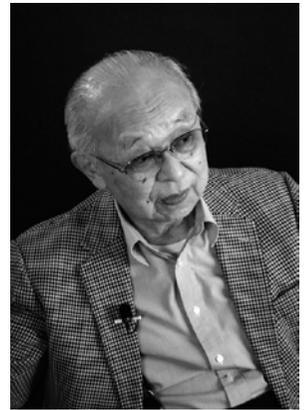
通信省航空局仙台地方航空機乗員養成所陸軍曹長

陸軍飛行第九五戦隊第二中隊 百式

重爆撃機二型「呑龍」操縦士

菊水隊 フィリピン・ネグロス島沖

にて突入



○特攻ライブラリー取材スタッフ

(五十音順)

及川 昌彦 世話人

神崎 夢現 進行・構成

倉形 桃代 記録

提橋 律子 世話人

須貝 智行 写真撮影

高橋 暢 映像撮影

長尾 栄治 インタビュアー

◆撃墜され全滅していたはずの陸軍

特別攻撃隊「菊水隊」

救出され捕虜となり唯一の生還者

となった中村真さんに真実を訊く

◆将来は飛行機乗りだ!

——中村さんのお生まれは何年で
しょうか?

中村…大正12年の3月3日、桃の節句
です。関東大震災が起きた年です。

——お生まれが、福島県の郡山市とい

うことですね?

中村…福島県の郡山です。あのころ父
親が橋本製糸工場の支配人をやって
いましたので、そのの社宅で次男として
生まれました。

——旧制安積中学卒業後は、どうされ
たのでしょうか?

中村…追浜にあった海軍の航空技術廠
に就職をしました。

——それは、普通に就職試験みたいの
を受けられたのでしょうか?

中村…そうです。なるべく飛行機に近
い仕事に就きたかったもので、海軍航
空技術廠だったら飛行機に触るくらい
はできるんじゃないかなと希望を持っ
て行っただけですが…結局、総務部の
事務員でね、タイピストの間を駆け
回って書類を集めて配る、というよう
な仕事になってしまいました。

——やっぱり子供の頃から空への憧
れっていうのは、強かったんですか?

中村…子供の頃というより中学3年生
頃から私は「将来は飛行機乗りだ!」
と思っていました。ある映画を観たど
きに、鈴木傳明という冒険の役者がお
りましてね、彼が複葉機に乗りガーン
と飛んで、牧場にいる女の子のところ
へ郵便物を届けるシーンがありまし
て、白いマフラーを靡かせてバイバイ
と飛び去っていくんです。大昔の映画



鈴木傳明 (俳優)

ですけどね。それを観て「ああ、俺も
ああいうことをやってみたいな」とい
う憧れが子供心に芽生えました。

——当時、中学校進学は相当エリート
というか、学歴が高い方だったと思わ
れるのですが、当時例えば予科練に行
くというのも選択肢の一つとしてあり
ましたでしょうか?

中村…ありました。七つボタンとい
うことで甲種飛行予科練習生の受験をひ
とつやってやろうかと。それには体を
鍛えなければと思って中学校の放課
後、砲丸投げをやったり鉄棒をやった
りランニングなどをしていました。あ
たりが暗くなるまで運動をし過ぎたの
で肋膜炎になりましたね、それで3ヵ
月位学校を休んじゃったんですよ。肋
膜炎をやったんじゃないかと予科練はダメ
だなと、それで諦めたんです。あと土
官学校や海軍兵学校は、頭のいい奴だ
と中学4年生くらいから、そっちのク
ラスに入っていましたからね。私はそ

のクラスじゃなかったから（笑）。

——海軍の航空技術廠にお勤めになった後に、通信省航空局仙台地方航空機乗員養成所の操縦生の募集をご覧になって、そちらを受験されたということですね？

中村…そうですね。試験の内容を見ると中学3年生修業程度。あ、こいつは受かるわいと。ただ、肋膜炎になったというの、ちょっと心配だったんですけど、当たって碎けるで応募したら、仙台で行われた身体検査をパスして、翌日に筆記試験を受けました。青葉城下の旅館に宿泊したのですが、あの辺は全然不案内でしたんでね、《旅館》と書いてあるボンボリが下がっている建物があったんで、そこに入っているたら《待ち合い》で、男と女が仲良くするとこちらしかかったんです。夜中に警察による売春の手入れがあったりして（笑）、ビックリしましたけどね。

て苛められて、事務室の書類箱に頭を突っ込んで泣いたこともあったね。岸壁から見える十二試艦載（零戦）の試験飛行の勇姿に矢も盾もたまらず、「学校の先生になるつもりです」と言っただけで、航空技術廠を辞めさせてもらいました。——「民間の航空機乗りになる」では、辞める理由として通用しないのでしょうか？

しょうか？

中村…横須賀だと思いますね。航空技術廠にいる間に募集要項を見て、あ、これは行けるなと、そっちの方を選びました。操縦生の試験にパスして嬉しかったですよ。これが本当の天にも昇る気持ちでしょうね。

◆民間の乗員養成所へ

——乗員養成所での勉強や訓練というのは、どんな内容でしたでしょうか？

中村…そうですね。まだ受かるかどうか判らない段階でしたしね。私の家は兄弟が全部学校の先生なんですよ。だから私も学校の先生になるということであれば通用すると思いましたが。父親は製糸工場の支配人だったのですが、昭和4年頃の世界的な経済不況で結局倒産してしまいました。それで生活水準がガタツと落ち込んだもんだから、まあ母親としては経済不況になっても生活に影響のない学校の先生というような方面に娘たちをやったのですね。兄弟8人のうち男手が兄と私の2人しかおらず、兄が身体の具合が悪かったんで、私が跡取りになっておりました。でも私は乗員養成所に行きたくて海軍航空技術廠を辞めてしまいましたから、母親のような不況を意識した考えはなかったです。

——ちなみに、その民間の乗員養成所での募集は、どこでお知りになったん

私の乗った飛行機



九五式三型練習機



九五式一型練習機



九九式高等練習機



九七式戦闘機



九七式重爆撃機一型



操縦徽章
(陸軍飛行機操縦生
取得徽章)



百式重爆撃機二型（呑龍）

給されて、1週間ほどで私は飛行第十班に配属されました。同期生は49人です。仲間と5人くらいで一つの班で、私らが一番最後の班でした。それから九五式一型練習機に移り、卒業間近には九九式高等練習機をやりました。まあこれは場周離着陸だけでしたけどね。

——後に軍隊に入られるんですけども、軍隊時代の訓練と養成所時代の訓

中村…辞めてからです。辞めるのにもなかなか大変だね。海軍の偉い人のところに行つて、その理由を述べて辞めなくちゃならない。総務部の石井という上司が意地の悪い奴で、何かにつけ

練というのは、違いましたでしょうか？

中村…相当違いましたね。軍隊に入っ
てからの訓練というのは、我々のコー
スとしては、すでに2等操縦士、2等
航空士の資格を持っていますので、
ポツと入ってきた少年飛行兵なんかと
は、ちよつと違いました。軍隊に入っ
たときは、普通の人は二等兵で一つ星
で入るんですけど、我々はすでに二つ
星で一等兵で入るんですよ。それで半
年経ったら伍長になって卒業という形
になります。

——よく予科練に入った方々の話を聞
くと、入隊したばかりのときは、もう
散々軍人精神を叩き込まれたところか
らスタートして、かなり厳しい訓練
だったと伺うのですが、その民間の養
成所の中には、例えば上官の方に殴
られるとかはなかったのでしょうか？
中村…いや、それはかえって民間の方
がありましたね。宿舎から隊伍を組ん
で駆け足で飛行場に行く途中で教官に
会ったら、「歩調とれ〜！ 頭〜右！」
と敬礼をせよと言われていたのに、そ
の敬礼を忘れると「飛行場、早駆け
〜！」と言って重い落下傘を背負った
まま、仙台の霞日飛行場（陸軍仙台飛
行場・現在の霞日駐屯地）を一周走ら
されたり、格納庫前で腕立て伏せをさ

せられ「一番最後まで残っているのは
誰だ〜」なんて脅されてね、そんな厳
しいことがありました。

——じゃあ、軍隊の教育とほとんど変
わらない感じだったのですか？

中村…そうですね、軍隊では少年兵で
はなくて一等兵で入りましたから、そ
ういう体罰的なものはほとんどなかっ
たわけですよ。ただ、《飯あげ》って言
いますが、自分たちの食事をこうい
う木の桶に入れて2人で担いで、自分た
ちの宿舎へ持って来るんですよ。それ
をみんなに分けて、今度そのバッグを
炊事に返納するんですけど、そのとき
に炊事の上等兵が、そのバッグを検査
するわけですよ。そうすると、古いバッ
グの材木の節目や割れ目にご飯粒が
引つかかっていると、「おい、これは何
だ〜！」ってなこと、こんな長いシヤ
モジでバーンなんて殴られましたね。

——ところが奴は上等兵でしょ、こっちは
一等兵。2ヵ月経つと私の方が上がつ
て今度は上等兵、もう2ヵ月経つと今
度は兵長だ。2ヵ月経つたらこっちの
階級が上になりますから、奴に「おう、
何だ貴様〜！」ってことになる（笑）。

——立場が逆転しちゃうわけですね。
中村…そうですね（笑）。

——ちよつと話を戻します。乗員養成
所時代、昭和16年12月8日にアメリカ

との戦争が始まるのですけれども、そ
のときのニュースを聞かれたときのご
記憶とかありますでしょうか？

中村…早朝に非常召集がかかりまし
た。廊下に全員順々に並ばされて、何

ごとかと思つたら、「我が国から宣戦
布告があつた」と上官から聞かされま
した。誰もが一瞬、身の引き締まる興
奮を感じましたね。そのときちよつど
我々の乗員養成所の裏手の太平洋側
に、九四式偵察機（中島キー4）とい
う古びた軍用機がポソポソポソ飛
んでたんですが、こういう飛行機に
乗ってアメリカと戦争を始めて、こ
りやどうなんだろうね、なんていう感
じがしました。

——12月8日に大東亜戦争が始まる前
に、アメリカから日本への輸出が禁止
されるとか、すでに経済封鎖が始まっ
ていますが、いかがでしたでしょう
か？

中村…我々は民間飛行士が希望です
から、どうせ戦争が始まるなら伍長に
なった後の方がいいと考えていまし
た。というのは予備役下士官候補者と
いう制度がありまして、伍長になりま
すと予備役編入になって戦争に行かず
に済むだろうと考えていましたので、
早いとこ軍隊で飛行機の操縦を覚えて
伍長になろうと思つていました。まだ

その頃は戦争はあまり意識していませ
んでしたね。

——昭和17年の3月に乗員養成所を卒
業されて、2等飛行操縦士になったわ
けですね？

中村…ええ、2等操縦士と2等航空士
の技量証明書というのをくれるんです
よ。軍隊に入つてしまえばもう役に立
ちませんけど、それを持って今度は中
央航空機乗員養成所というのが松戸に
ありまして、そこへ入ると1年位で1
等操縦士と1等航空士になりました、
旅客機を操縦できます。仙台では一所
懸命、帽子を斜めに被つて拳手の札を
して、「中村、サイゴンに出発〜」とか
いうような練習をしていましたよ。

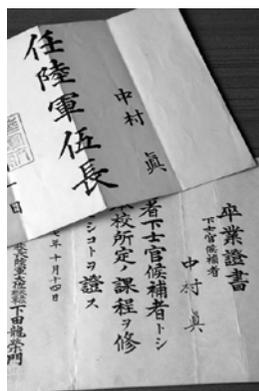
——松戸の中央航空機乗員養成所の方
へも行かれたのでしょうか？

中村…いや、行きません。仙台を卒業
したら岐阜の飛行第二戦隊というところ
へ入れられましたね、そこへも一
等兵で入りました。

——陸軍飛行学校に入ったのは、志願
ではなかったのでしょうか？

中村…そういうコースは予め決ま
っているんです。乗員養成所を卒業する
ともう《予備役下士官候補者》予備役下
士官のコースを踏まないと民間に出
れないということが決まっていますん
でね。予備下士官コースに一等兵で入り

半年で伍長になって、卒業・除隊・予備役編入になります（1927年以後は幹部候補生、中学校卒業者で乙種幹部候補生の教育を受けた者は平時ならそのまま除隊し予備役に編入された）。それで中央の方に行かない人は、各養成所の助教さんという嘱託みたいな形で教官の助手をやるようになります。



◆卒業式当日に現役軍人

——一般的なコースとしては、陸軍の飛行学校に入ってから下士官候補生の過程を終了したら、そこで軍隊生活はお終い、というはずだったのでしょか？

中村…本当はそのはずだったんです。

しかし卒業するはずだったのが、卒業式当日に「陸軍補充令附則第二条により、現役召集！」みたいなことを怒鳴られましてね、あれ？ なんだ卒業できないんだっていうことになりました（笑）。——それでは召集は、卒業の日に突然知らされたと？

中村…そうですね、卒業式のとき突然で

すね。

——じゃあもう、中村さんとしては「ここで卒業したら、次はようやく民間で国際線のパイロットになれるぞ」と思っていたらどうだったと？

中村…そうですね。そのつもりでいましたから……。ところがその《陸軍補充令附則第二条》というやつで、いきなり現役編入です。あーあ、現役軍人になっちゃったんだということ、すぐに重爆隊に持って行かれたんじゃないかな。浜松の飛行第一〇五戦隊に配属になりました。

——岐阜の飛行学校にいらつしやうった時代に、もし陸軍で空中勤務者になるんだしたら、戦闘機乗りとか爆撃機乗り、あるいは操縦員や偵察員への希望に対して、特に選考みたいな形はなかったんですか？

中村…希望は聞かれませんでしたね。何で私が重爆に行ったんだらうなあと、今でもいろいろ考えるんですけど、卒業試験がありまして、特殊飛行で私ができるできなかったのが、宙返り上昇反転といつて宙返りの頂点でひっくり返るやつでした。これの基準を取り違えてたんで（手まねをして見せて）、この辺で反転の舵を使うもんだから、何回やつても錐揉みに入っちゃうんですよ。試験官の准尉が「中

村、おまえ基準の取り方が違うんじゃないの？」ってなことを言われました。

その時点では、重爆に行くとか戦闘隊に行くとか、そういう考えは自分に何もなかったです。後で開いてみたら重爆隊行きと……こういうことになりましたからね。

——じゃあそれが決まってから、岐阜から浜松の方へと転動だったのですか？

中村…そうですね。

——浜松の飛行第一〇五戦隊に配属されて、そのまま重爆の訓練開始になったんでしょか？

中村…その時は《修行者》という名前がついて伍長になっていました。重爆に行ったのは何人くらいいたか人数的には忘れちゃいましたけどね。《修行者》のグループが一緒に寝泊りするための宿舎を借りて、その《修行者》たちで浜松での訓練はやりました。

——岐阜の飛行学校にいたときには、練習機ですつと訓練されていたと思うのですが、いきなり重爆といつて大きな双発の爆撃機の操縦士になられて、そう簡単に操縦できるようになるものなんでしょうか？

中村…岐阜の陸軍飛行学校での最後の方の訓練で、三重県亀山分校に行きまして、九五式一型練習機、九九式高

接協同偵察機）というやつを改造した

實用機向きの訓練と、九七式戦闘機の訓練がありまして、これが非常に操縦性能のいい戦闘機で、乗った飛行機の中では一番運転が良かったです。實用機としては、九八直協と九七式戦闘機「名材号」という愛国号（名古屋材木商工組合による献納）で訓練しました。きつと名古屋の材木商さんたちが寄付したやつなんだろうね。

——先ほどの話の続きなのですが、浜松の飛行第一〇五戦隊に行つて、重爆は最初何に乗られたのですか？

中村…九七式重爆撃機一型（キ21-II）です。

——今まで訓練では単座飛行機に乗られていたわけですね？

中村…そうですね。最初はこんな大きなものが空を飛ぶんだらうかなと思つて、ちよつと不安とか不思議だったですよ。

——まず最初は副操縦士みたいな形で配属されたのでしょうか？

中村…最初から正操縦席に座り、教官が副操縦席に座ってるんですよ。一応エンジンの始動をやるわけだし、その他は飛行機の幅が広いのと双発だといふくらいで、そう違和感はなかったです。地上滑走のときの二本のエンジンレバーの使い分けが難しかったかな。

——私など素人考えで思うのですが、単座飛行機だと飛行機の軸線が中央に来ます。重爆とか双発だと正・副で左右に操縦席があるので、少し位置が中央から横にズれるのではないかと思うのですが、このあたりはいかがでしょうか？

中村…そうですね。一応こうありますと(手振りで説明)真ん中からウインドウが分かります。操縦桿が真ん中に一本ありますけど、それに(横)棒が付いて、こういうハンドルの物が(左右)両方についてる。単座の飛行機、あるいは練習機ですと、こっち側(左)でエンジン・レバーを動かして、エンジンを噴かすときには後に引く。ところが重爆は前に押しつけてエンジンを噴かすという方式でした。それらについては、いろいろ地上滑走その他の際に教わります。自動車の右ハンドル車と左ハンドル車を乗り分けるようなもので、空中では計器が正しい姿勢を示してくれますから、それに従って操縦すればよいのです。

——でも、スロットルレバーが逆だと、時々間違えて逆の方にやっちゃうとか、そういうことはありませんでしたでしょうか？

中村…うーん……それはあんまりなかったような気がしますね。

——浜松の飛行第一〇五戦隊にいらっしやったときには、飛行訓練がメインだったのでしょうか？

中村…毎日毎日飛行訓練です。だいたいの訓練空域が御前崎の上空3000m、富士山が目標。富士山に向かって「はい、旋回開始!」、グルッと周ってまた富士山が出てきたら「一回転終わり!」というようなそういうショー的な訓練から始まりました。九七式重爆撃機一型というのは旧式ですから、フラップと脚を上げるのは操縦士がこう(手振りで)計器盤がありますが、その下にコックがついているんですよ。脚とフラップを操作するために操縦士が「はい、脚!」と言いながらコックをひねるようになってるんです。そうすると機関係が手押しポンプでキコキコキコと車輪を上げます。そういう方式でした。

——手で上げるんじゃ、なかなか大変ではないでしょうか？

中村…ポンプですからねえ。フラップもその方式でしたから。

◆満州でいよいよ実施部隊へ

——浜松にはだいたい半年くらい、その後には満州の方へ向かわれたのでしょうか？

中村…そうですね。満州の関東軍に単身

赴任という形で行きました。

——最初は船で行かれた。それから列車を乗り継いで赴任したという形ですか？

中村…そうですね。満州は初めてで朝鮮を列車で縦断して行きました。鎮東にあった教導飛行第九五戦隊という隊です。そこへ着いた途端にやらされたのは、洗面器に水を汲んできて両手を浸けてハイって上にあげて、それで触感がなくなったらお湯の方にバツと手を入れるという動作でした。その触感がなくなるときが凍傷になるときだからってというようなことを教わりました。



昭和18年満洲国鎮東にて陸軍伍長当時

——凍傷にならないように、まず身体で感じさせたのですか？

中村…そう、体で覚えさせるといことなんです。

——今まで日本国内の内地方隊にずっといたのが、満州という外地の最前線の部隊に派遣されて、これは部隊の雰囲気が違うなということはありませんでしたでしょうか？

中村…実施部隊ですから下士官室という部屋を貰います。そこでパイロットの下士官4人くらいが部屋に住むようになりまして。それまでは浜松の《修行者》たちと、20人なり30人なりが一緒に暮らしていましたから。これでもうやく下士官になったということでしょうね。

——基本的に教導飛行第九五戦隊では、ソ連と戦うための訓練ということだと思うのですが、重爆の場合、どんな訓練をされたのでしょうか？

中村…重爆というのは本来、高度6000〜7000mの高度で編隊を組み、上空を戦闘機に守られながら飛んで高高度から：例えば満州国黒竜江の鉄橋だとか、あるいはシベリア鉄道だとかを射程に考えて爆撃するというのが任務でした。訓練は奉天に爆撃場がありまして、私らパイロットの方は、どんなときでも飛行機を揺らさないよう水平飛行ならそれをきちっと同じ高さで保ち、同じ速度で飛び続けるというような訓練が多かったです。

——実戦の場合は、戦闘が始まると水平飛行と言ってもそう簡単ではないのでしょうかけれども、やはり訓練のときでも水平飛行を保つことは難しいのでしょうか？

中村…飛行機の場合、ちよつとでも傾

けば角度が違ってきてしまい爆撃が難しくなります。前方の爆撃手が伝声管で「進路何度で入れ！」と指示し、爆撃手とパイロットが連携して直線コースで入ってゆき爆弾を落とします。そこには爆撃手が照準眼鏡を覗いている測定します。斜めに風が吹いていればそっちに流されます。これを偏流測定と言いまして、右から斜めに風が吹いていれば、こちらへ流されてしまうので、右斜めに機首を向けて（手振り）こういう形で修正しながら進んでいくわけですね。そんな指示が伝声管で爆撃手から操縦士に入ってくるわけです。それに従って羅針盤・姿勢指示器・その他をチェックしながら、速度・高度を常に一定に保てるようにする訓練がありました。

——よく陸軍の場合には海軍と違って、その頃はまだ洋上航法とか天測航法とかをやっていたので、航法士は飛行機には乗っていませんでした。操縦士がやっていたのでしょうか？

中村…大型機が航法をやる場合は、航法士が乗っていました。

——昭和18年くらいには、航法士が乗っていたということでしょうか？

中村…はい、その人たちは常に航法盤というんですか、書類を抱えて航法専門にやっていました。北海道から

フィリピンに出かけるときに、28機くらいの編隊で北海道から立川か宇都宮へ飛んだのですが、操縦していて右の方に海が見えると、どう考えても帯広から飛んで立川までの間に、右側に海が見えるわけがない。左側なら分かるのですが…。そしたら編隊長機の航法士が進路の測定を間違えて少し右に飛びすぎて、日本海が右の方に見えてしまった(笑)。迂ってという男でしたけど、だいぶ文句を言われてました(笑)。

——昭和18年くらいになると南方では空の戦いも熾烈になり、陸軍の航空隊はだんだんとニューギニア方面へも派遣されていますが、厳しい戦況について当時は耳に入ってきたのでしょうか？

中村…ええ、入ってこないですね。北方警備ということで満州で訓練し、19年の2月に出戦命令が下りました。茨城の銚田陸軍飛行場に進駐して、何をやるのかなと思ったら東京防空隊というのに編入されて、太平洋上を800km飛んで200km飛んで800km帰ってくるというように、洋上の潜水艦あるいは艦船の哨戒飛行をやりましたね。

——大体は一回飛び立つと何時間くらい飛ぶのでしょうか？たとえば哨戒飛行の場合だと、何時間くらい飛行されるのでしょうか？

中村…時間はあまり意識しなかったです。800km地点に来たら、角度を変えて200km飛ぶと。そして200km飛んだら、この反方位で基地に向かっているということでしたから、時速240kmくらいで飛んだんじゃないかと思うんです。そうすれば約8時間で。高度もあんまり高くちゃ船が判らず潜水艦も見えないだろうと1000mくらいでしたか。ある時北海道の沖を飛んでいたんです。「あ！敵の潜水艦だ！」ということになって…それで高度を300mくらいまで下げてみたら、鯨が3頭、潮を吹きながら…潮をプワッププワップと、それが機関銃を撃ちあげているように見えるんですよ。爆撃手の小木曾准尉というのが「じゃあ、これは一回爆撃してみよう」ということで鯨を爆撃しました。

——「じゃあ、これは一回爆撃してみよう」ということで鯨を爆撃しました。

アルミ弾っていう目標弾を手前に1発落として、直線でその先にまたアルミ弾を1発落とすと。海面で輪がバツと広がるんですよ。それでまた戻ってきて、その二つのアルミ弾を結んだ線をずつと進んでいって、その間に爆撃手が照準を決め、大体いつも50kgの爆弾を11発積んでいましたので、「じゃあ、1発落とそう」ということでやった操作を間違えて11発全部落としちゃったのね(笑)。「ありや、11発全

部落としちゃった！」なんて爆撃手が言うからさ、ぐるっと周って見たら海の色が真っ黒く変わっていました。鯨はもう1頭もいなくなっていましたよ。——その場合、基地に帰った後で、相当怒られるのでしょうか？

中村…基地に帰って小木曾准尉がその報告をしたら、もう出戦命令が下っているからというので、叱られなかったそうですよ。

——笑い話みたいだな。
中村…そうですね(笑)。

◆出戦命令から初陣まで

——出戦命令で、教導飛行第九五戦隊が飛行第九五戦隊になったのですか？

中村…そうですね。《教導》が取れて、教導とは教育という意味ではないのですか？

中村…いわゆる、教育戦隊みたいな意味合いがあるのかなと思います。何しろ新機種「百式重爆(百式重爆撃機II呑龍)」で編成された部隊でしたからね。あの字から見て、教え導くということで教導ですから、そう変わらなかったです。いま爆弾の話をしたように、教導の訓練と出戦命令が下ったからの戦隊としての活動としては、爆弾を使う量も使い方も違うんじゃないかと思うんです。

——中村さんが書かれた本『死に損ないの挽歌（私家版）』に、重爆が出撃するといつても出撃するまでには時間がなかった、なかなか大変だったとありましたが、実際にはどうでしたでしょうか？



『死に損ないの挽歌』
中村真著（私家版）

きは500kgの弾を、電気係の曹長が魚雷を吊るための魚雷懸架機という、ガスネジみたいな細かいネジの付いたので持ち上げて吊っていました。私もその作業を手伝ったりしました。

——燃料の積み込みや積み替えみたいな作業でしょうか？

中村…そうですね。あと機関係が整備点検で、毎回航続距離と爆弾の搭載量との関係でしようけれども、3番タンクをいつも空にするんですよ。まあ、どうしてなんだろうなあ？ 私にはその理由は解りませんが、いつも3番タンクは空にして、哨戒飛行は50kg爆弾1発、特攻のときは500kg1発でした。

——もう出撃命令が出た頃には、飛行機も九七式重爆撃機から変わったのでしょうか？

中村…満州に行つたときから機種は変わりました。満州の鎮東に赴任した教導飛行九五戦隊は、私の最後の棺桶となった百式重爆撃機の戦隊でした。百式重爆撃機一型という奴が曲者で、飛ぶ度に火事になるんです。エンジンから火が出てね。それでもう皆で手を焼いて何とかならないかっていうことで、まあ、排気管の関係でエンジンに引火するらしかつたので、排気管をいろいろ改造したそうです。それが百式重爆撃機二型となつて、ようやく安心

して乗れるようになりました。エンジンの馬力も1450馬力が二つ付くようになりましたから、一型と二型では大分変わりました。

——二型になってからは、操縦しやすくなったのでしょうか？

中村…はい、一型はみんなに毛嫌いされて、大体いなくなっちゃいました。ほとんどみな二型になりました。武装も20mmの機関砲が付いたりね。それから、以前フィリピンの海の底から見つかった重爆には、尾部に13mm機関砲が付いてたつていうようなことがある記事に載っていましたけど、これは記録に一切ないなんてことはないのです。私が乗っていた飛行機にも前方13mmと尾部13mmの機銃は付いていました。パイロットの担当飛行機というのは決まっていなくて、出撃するたびに飛行機が違ふんです。誰々の…たとえば、機関係・河合軍曹の飛行機、足立伍長の飛行機という具合にね。ですから愛機って言っても、常に「これは俺の飛行機だ」というのはなくて、どの飛行機でも乗れるようになっていましたね。

——呑龍の場合は、基本的には8人乗りでしたよね？

中村…ええ、8人でした。

——その8人構成のチームというのは、いつも決まっていたのでしょうか？

中村…チームっていうのもなかったですね。本にも書きましたけど、搭乗区分っていうのが前の日に発表になって、正操縦は私、副操縦は誰、機関係は誰というような、その都度、新しいメンバーで指名がありましたから。

——じゃあ、どういう風なチームとか、ペアで乗り込むかっていうのは、毎回搭乗割が出るまでは判らなかつたのでしょうか？

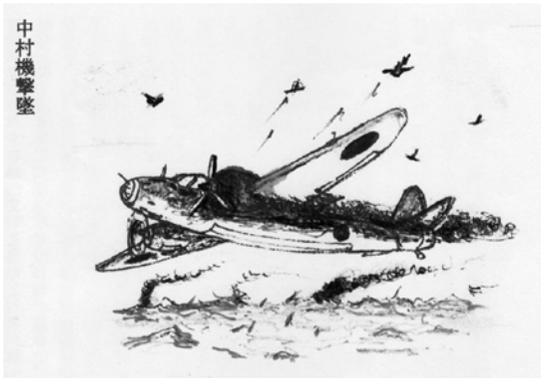
中村…そうですね。搭乗区分が発表になるまでは判らないですね。

——日頃の部隊の中で人間関係というの、かなり重要になるのでしょいか？ やつぱり合う合わないとか、人間の好き嫌いがどうしても出ますものね。

中村…そうですね。みんな顔馴染みです。グループでいつも付き合う顔じゃなくて、誰とでも話を通じるといいうな、良い点もありましたね。

——まだ特攻に行かれる前の部隊の生活で、思い出に残ることをお聞かせください。

中村…フィリピンに行つて最初の初陣が丸山隊長（大尉・中隊長・機長）とのコンビで、隊長は副操縦兼爆撃手でした。タクロバン飛行場というのが第九五戦隊の攻撃目標。あの頃はもう昼間は飛べなくて、夜間に10分間隔の波



中村…だいたい爆弾を積むのに最低2時間くらいかかるんですよ。特攻のと

状攻撃という単機の爆撃でしたから、サーチライトが我々を探しながら、高射砲弾がボンボン周囲で破裂する中を初めて爆撃をやりました。そのときは高度4000mくらいで行ったと思います。タクロバン飛行場の上には薄い雲があって、そこに10分前に飛び出していた他の隊の飛行機が、ボコボコ高射砲で撃たれているわけです。

丸山隊長が「中村、6000mまではもう高度4000mから酸素吸入マスクを着けなくちゃならないのですが、そんなのもうすっかり忘れちゃって、そのまま6000mまで一気に上がりました。下の方では他の組が飛行場を攻撃している。その上に行つて私が進路を決めて飛んでつたら、その飛行場の上にこんな（手振り）雲がありました。「隊長、このままですと雲に入りますよ！」って言ったら、「じゃあ、反方位で引き返せ！」と。その爆撃に入る進路つていうものは、どの飛行機でも全部違うわけですから、同じ進路で入っていくわけじゃなくて事前に決めてましたから、そこで反方位で引き返して爆撃をしました。やっぱり50kg爆弾を11発持つてったんですよ。そしたらどのくらいしてからか、「それ！当たった、当たった！」と、爆撃手

の部屋から隊長が、もう飛行帽振り乱して上がってきましたね（笑）。今度自分が副操縦の操縦桿を握つて雲の中へ退避しました。そのときは敵の夜間戦闘機が3機ぐらい上がつてきていました。

——やっぱり初陣のときは、緊張されましたでしょうか？

中村…ええ、緊張しました。それが後になつたら大分慣れました。あと落下傘部隊がブラウエン飛行場に降りた。本当はみんな全滅していたらしいんだけど、降りた後、援助物資を投下しなくちゃならないことになりました。島がいっぱいあるでしょ、それも夜ですから、どうやってその援助物資を投下するか。そのジャングルの中からね、懐中電灯をこう（手振り）回すことになつているから、よく見てろつて（笑）。それで結局、そんな懐中電灯なんか見つからなくて、多分この辺だろうというところに援助物資を投下して帰ってきたこともありまして。特攻に出る前には、いろいろ追尾攻撃も受けました。この頃は夜間しか動かせんから、こっちが行つて敵を爆撃して飛行場に帰つて来て、掩体壕に飛行機を押し込んだ途端に、敵がさっきの仕返しをしようと空襲に来てボンボンボンやらられて（笑）、こっ

ちも大急ぎで竹藪の中に逃げ込んだというようなこともありましてよ。

◆飛行第九五戦隊として各地を移動

——浜松の飛行第一〇五戦隊に配属された後に、単身で満州の飛行第九五戦隊に配属されましたが、その後は部隊を転々としたというよりも、飛行第九五戦隊としていろんなところに移動されたのでしょうか？

中村…そうですね。最初は白城子の側でしたけど鎮東で編成になつて、それからハルピンの隣の拉林鎮（ラリンチン）陸軍飛行場に移動しましたが、飛行第九五戦隊のままですからね。最後まで飛行第九五戦隊でした。

——満州の後は、いったん銚田に行かれましたか？

中村…満州の中で、鎮東から拉林鎮陸軍飛行場に行つて、そこから茨城の銚田陸軍飛行場です。

——その次は、北海道の方に？

中村…そうですね。計根別（けねべつ）陸軍飛行場と帯広陸軍飛行場と書類には記録してありますが、私たちは帯広だったんです。その後ウルフ島や松輪（まつあ）島方面の哨戒になりました。

——同じ飛行第九五戦隊でも、その中でいるらなところに分かれて移動され

たのでしょうか？

中村…そうですね。北海道でも1800kmの洋上哨戒飛行がありました。帯広を中心に太平洋側に800kmの扇状に哨戒して、潜水艦を攻撃する訓練をやりました。北海道の山肌（やまがし）で潜水艦の絵が描いてあって、それでデモ訓練をしたりしました。赤ボタンを押し10kg爆弾を落とす旋回して逃げるんです。

——そのウルフ島・北海道、そして北海道・千島に行かれた後に、今度はいよいよ最前線のフィリピンということになるのでしょうか？

中村…そうですね。北海道にいる頃には、エトロフ島から爆弾倉一杯に買い込んできたタラバガニを、乾パンの空缶で茹でて、ウルフ島の海軍の夜間戦闘機銀河の連中と、よく一緒に一杯呑んでやりましたけれども（笑）、それから捷一号作戦が始まって、今度海軍も陸軍も北海道にいる部隊が、みんな宇都宮だと立川だとかに集められました。

——ウルフ島からフィリピンまで、戦隊ごとの移動ですと飛行機とパイロットだけじゃなくて、地上整備員とかいろんな地上部隊も飛行第九五戦隊の隊員の中にいたでしょうから、例えば彼らは後から船で移動したのでしょうか？

中村…地上要員は、いわゆる機関係の助手みたいな形じゃないですかね。機関係にも機上機関係と地上で整備する機関係がいて、我々と一緒に乗って飛び立つのは下士官の機上機関係の整備員。だいたい上等兵・兵長クラスの人たちは地上整備員です。何べんかピストンで地上整備員を先に送っていて、後でみんなで編隊飛行で移動するということがありました。戦闘機部隊が地上勤務者の空輸をやることもありましたよ。

—ではフィリピンに行くときも到着したときにはある程度、地上要員が揃っていたのでしょうか？

中村…そうですね。飛行機だとせいぜい10人か11人くらいしか乗る人間の数が限られていますから、軍艦で行った者もいたようです。

—今までと違って、フィリピンに行くということとは、本当の最前線という感覚だと思のですが、やはりそこに行くこと決まったときには、緊張されましたでしょうか？

中村…特に緊張は感じませんでした。もう神経が敏感でなくなってきたんですよ(笑)。よく「死を恐れない」とか何とかって言うけれども、死んだらどうなるか誰も知らないわけなんです、恐れるも何も「飛行機乗りは飛行

機に乗って戦争して落っこちたら死ぬ」というのが、軍隊では常識でした。ただ11月だというのに、立川基地で南方用の夏の飛行服を新しく支給されたのは驚きました。



昭和19年11月17日立川にて比島へ飛び立つ直前

—フィリピンに行く前にも事故で亡くなった方とか、やはり結構いらっしやったんですか？

中村…あ、大勢いましたね。満州でも昭和18年の5月18日頃、鎮東に赴任したら、戦隊長の乗った飛行機が奉天かどこかと連絡飛行から帰ってきたときに、飛行場で並んで我々は出迎えていたんですよ。「あ、あれだあれだ」って言うたら、ツーツと光が落ちたんです。それで大騒ぎになって、取るものも取りあえず、そのまま皆で駆け出して飛行場を横切つて墜落地点まで行つたんですよ。民間の満州人の家に一晩泊まつたりしながら、それで行ってみたら、その飛行機の垂直尾翼だけがポーンと見えまして、ようやく「ああ、あれだあれだ」と現場に着いてみ

たら、紙屑カゴをバーツと散らしたように飛行機が粉々になって飛び散っていました。そこに中隊長の茨木大尉と川田軍曹だったか、それから戦隊長、そして後上砲席には鬚の濃い軍曹の死体がありました。雨が降りましたんで、血糊や泥なんかはみんな綺麗に洗われていました。

初めて墜落した者の死体の状況を見たわけですが、川田軍曹なんかは、しばらく生きていたんじゃないかなと思います。飛行服の上着の裾を手でかきむしつたようになっていました。それから副操縦席にいたんでしよう、中隊長の茨木大尉の顔がベシヤンコになっていて、手は操縦桿を握つたような格好になって仰向けになって死んでいました。神宮軍曹なんかは後上砲席にいたんでしようと思えますが、身体は俯せ

になっていての首は背中を向いてるとか、そんな状況でした。満州に行つて初めて私が見た事故でした。それらの遺体は運んできて飛行場の隅で火葬にしました。

—そういう事故と隣り合わせみたいな生活が続くと、死生観つていうのも大分変わってきますか？

中村…変わってきますね。まあ「いつでも来い」と。しかし、自分の操縦する飛行機は絶対に落ちないと信じてい

ることですよ(笑)。だから人の飛行機に乗るのが嫌でした。自分が操縦桿を握つたら絶対に落ちないと。けど何かの用事で人の飛行機に乗ったりすると「大丈夫かなあ？」なんて思っていました(笑)。いろいろありましたが。そういう事故では、沼地に真っ逆さまに直線的に身体が突っ込んで、真っ黒い丸太棒のようになったパイロットの死体なんかも引き上げました。思い起こせば本当にきりがなかつたですね。

—フィリピンに派遣されたときの話を伺いたのですが、フィリピンに到着したのは昭和19年の何月くらいでしょうか？



フィリピンクラークフィールドに出撃する飛行第95戦隊の勇姿 (昭和19年11月19日 パシー海映上)

中村：昭和19年の11月19日がフィリピ
ンに到着した日なんですよ。これがね
（資料を見て）、フィリピンのクラーク・
フィールドに出陣する飛行第九五戦隊
の雄姿という説明になっていきますけ
ど、本当は雄姿じゃないんです。先の
部隊が28機でデルカルメンというこ
ろに進駐しました。そこにアメリカの
戦闘機ヘルキヤットが空襲にきたわけ
です。それでみんなボコボコにやられ
てしまつて、28機のうち2機しか飛べ
るのが残らなかつたんです。そのとき
我々は、このバシー海峡でクラーク・
フィールドに到着する寸前でした。地
上から「今、敵が空襲中だから、ちよつ
と雲の上で待つてろ！」と言われたので、
この写真は雄姿じゃなくて着陸しない
で待つてる姿なんですよ、これ（笑）。

——あ、そうなんですか！

中村：デルカルメンに進駐するときで
はあつたのですが、第一編隊・第二編
隊・第三編隊の3番機に乗つてた整備
の松井っていう見習士官が撮つた写真
なんですよ。

——実は、勇ましいというより不安に
駆られていたときだったんですね？

中村：そう！

——この写真の中には中村さんが搭乗
されていた飛行機も写っているのだ
でしょうか？

中村：私が乗っているのは第一編隊の
2番機：（写真を見て）この辺ですか
ね。3機で一編隊です。

——その飛行場には降りることはでき
たのでしょうか？

中村：空襲が終わつてから着陸許可が
下りて、その飛行場には降りました。

——もうその翌日から、出撃になつた
のでしょうか？

中村：そうですね。飛行場に下りて、
ちよつと食事の時間になつて、お皿
にあの頃の外米のジャブジャブとい
うご飯を食べようとしたら、またグラ
マンの空襲だつていうんで、そのお皿
を持つたまま爆撃でできた穴の中に
入つて退避していました。

——敵機の空襲を受けたのも、フィリ
ピンに行つて初めての体験でしょうか？

中村：ええ、19日に着陸した直後です
からね。

——やつぱり空襲つてのは、怖いとい
うか凄いののでしょうか？

中村：こつちの対空砲火がないのをい
いことにして、奴らもパイロットの顔
が見えるくらい低空を暴れまわつてい
ました。こつちも飛行機の方を見な
がら、穴の中をグルグルまわつて撃た
れないようにしていたので、そんなに
恐怖はなかつたです。

——そしてその翌日から、先ほど仰つ

たように夜間爆撃に出撃されたんです
よね？

中村：そうですね。もう昼間はダメでし
たからね。もう帯広にいる頃から、昼
夜転換訓練というのがあつて、夜に飛
んで昼は寝ているんですよ。だからな
かなか眠れなくて。夜になると「は
い、集合！」で夜間飛行です。そんな
ことを帯広にいる頃からやつていまし
たので、もうそういう状況だつたん
じゃないですか？ 昼間の制空権はア
メリカに取られていましたので、こち
らから攻撃する場合には夜間攻撃しか
ないと。だから菊水特攻隊の出発につ
いても、栗原部員と師団司令部とで相
当やりあつたらしいんだよね。今も
う昼間、速度の遅い重爆で攻撃しても
成功は覚束ないから、夜間にやらせて
くれということ、第五飛行団の方で
は盛んに軍司令部に言つたらしいけ
ど、結局ダメで、他の援護戦闘機の関
係や戦果確認機の連絡もあるから、そ
う一方的には決められない、予定通り
やれてなことを言つたんでしょ
うね。援護の戦闘機なんか一機も来ない
くせに。万葉隊の佐々木伍長もエンジ
ン故障で助かつたほうですね（笑）。

私らと一緒に行つたら死んでいたか
もしれない。

◆事前に知らされていなかった特攻

——昭和19年12月に出撃される頃
は、特攻隊の出撃が始まっている時期
のはずですが、特攻隊については分
かつていらつしやつたのですか？

中村：特攻隊については、ほとんど知
らされていなかったです。「特攻隊つ
て何だ？」つていうくらいなもんです。

だから特攻の準備をしているときに、
米子の養成所出身の吉水軍曹という
お茶の先生の息子が来て、「中村、み
んな帰つて来ないようなことを言つ
てるよ」なんて言うから「ま、特攻隊
つて言うんであれば、爆撃した後に帰
つて来ないのが普通じゃないの？」なん
て答えてました。「あ、そうかねえ」
なんていう調子だったから、特攻隊そ
のものについては、あんまりピンと来
なかつたですよ。

——名前だけは聞いている、みたいな
感じでしょうか？

中村：特攻隊というのができたと。だ
いたい昭和19年の10月頃でしょう、特
攻隊ができたのは。私らが出かけたの
は12月ですからね。まして特攻隊とし
て重爆が出るなんていうのは、あまり
聞いたことがなかつたです。

——まあ、戦闘機ならそうなるでしょ
うね。

——

——

——

——

中村…富嶽隊っていうのがあって、キ
—67かな？ あれが特攻になってたと
いうのは後で聞きましたね。

—運命の昭和19年12月14日は、突然
の特攻命令だったのでしょうか？

中村…ええ、夜中に突然。どうもそう
らしいな、というような噂が前の日に
ありましたよ。13日にね。いままで夜
間ばっかりだったのが、今度は朝から
の昼間攻撃になるわけで…。あ、これ
は特攻になるかも分かんないね、なん
て話だったです。誰しもが映画で観る
ように天の一角を睨んで、「ん！ 特
攻やるぞ！」っていうような雰囲気は
全然ない(笑)。「あ、そうか、特攻か」つ
ていうような調子です。毎日が夜間爆
撃で出撃して帰って来ない者が多いか
ら、我々だっていつ何処でどうなるか
分からないわけで、「特攻だ」といつて
プチ当たろうとも、そう特別に大変な
仕事だという意識はなかったですね。

—その夜の通常の爆撃は、その前
日くらいまでは普通にやられていたん
ですか？

中村…いわゆる10分間隔の波状攻撃で
す。タクロバンやブラウエンを目標に
して、前の日まで、敵のサーチライト
を縫うように、夜間の単機波状攻撃を
やっていました。

—14日に関しては前日に「次の出撃

は昼間に爆撃するぞ」ということはも
う聞いていたというわけですね？

中村…そうですね。4月13日夜に搭乗区
分の発表があるんですよ。山内兵長つ
ていうのが、「第二中隊の、明日の搭
乗区分を申し上げます！」って、兵
舎の入り口で怒鳴るんですよ。「長機…
機長・丸山大尉、正操縦・橘軍曹、…
2番機…機長・藍原少尉、正操縦・中
村軍曹、…3番機…機長・小林曹長、
正操縦・久美田軍曹…」と。それで、
「あ、そうか！」と知るのです。毎度
おなじみの搭乗区分の告示なのに、昼
間攻撃だということ、単機の時間差
攻撃ではなく編隊爆撃ということか
ら、あ、今度のはどうも特攻隊攻撃に
なるみたいだなと、前日の発令前にだ
いたいの予想がついていました。

—その搭乗区分があった後に、中村

さんの書かれた本にも書かれていまし
たけども、遺書を書かれたりみたいなの
こともされたのでしょうか？

中村…ええ。でも実際に遺書が家族に
届くかどうかはわかりません。軍事郵
便で父母・兄弟にお別れを伝えるとか、
あるいは辞世の句を作って書いてみる
とか…。多分「父母の健在を祈り、妹
よ、よき日本の妻たれ」というような
ものだったと思います。だいたい自分
の寝る場所の整理が主でした。ざっ

くばらんな話をするよ、新しい下着に
替えて綺麗にしてということだけれど
も、新しい下着に替えたなら古い下着は
どうにかしなくちゃなんないでしょ？
だから、私なんか2枚下着履いて行き
ました(笑)。どうせ向こうに行つて、
敵の軍艦にプチ当たつて粉々になっ
ちゃうんだ。どうせ分かんないだろう
と思つて(笑)。新しい下着に替えても、
古い下着の処置に困っちゃうものね。

—台湾で買い込んでいたタバコなど
も、全部整備員に分けたそうですね？

中村…そうですね、地上勤務の兵隊さん
に、みんな上げましたよ。

—貰つた方は、喜んだんじゃないで
すか？

中村…まあ、そうですね。私がデング
熱にかかつて苦しんだときに世話に
なつた機付きの兵隊さんでしたから。

—次の部隊は特攻出撃だというの
は、当然地上の勤務者も分かると思う
のですけれども、特攻へ行かれる側は
ともかくとして、特攻を見送る側とい
うのは、特攻に出撃する隊員たちに対
して以前と態度が変わるといふのは、
あつたのでしょうか？

中村…普通でした。特に特攻だからと
いう特別のものはなくて…。ただ、我々が
飛び立つ飛行場の外れの方には、見送
りの兵隊さん、地上勤務の整備の人た

ちなんか、ずつと整列をして手を
振つてくれましたね。クラーク・フィー
ルドから飛び立ったのが、飛行第九五
戦隊の7機です。あとデルカルメンと
いうところから、飛行第七四戦隊の2
機が飛び立って上空で合流しました。

私たちの飛行第九五戦隊の場合は、1機
5名ということで人数制限をしまし
た。人事係の木村准尉が乗つたと思つ
たら下りてきたので、「どうした？」つ
て聞いたら「いや、僕、交代しろつて
言われた」なんて…。乗る予定の人が
入れ替わつたり、そういった異動は出
発間際までありましたよ。

—特攻で出撃する直前にも、同じ飛
行機に誰が乗るかというのは、入れ替
わり立ち替わりみたいな感じで、最後
までドタバタしていた感じなのではし
ょうか？

中村…ええそうですね。すでに搭乗区分
が決まっていますが、出発間際に変更が
ありました。例えば私の飛行機だと、
尾部の13mm機関砲射手として乗るはず
だった会田という准尉さんが、直前に
交代して機から降り、小林光五郎とい
う曹長と交代になったと。そのおかげ
で、小林曹長は死んで会田准尉は生き
残つてしまふ。そのことを後々までも
「申し訳ない、申し訳ない」って会田
さんは言っていました。日本に帰つて

来てからも小林さんの遺体はフィリピンの海底にあるわけですから、『千の風になって』の歌詞ではないけれども、小林曹長の遺骨のないカラのお墓を何べんも御参りに行っていました。会田さん、もう亡くなりましたけどね…。

◆運命の昭和19年12月14日

——そして、いよいよ特攻出撃ですが、早朝だったのでしょうか？

中村…そうです。12月14日午前1時過ぎに招集がかかって飛行服に身を固め、兵舎から戦隊本部に行きました。そこでみんなで並んでいると戦隊長から、「この攻撃は特別攻撃隊『菊水隊』と命名せらる」という第五飛行団命令の示達がありました。帯広駐在時代に高松宮から戴いた日本酒で盃一杯の乾杯をして、配られた恩賜のタバコを分け合いましたね。

——普通に攻撃して万が一ダメだったら特攻をやればいいじゃないか、みたいなことが本には書いてありますね。

中村…示達の後で丸山隊長から訓示があり、その中で「確実な方法で敵を撃沈せよ」と。体当たりで沈めろとは言わなかったからね。私は最初から体当たりで敵船を沈めようとは考えていなかったです。いろいろ攻撃して、どうしてもダメな場合に最後の手段として

菊水隊戦術推定地点



昭和19年12月14日フィリピン・クラーク基地菊水隊出撃風景

体当たりをと思っていました。——離陸のときの心境はいかがでしたでしょうか？

中村…午前6時半頃に離陸しました。私は2番機で単操縦、500kgの爆装なので緊張したものです。地上滑走で

出発点に着きフラップを15度に開きました。尾輪固定、プロペラピッチ最低、オーバースト解除を再確認して離陸目標のアラヤット山を睨むと、南海の夜明けの空を背景にして地平線にくつきりと浮かんでいました。滑走路の横、遠くに見送りの戦友たちが手を振っている。操縦桿を握りしめ右手を振り上げて「出発！」と怒鳴り、エンジンレバーを徐々に前方に押し出してゆきました。愛機は待ちかねたように全身を震わせて突っ走り、最後の爆音を轟かせて大地を蹴りました。「脚上げ！」…加速度がつく…「フラップ！」…ぐぐぐと機が沈む…これでよし！と。

——そして上空での集合でしたね。中村…飛行場上空で空中集合して、編隊は翼を振って飛行場に別れを告げマニラ上空へと向かいました。あとは飛行第七四戦隊と合流して、マニラの上空で援護戦闘機60機と万衆隊の残りが来るという情報でしたから、彼らを待つのにだいたい空中で旋回していたんですよ。マニラ上空では夜も明けて良い天気でした。しかし全然姿を見せる気配がないので、隊長の丸山大尉も見切りを付けたらしく、目的地のパナイ湾へ高度3000mで向かったんですね。

——船団攻撃は、そのとき初めてだったのでしょうか？

中村…初めてでしたね。船団攻撃はやらさず、だいたいレイテ島のタクロバン飛行場の爆撃というのが、飛行第九五戦隊の任務でした。

——いきなりそれで船団攻撃の特攻命令を受けたわけですが、どうやってやるのか、って話から始まるわけですね。

中村…結局、跳飛弾による船団攻撃ということでしょう。跳飛弾攻撃というのは池や水の水面に平たい石を投げると、パッパッと水面を跳ね飛んでゆくあの理屈から考えた爆撃法ですね。私たちは対ソ連戦を目標に訓練を重ねて来た部隊なので、跳飛弾の使い方も爆撃方法も、ほとんど訓練を受けていない状態なんです。結局、隊の中で訓練をやったのは1度だけだった。

電波探知機を付けた呑龍に、専門家の少尉が「ちよつと操縦させてよ」と、北海道の根室・釧路の沖に軍艦島という島があるのですが、その島に向かって爆弾は落とさないけど、突っ込んでからガンと機体を引き上げるわけですよ。それをやったら主翼の付け根にある沢山打ってあるビスが、みんなワツと浮いちゃったっていうんですね。帯広に帰ってから整備の連中にガンガン文句言われて、「そんな無茶な操縦す

るんじゃないねえ！」なんて怒られましたけど(笑)。

本来の跳飛弾は、海軍では反跳爆弾です。攻撃方法としては、時速350〜400kmくらいの速度で急降下して、海面10mくらいをスレスレに飛んで、敵の船の100〜200m手前で落としたり、すぐに反転しないと、落とした自分の爆弾が跳ね返ってきて、めえの飛行機がやられちゃうと。そういうのは後で研究して(笑)、海軍の人に「反跳弾って、どうやるんだよ？」と聞いたら教本を見せられました。反跳弾の訓練は1回もやったことなかったですからね。主翼のビスが、みんな浮かんでしまうような飛行機だったから、向いていないというか、ちよつと重爆なんかでは無理だったんじゃないですか。山本末男という大尉が台湾沖で、敵の輸送船に跳飛弾を投下したと。それっきり何もやっていなかったらしいから…。あれは、あんまり良い攻撃方法じゃなかったんじゃないですかね。

——12月14日に出撃されて、何時間かずっと飛んでいらつしやると思うんですけど、そういうときにはどうやって攻撃しようかなとか、考えられながら飛んでいるのでしょうか？

中村…いや、飛ぶ前に私の機の連中が

集まったところで作戦会議を開きました。私が「一番大きな船をやってやる

う。どうせ死ぬのなら相手を大勢やつけたほうがいい。まず、俺が跳飛弾攻撃をかけるから前方射手の足立伍長は13mm機銃を全弾撃ち込んでくれ。爆撃後に敵船を飛び越して海面スレスレに飛ぶから、そしたら後上砲と尾部の13mm機銃は全弾撃ち込んでもらう。それでも敵船が沈まなかったら、反転して突っ込むからその覚悟はして貰いたい」と言うと、藍原少尉が「中村よ、なるべく小さい船をやるうや」なんて言っていたけど、みんな腹の中では覚悟を決めたようでした。

——そして、クラーク・フィールドからの飛行第九五戦隊7機とデルカルメソンの飛行第七四戦隊2機が上空で合流したわけですね。

中村…そうですね。9機の編隊で行動していました。天気は良いし気流も静かでした。眠くなるような気分ではばらく飛んでいると、編隊長機がどんどん高度を下げたので、これは敵の陣地が近いなと思っていたら、隊長機の背中にあるジュラルミンの赤白2本の信号旗がパンと立つんですよ。「戦闘隊形を組め！」という合図です。いよいよ来たな！と私は被っていた飛行帽

をはね上げて戦闘隊形に取り組みまし

た。普通の編隊でしたら《一機高・一機幅》と言って、飛行機の高さと幅が決まっているわけです。戦闘隊形になつたら《零機幅・零機高》というよ

うな具合にお互いの空間を詰めて、後上砲の集中砲火を張るわけなんです。うね。戦闘隊形の旗が揚がったから、みんなワッと9機が寄りました。それでバンバン敵機との撃ち合いが始まったわけですね。

——出撃した後は隊長機に付いて行くって感じだったのでしょうか？

中村…そうですね。通信士の足立伍長を前方の銃座に移したので、それからは僚機との通信は不能です。なんせ5人しか乗っていませんから、後はもう隊長機の動きに合わせて。重爆の爆撃でも、いざ編隊で爆撃となつたら、爆撃手は自分の照準は止めて、隊長機の爆弾が落ちるのを見てるんですよ。安全

安全で用心しながらボタンを握っているんですけどね。それで隊長機の爆弾が落ちたのを見た瞬間に、自分の爆弾投下のレバーを握るわけです。編隊長機が偏流測定から何から全部やって、それに合わせて自分たちも行動するということですね。通常一個中隊は3機。50kgの爆弾を11発積んでいるので、一度にドサッと爆弾が落ちます。

——爆弾がドサッと落ちた瞬間は、機

が軽くなってフワッと浮いたりするのが軽くなってフワッと浮いたりするのでしょうか？

中村…いや、浮いたり感じませんけれども、機が軽くなります。

——そのときは操縦の微妙な調整をするのでしょうか？

中村…ええ、それはあります。敵の高射砲弾が空中でボンボンと炸裂して上がってくる。それに合わせて飛行機の動揺を抑えるというようなこともパイロットの重要な役目です。そうしないと、ちよつとこう飛行機の角度が変わっただけでも、射手の照準も爆弾の照準も、全部変わってきますから。

——そういうときは、敵がバンバン撃ってきて、自分のやらなければならぬ任務があるわけですね。恐いとか何とか言ってる暇はないわけですね？

中村…そうですね(笑)。

——よく「恐くないんですか？」なんて聞かれることはありませんか？

中村…恐いとか何とか言っている暇はないですね(笑)。だから私らなんかは、戦闘隊形、翼が重なり合うくらい編隊長機に接近してガッツと操縦するわけです。今考えると、射手なんかもずいぶんやりにくかったんじゃないかと思うんですよ。細かい舵を使ってエンジンをつかしたり、あんまりふかすと編隊長機の前に出ちゃうし、絞りす

ぎると後に下がるし。そこをブーツとやって、編隊長機の傾きに角度を合わせるから、細かい舵を使うでしょ。横向きの機関銃手なんかは、しょっちゅうこうなっている（揺れている）わけですよ。あれは訓練も本当はやつとけば良かったかな、なんて思いますね。

ざつくばらんな話をすれば、満州での射撃訓練では、戦闘機が大きい吹流しをブーツと引つ張りながら飛ぶわけです。我々は飛び上がったら、一回りしてその戦闘機を後から追いかけて、乗ってる射手の人たちが、機関銃やら機関砲やらバンバンと、その大きな吹流しを目がけて撃つわけです。自分の弾には色が付いているので、地上に降りた後でその弾痕を見れば、誰が撃った弾か判るわけです。私らなんかも成績の悪い下士官が乗るとね、後から行って吹流しと編隊を組んでやることがあるんですよ。そうすると通り越せば良いんだけど、そこでウツと止まって、その時バンバン、バンバンと撃つと、自分の撃った弾が一杯当たった形跡が残るんです。後で帰って来て点検してみると、「おっ！ 何々軍曹の弾は、いっぱい当たってる！」と。本当は吹流しと編隊を組んでやったんですけどね（笑）。そうすると射手が、

私のところにお礼を言いに来るわけですよ。「どうも有難うございました！」って（笑）、お土産まで貰いましたね、羊羹貫つたり（笑）、こつちも「おお、そうか！」なんて…。でも、ああいう訓練じゃ実戦ならどうなんだろうと思つてね。それこそ、戦闘隊形をとつて細かい舵を使った場合、安定した銃の照準ができるかどうかは難しいですね。もうちよつと実戦に即した訓練の方法があつたんじゃないかなと、後になって考えています…。

◆編隊は次々に被弾炎上し海中へ落す

——12月14日の出撃も、敵機がワーツと来て、当然射手も撃つのでしょけれど、そんなときでも編隊長に付いて行くというのが、操縦士の基本だったのでしょか？

中村：そうですね。加速度をつけながら降下する9機編隊が、だいたい時速350kmくらいの速度で、これ以上の速度だとフラッターを起こすけど、なにくそつ！とばかりに編隊長機に合せて食い付いて行くわけです。そこへ敵が後上方から、攻撃をかけて来ます。編隊長機の後上砲射手・戸田軍曹が一番よく敵が見えるので、彼が歯を食いしばつて20mm砲をガンガン撃ちまくつ

てるのが見えました。後で考えると、本当は何で敵の船がいないのに、特攻隊の編隊を出動させたんだろうと。考えてみれば軍司令官の命令でしょ。丸山大尉は、なに馬鹿なことやつたんだろうと、こう思つたんですよ。だから、丸山大尉はどうすることもできない。現場に行つてみたら敵の船がいない…、自分は48名の部下の責任者を命じられている。さあ、どうしようと、丸山大尉は悩んだんじゃないかなと思つています。私もし特攻隊長を命ぜられた丸山大尉の立場だったら、どういう判断をしたんだろうと思つて…、なせ敵艦が全然ないんだから…。上空にはアメリカの戦闘機サンダーボルト（P-47）が18機くらいで待つていて、秦郁彦さんの調査では書いてありましたけど。

降下していったはいいんだが、高度計が100mになったとき、今度は突然隊長機が突っ込みながらの急角度の右旋回を始めました。時速350kmくらいで行つたやつが、ここでレバーを絞らないと（手振りで）こつちに出ちゃうわけですよ、私らなんか。あるいはこつちに出ちゃう。内側の私は仰向くような形で旋回する。レバーを絞ることで速度が急激に落ちます。海と島影が目に入る…。体当たりする敵の船はど

こだ？と一瞬思つたが、失速寸前の今はそれどころじゃない。これは大変な旋回をやつてるねって瞬間思つて、こいつはこう出ないと俺のほうで落つへ落ち込んで抜け出ようと思つたときに、敵の弾が私の機に当たつたんですね。旋回のときは機体が失速するから狙われやすい、敵はそこを突いて撃ってきたんですよ。

幸い右旋回中だったから、私はすぐに右エンジンの回転を上げ、プロペラスイッチを下げて片発飛行に移りながら右上方を見ると、さらに旋回半径が大きい3番機は、グワングワンとエンジンをつかして長機を追つかけないといけないのですが、その3番機の久美田軍曹機も敵にやられて火がついて、私の目の前で主翼から真っ赤な炎と黒煙を噴出させながら、海中に突っ込んでゆきました。操縦席の後ろで、日の丸の鉢巻をしめた機上機関の富田軍曹が別れの手を振つたように見えました。あれは本当に気の毒でした。私の飛行機も、そのときポコッという衝撃と一緒に、左のエンジンに敵の弾を喰らつて、ガガッと火が出て黒煙を噴出し空転しました。ああ、こりゃダメだということ編隊を離脱しました。

2番機は離脱、3番機は火を噴いて落

が経ったか、気が付くと機はぼつかりと海面に浮かんでいて、機関係の河井軍曹が浮かんでいる飛行機の左の主翼

たと思っただんですが、あんな海の真ん中に浅瀬なんかあるはずがないからねえ。

だわけだから…。発見されたこの飛行機にも（手記をご覧になって）、500kgの爆弾が積んであるからね、って言ったら（笑）、教えてくれた方が「現地に直ぐに連絡します」と言っていました。その後のことは、聞いてませんけど…。

たような左発動機やら20mm機関砲やら何やらが映っています、私が引張っていた操縦棒も映っているので、あの状況から当時爆発しないで、そのまま平らに沈んでる飛行機は、私のぐらいいろいかないのかと思っっているわけです。

神していたといいますが、気が遠くなった瞬間があったんじゃないかなと思いますね。まあ、あのときはいろいろ感じましたよ。あれれ、河合軍曹が海に飛び込んでいっちゃう、さあ、俺はどうしようかと。私が操縦席から「おい！河井軍曹！どうするんだ？」と訊ねると、河井は「向こうに見える島まで泳いで行く」と言いながら、航空長靴を脱ぎ捨てて飛び込んで行っちゃった。見ると、遙か水平線の彼方にうつつらと鳥影らしきものが見える。

泳ぎには自信がないし、さてこれからどうしたものかと考えていると、「中村、中村！」と私の名前を呼ぶ声がする。見回すと私の立っている主翼の後ろの海の中から、藍原少尉が周囲の海を血潮で真っ赤に染めて、「オーツ」とこう（手振りを見せて）手を振っている。私は「あっ！藍原少尉、やられたましたね！」って言いながら、飛行機の上に引張りを上げてやろうと思っ

尾部には藍原少尉のほかにも小林曹長という射手が乗っていました、もう最初からどうなったか消息が全然分からない。この飛行機を海中で発見したウインズ・インターナショナルの社長に、遺体みたいなものはなかったかって聞いたら、見つかなかったって言うから…。まあ、60年も経ってればねえ、人間の骨もなくなっちゃうのかもしれないですね。

機体が吸い込まれるように海中へと沈んで、藍原少尉と中村さんはどうなったのでしょうか？

私は操縦席に座ったまま腰まで海水に浸かっていたので、持っていた航空地図を破り捨ててゆつくり左主翼の上に出ました。

考えてみればね、500kgの爆弾を吊ったままだから…あれは、本当は途中で捨てたかったんですよ。だけど、敵がいよいよの海に捨てるのもったいないし、もしそれが島なんかに当たって爆発した場合に、住民が怪我したり死んだりしたら、また気の毒だし。また海面スレスレに逃げていましたから、高度100mくらいのところであの爆弾を離したら、どういう具合に機体へ跳ね返ってくるかも分からない。だから結局、爆弾を捨てるチャンスを失って、そのまま海の中に飛び込ん

まあ、機外へ流されちゃったかもしれませぬ。どこか飛行機とは別のところへ…。

中村…私は機体が沈んでいったあおりで、海中へと巻き込まれてしまい、再び水面に浮かび上がったときには、すでに藍原少尉の姿は見当たらず、大声

機体の被害状況はどうだったのでしょうか？

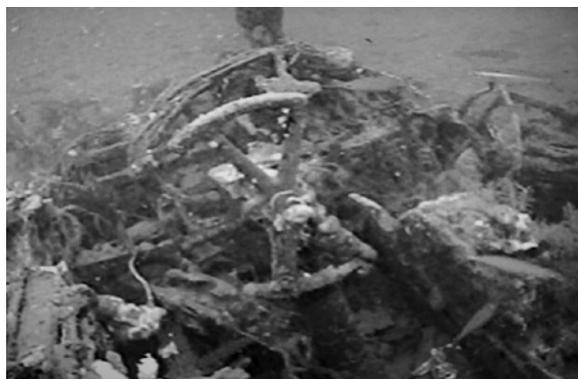
中村…操縦席のガラスは厚さ5cmはあった防弾ガラスを含めて全て吹っ飛んでいました。たぶん飛行機は後上砲の部分から真っ二つに折れて、主翼だけで浮かんでいたんだと思いますね。

中村…私は機体が沈んでいったあおりで、海中へと巻き込まれてしまい、再び水面に浮かび上がったときには、すでに藍原少尉の姿は見当たらず、大声

主翼の3番タンクが空で浮き袋になっていましたから。最初は浅瀬に着水し

たと思っただんですが、あんな海の真ん中に浅瀬なんかあるはずがないからねえ。

中村…私は機体が沈んでいったあおりで、海中へと巻き込まれてしまい、再び水面に浮かび上がったときには、すでに藍原少尉の姿は見当たらず、大声



ネグロス島沖水深53m呑龍

で叫んでみたけれども応答はありませんでした。海軍の飛行機乗りが着るような救命胴衣もないし、さあ飛行機が沈んじゃった、どうしようかなと思っただけで立ち泳ぎをしていると、沈んだ機に積んであった落下傘の塊がズボーンズボーンと音を立てて勢よく浮かび上がって来んです。「これは、ありがたいわい」と思って、天の助けとばかりに私はその一つにつかまって、運を天にまかせてプカリプカリと漂っていました。見上げれば空は晴れて風もなく、波も静かで今まで激しい空中戦があったことなど嘘のようでした。敵は撃墜した後も、生存者に対して執拗に銃撃をしてくると聞いていました。雲一つない青空には敵機の機影すらありませんでした。「助かったな」というよりは「生きてるな」という感じでした。手袋やら何やら、みんな海の中に捨てて「バイバイ」なんてセンチメンタルになって。(笑)。

——他には誰も生き残っていないかたつたのでしょうか？

「足立！大丈夫か？」と声をかけたんですが、何も言わずに泳いで行ってしまいました。自分だけでも助かろうという極限の人間性剥き出しの行動だったんだか、日露戦争当時の軍歌『战友』にあるような傷付いた战友をいたわるような物語は絵空事にすぎないのかと、何とも空しい気がしたものです。しかしながら運命とは皮肉なもので、結局私は生き残り彼らはみんな死んでしまった。パラシュートにつかまらなかった。私は海水を吸って窮屈になってきた皮の手袋やお世話になった飛行帽、航空長靴などを次々に「さようなら」なんて言いながら海に沈めてセンチになってたねえ。まあ、そのうちにどっかの島に流れ着くだろうなんて思いついた。——どんなふうに救助されたのでしょうか？

中村…パナイ湾だから落下傘につかまってもプカプカ浮かんでれば、何処かの島へ流れ着くだろうくらいに考えていたんで、どうにかなるんじゃないかかと思っていたら、ふと気が付くとフィリピン人らしき人たちが4、5隻のカヌーに乗って、海面に浮かんでいる落下傘やいろいろなものを近くまで拾いに来ていた。落下傘は絹製品だからね。それまで全然気が付かなかったんだ、フィリピン人がそばに来てるってことは。その中の1隻が落下傘の一つにつかまってる私を見つけて寄って来た。「おう！」つと、落下傘につかまらなから手を振ったら、乗ってる男の一人が「オウ、トモダチ！トモダチ！」なんて叫びながら手を差し延べてきた。

フィリピン人に助けられて、友軍の基地に送り返されたというような飛行機乗りがいることは何回も聞いていたんで期待して、「オウ、サンキュウ、サンキュウ！」とか言つてカヌーに引っぱり上げて貰ったね。彼らはいかにも好意を持っているという態度を示しながら、私の着ている飛行服がびしょ濡れだから「ノーグッドだ」と連発して脱ぐように手真似で話しかけてきた。それでついその気になって全部脱いで、ふんどし一本になったところへ、今まで親切顔をしていた野郎が手にキラキラ光る山刀を振りかざして、ガツと襲いかかってきた。こっちは助けられてホッとしていたもんだから、虚を突かれて奴らに縛り上げられてしまった。だらしがないようだけど、長時間泳いだせいで疲れていたから抵抗する元気もなかったね。両手首を海水の染みた麻縄でギリギリ縛るんですよ。で、彼らは「カポイ、カポイ！」なんて叫んで、何がカポイだと思つたら両手首をギュウギュウ縛られましたね。

◆土民に救助されそのまま捕虜に

——救助だと思つて安心していたら敵に捕まつてしまったんです。

中村…そうですね。私を乗せたカヌーは少し大きい親船のところへ着きました。が、親船の帆柱には、私を見捨てて泳ぎ去った河合と足立が、首に縄をつけて帆柱に縛り付けられていましたよ。「何だこれは、大変なことになったわ、ちゃったね」なんて。でも相手はフィリピン人だから、まだ捕虜になつたって感じは全然しない。フィリピンと戦争しているつもりはなかったからね、我々はアメリカ軍と戦つてるんだよ。場所がフィリピンだつていうことだけで、フィリピン人と戦つたという意識はないですよ。

——ケガはしなかったのですか？

中村…島に着いてから3人は別々に海岸の太いヤシの木に縛り付けられました。そこで河井が左肘を骨が飛び出すほどの負傷をし、足立は右膝を打つて脚が曲がらないようなケガをしていることが分かったけど、2人ともそんな身体でよくまあ泳いで来たものだと感心した。私は顔の右側にガラスの破片がすり傷をしていたのと、右脇腹

に十円玉くらいの大きさの火傷を負っていたが、他にケガはどこにもなかったね。

あまりの環境の変化にボヤツとしていたら、アメリカ軍の服を着たフィリピン人の男が、裸馬に女と2人乗りで、海岸の砂を蹴り立てて駆け付けて来た。その男は抗日ゲリラの将校らしく、私らを捕まえた連中と何やら話をして、いたんだけど、そのうち話がついたのか、私たちは縛られて裸足のまま別の場所へ移動することになって、飛び上がるほど熱い砂浜を歩いたり、ジャングルの中に入ったりしながら長い間歩かされたんだ。途中で2カ所くらいに大きな鉄鍋が灌木の茂みに隠してあったり、中には塩味の付いた外米米が入っていて、それを手づかみで食わされたが、ゲリラの食糧なんだろうな、美味しいものではなかったね。

海岸から少し入った岩陰にゲリラの見張り所のようなところがあって、そこへ連行された。3人はそこで初めて話をしたんだ。「どうやら捕虜になったらしいが、故郷の人に迷惑をかけないように変名しよう」と、たしか河井が言いだしたと思うんだけど、私は斎藤十郎、足立が横山道雄になったんだ。肝心の河井の変名は何だか忘れてしまったよ。

——いよいよ捕虜への尋問が始まるわけですね。

中村…しばらくしてから、見張り小屋で尋問が始まった。尋問するのは日本語の上手なフランス人形のように綺麗な白人女性だったですね。ふんどし一本の私は、ゲリラの兵隊が着用しているカーキ色の半ズボンを穿かされてから、彼女の前に連れ出された。もちろん両手は縛られたまんま、後ろには自動小銃を持ったゲリラが見張っている。彼女の前にある机には、呑龍の面が置いてあって、それを指差しながら、「アナタノ、ヒコーキノシゴトハ、ナンデスカ？」といった調子だよ。連中は呑龍を「ヘレン」と呼んでいた。後で分かったことなんだけど、敵の飛行機をニックネームで呼ぶんだねえ、それも女の名前だ。海軍の一式陸攻は「ベティ」と呼んでたね。

私は操縦士だったと言うと、後でうるさく聞かれそうな気がしたので、「私はマシンガン、マシンガン」なんて言って機銃を撃つ仕事をしてみせたんだ。でもバレてたみたいだね、私が操縦士だってことは(笑)。3人の尋問が終わると、どういうわけか、河井と足立は残されて、私一人だけが奥地の屯所へ行くことになった。いい加減なことを言ったので、これは銃殺されるかも

しれんぞと思っていたんだけど、逆の結果になったことを知ったのは後のことだった。もう夜になって暗くなっていたんだけど、私は自動小銃を持ったゲリラ2人に連行されて、珊瑚礁の岩をよじ登り、谷を下ってジャングルをかきわけながら奥の屯所へ向かった。

ジャングルの中には、あちこちにスピーカーが取り付けられていてジャズ音楽が流れていたよ。ここが戦場なのかって思ったほどだ。余裕だよな…。奥の屯所といっても、ちよつとした空き地とニッパハウス(熱帯地方のニッパ椰子の葉で屋根を葺いた家)が数棟建っているだけで、電灯が点つているわけじゃない。ガンリンを入れたマニラビールの小瓶に布を差し込んで、火をつけたのを灯りにしてるだけなんだ。その食堂に連れて行かれ、ゲリラの奴らに囲まれながら、ブリキの皿に盛ったジャブジャブの外米米と魚の唐揚げを食わされた。奴らも食事中だったらしいが、手の指でこう器用にまとめて口に運んでいたね。私がスプーンを要求すると、こつちを見ている連中がオーとか言っって声を上げていた。後で聞いたたらスプーンやフォークを使うのは将校だけだったらしいんだけど、そのときは貸してくれただよ。

銃殺にならなくて良かったです

ね。奥の屯所に連行されたのは中村さん一人だったのでしょうか？

中村…そこにはその日のうちに海軍の偵察機の2人、翌日になって私らの隊長機の通信士だった出納軍曹、陸軍の偵察機の2人、歩兵の上等兵が1人と、次々と連行されて来た。あと以前からこの屯所にいた陸軍の液冷戦闘機(编者注:三式戦闘機「飛燕」と思われる)乗りだったという男、合計8人くらい、捕虜になったのがあちこちからその晩集められた。みんな不時着や偵察に出て捕まったそうだ。

陸軍の偵察機の2人のうち、偵察員が尋問で話が合わないという理由で銃殺されてしまった。彼は背丈の大きいキリツとしたハンサムな顔立ちだったが、不時着のショックで顔を打ったらしく、両眼が真っ赤に充血していた。奥の屯所に連行されなかった河井や足立もそうだけど、どうやら負傷している捕虜は殺してしまうようだった。それっきり河井と足立の姿を見ないんだ。後で奥の屯所に来た海軍の操縦士の話では、河井と足立らしき二人がゲリラに連れられて、ゲリラの一人は銃、ゲリラの一人はスコップを担いで、一緒にどこかへ行ったのを見たというんだね。オーストラリアの捕虜収容所で、レイテ島付近のアメリカ

軍の野戦病院に収容されてた奴とかから情報を集めてみたけど、そういう者は居なかったということだった。2人はケガをしていたので、やはり処刑されたのかなと思うね。

奥の屯所には2週間くらいはいたと思うね。出撃が14日で、クリスマスのお祝いをゲリラたちがやっていたから、10日以上は経っていたはずだ。日中はなんとということもなかったけど、夜になって眠るときには、逃亡しないようにニツパハウスの竹床の上に、バクサイをした形で手足を丸太ん棒に足首と手首を縛り付けられ、仰向けに寝かされたね。ここでも不寝番が自動小銃を持って見張っていたよ。夜中に小便がしたくなったら、不寝番に向かって大声で「ションベン！」と叫ぶと、私のチンポコを引っ張り出し、大の字になっている体を裏返してくれるので、竹床の隙間から床下に用を足すんだ。下は砂地なのできれいに吸い取ってしまう。そのときは「今度ここへ来たら、絶対爆撃してやるぞ！」と(笑)、そういうふう思ったね。風呂はすぐそばを流れる川で水浴びをした。川の水は茶色できれいな水ではなかったし、ワニがいるとゲリラが言っていたよ。川岸の木の枝には大きなトカゲがとまっていた。

ゲリラの兵隊は、いつも裸足なんだよ。背が小さくて訓練っていうと竹の筒ですよ。このくらいの(手振りで)小銃の長さくらいの竹の筒を持って英ね、こっちにゲリラの下士官がいて英語で号令をかけると、バツバツ！と竹の筒を担いで下ろしたりね。行進するのも、みんな裸足だから。そういうゲリラ兵だったから、私らと仲良くなるのも早かったですよ。下士官が小屋の中からその土民を集めて、「マン！エクスサイズ！ワン・ツウ・スリー・フォー！ワン・ツー・スリー・フォー！」なんてやって、こっちも一緒になって体操やったり(笑)、そんなことをやって過ごしていました。

私らはもう今日は何日なのか、今は何時なのかなどはどうでもよくなったていたね、いつ死ぬか分からない身であるけれど、死ぬまで生きてやろうというところだ。ゲリラや土民たちとも仲良しになり、彼らも私らの頭髪を刈ってくれたり、ガラスの破片でヒゲを剃ってくれたりしました。海岸に出て、この島(ネグロス島)の多分バコラドの友軍基地を爆撃に行くらしいアメリカ軍のコンソリ爆撃機(B-24)の大編隊と一緒に眺めたりしていました。——「ファイリピン人は敵」という意識がなかったってことですね。

中村…そうですね。だいたい我々がファイリピン人と戦っているという意識は最初からないんだから。本当の敵はアメリカだしね。だからそんなことで、ただ助かったっていう意識は、ホントないよね。オーストラリアの捕虜収容所に行ってもそうでしたね。助かったという意識はなかった。その前にホーラ

ンジャ(現在、西部ニューギニアのジャヤプラ)の捕虜収容所にいたんだけど、そこは大規模なもので、ジャングルを切り開いて有刺鉄線の柵を張り巡らせた中に、大きなニツパハウスが幾棟も建てられていて、真つ黒に日焼けした日本軍捕虜が、元気な者もそうでない者もウジャウジャといたよ。こんなに大勢の捕虜がいたこと自体が驚きだったけど、その連中が元気に飯を炊いたりしているのを見て二度びっくりだったね。だいたい、日本軍には戦陣訓(せんじんくん)っていうのがあって、生きて虜囚の辱めを受けず。死して罪禍の汚名を残すことなかれ。っていうことが書いてあったでしょ。有り難きご託宣だけど、そんなものクソ喰らえ！のバイタリティだよ。戦陣訓だけなんだよ、何かこう派手にクロースアツプされて、いろんなことが語られているのは…。

◆オーストラリアの捕虜収容所で終戦

——中村さんはオーストラリアの捕虜収容所で終戦を迎えられたことになるのですが、そのときの心境は今思い起こすといかがでしたでしょうか？

中村…終戦のときは収容所で「日本が負けた」という情報だけです。だから「ジャパン・サレンダー」の見出しが出る新聞を持ってきたオーストラリアの兵隊が喜んでいてね、「サレンダーって何だ？」って聞いたら「無条件降伏だ」なんて感じでしたよ。日本が負ける気はしていたんですよ、本当はね。ファイリピンで捕虜になって「俺が墜落するようじゃ、これは日本は負けるな」と、そう思っていましたね。それから今度はアメリカ軍に連れられて、ホーランジャヤオーストラリアの捕虜収容所や飛行場なんかに着陸してみると、もう凄いやつだもんね。日本じゃちよつと考えられないような、たくさん物資が敵さんにはワイワイある。それでも、アメリカの雑誌で『ライフ』っていう雑誌があつてね、オーストラリアの兵隊がそれ見ながら「うん、こうだこうだ」って話してるんだけど、最初の頃は紙が厚かったんですよ。それがだんだん捕虜生活の終わり

の頃になってきたら、その兵隊が持つてくる『ライフ』が紙がうんと薄くなってきた。だから「あ！これは敵も物資がちよっと不足してきているんじゃないのか」って。「よし！俺もうんと飯を食らって、敵の糧秣を減らしてやろう！」ってなことを言ったことがありましたよ（笑）。

——昭和16年に戦陣訓という訓令が示達されて、捕虜のことについてもいろいろ書かれていたりするんですけども、やっぱり捕虜になったことについて中村さんにとっての特別な思いは、今でもあるのでしょうか？

中村…たしかに今も心のどこかに引っ掛かっているね。だから無理に天皇陛下が終戦の詔勅（玉音放送）なんていうのをラジオで放送して、敵に降参してるんだと全軍に公布したんです。日本国民全員が捕虜なんだと思っっています。私は終戦後、32年間警察官をやっていました。昭和27年の条約ができるまでは、全部GHQの指令で警察も動くわけですよ。丸の内の交差点で進駐軍の憲兵（MP）と一緒にあって、笛でピッピッなんて手振りで踊るような交通整理もやりました。

——他の戦争体験された方の話を伺うと、例えば特攻隊にいた方とか、シベリアで抑留された方が日本に帰ってき

てから、特攻隊の前にいたっていうのが判ると「あいつ、特攻崩れだから」って嫌がられたり、シベリア帰りだと分かる。「あいつ、アカだから」っていう風で、すごく虐められたとか、それが判ると仕事をクビになったりして、そういうことは絶対に人に言えなかったっていう話は、よく聞きますけど：それは、やっぱり分かるって気がしませんでしたでしょうか？

中村…まあ、そうだね。私は司法保護団体の伯父のところに行って、1年か2年くらい勤めたのかな。すると少年審判所の所長が視察に来て、私の伯父に「あなたのところの職員には、非常に目つきの悪い男が一人いる」と言うことを、伯父に言ったそうです。そしてたら伯父がね、「ああ、あれは私の甥で、空軍の飛行機乗りで、特攻隊上がりだから目つきも悪いんだらうから、それは心配ないから」というようなことを言ったって、伯父が言っていました。特攻崩れじゃなくても、そういう態度があったのかも分からないね。「野郎、どうにでも来やがれ！」っていうようなね。オーストラリアから内地へ帰る途中の引き揚げ船の連中が、ろくに食料を出さず横流ししているのを知って、これはおかしいとみんなで一斉に蜂起し、引き揚げ船を分捕ってオース

トラリアから積んだ米を全部食ってしまった。あれは一番気持ち良かったね！そしたら大阪商船に勤めていた奴が文句言ってきたよ。それで、第二台海丸っていう引き揚げ船で支給するものをネコババしていい思いした事実があるかどうか調べさせてくれなんて言ってきたよ。「おう、調べてくれ」って言ったの。とんでもない野郎がいやるから（笑）。

——軍用機に乗って戦死された方は、何万人もいらっしやると思うのですが、特に特攻で亡くなった方に対して、中村さんご自身の体験から特別な想いはあるのでしょうか？

中村…それが特攻であろうと普通の死に方であろうと、戦争であるとか災害だとか、歴史の大きな流れの中の渦巻きのようなもので、ある時代に生まれ合わせた人間の宿命だと思っっています。これは個人ではどうしようもない。いくら人間が騒いでも防ぎようもない。ま、特攻ということについて言うなれば、もうちよっと生き残って帰った奴らを丁重に扱ってべきだと思いますよ。私なんか帰ってきたら「感状、上聞に達しているから、お前のはお詫び言上だ！」ってなことを復員官が言うわけですよ。「感状、上聞に達しているからどうだって：てめえが勝手に

やったことじゃないか！」ってね。こっちがお願いで頼んだわけでも何でもないのに、お詫び言上だとは何事だ！って、ねえ！（笑）そういう扱いでしたよ。これ、私の葬式のときの弔辞ですけど（資料を出して）、この師団とか連隊だとかで慰霊祭をやったときの紙ですよ。このお粗末さ、見てください！（笑）それがね、ま、何百人も特攻で死んだから「当時としては良い紙使っているんじゃないですか？」なんて：ガリ版刷りですからね。

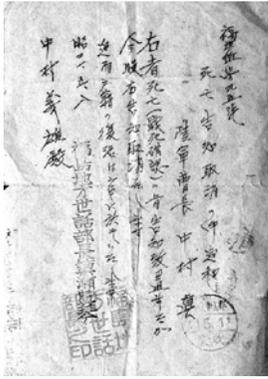


葬儀の時の弔辞

——たしかにそうですね。やっこの思いで命賭けて戦って、こんな紙ペラペラで帰ってくるかと思うと：。

中村…これももう現物の文字が劣化して消えちゃうから、コピーとってあるんだけど（笑）、現物も残しておかないとね。

——でも、特攻で亡くなったと思っただけで、戦後生きて帰って来て、ご家族もビックリされたでしょうね。



死亡告知取消通知



自分の葬儀の祭壇

中村…そうだねえ。あの、いつ帰るとも何とも音信がねえ。で、帰って来てから戦死公報を持って、第二復員局に出頭しろなんて…そんな通知が来て、もう死んだことになっているから、戸籍はなくなっているしね。死亡通知取

り消しなんてね、簡単なハガキ一枚がちょよんと来るだけでしょ。その扱いをもう少し丁寧だね。生命を捨てて戦う精神こそが立派であって、死んだ生きたというのは、あくまでも結果だからね。

—今思えば、援護の戦闘機もなく重爆だけで特攻だと命令され、敵艦の位置確認さえろくにしていないのに真昼間から突っ込まされて、…そんな命令をする軍上層部に対して怒りが込み上げると言いますか、何か思われることはありませんでしたでしょうか？

中村…これはもう怒りを通り越して、なんて拙劣で下手な戦争指導者たちだったんだろうと…。戦後いろいろ本を読んでもみると、まあ一番の元凶は軍司令官の富永恭次陸軍中将のようですね。最初我々には60機の援護戦闘機が付くという情報で飛んでいったでしょ。

行ったら1機も見えないんだもん。あの本によれば3機来たとか、そんなことを書いてあります。私が見たのは軍偵1機。こうして見たら軍偵が飛んでいるんですよ。「あれが、戦果確認機かなあ？」なんて思ったけど、それがいつの間にかいなくなっちゃったし…。

そのときには怒りを感じることはありませんでしたよ。後になって考えるとね、なんて下手くそな戦争のやり方な

んだらうと思います。敵の船が1隻もいないということに ついても、歴史学者の秦郁彦さんの調査では、12月13日にミンダナオ海を埋め尽くすほどの軍艦・輸送船・その他が集まったと。ネグロス島を越えて、海軍の特攻機が2機か3機、ナツシユビルという旗艦に突入して大損害を与えて司令官が替わった、っていうんでしょ。その新しい司令官がコースを変更したことが原因で、日本軍が大船団を見失ったということなんですけどね。

ある本では日本軍は183機の特攻機を出したけど、輸送船団を発見できないまま、ほとんどが撃墜されたと書いてある。ネグロス島なのかパナイ島なのか上陸地点がはつきりしない輸送船団を、アメリカ軍がこっちの別な島に上陸するように見せかけたっていうんだけど…：…そういった細かい点は当時の私には分かりません。それで結局、敵の輸送船団はその翌日ミンドロ島に上陸します。だから、あの付近にいたことは間違いない。ネグロス島だとかスール海だとかね。だけれども1隻も見つけられなかった…。

捕虜収容所で一緒だった海軍の士官候補生が、日本に帰って来てから調べてくれたんですが、海軍もあのとき我々と同じ目標に対して、特攻機その

ほか約40機を出撃させたんだけれども、結局、敵の輸送船団は発見できなかったそうです。そしたらマニラの上空で、敵の戦闘機群と特攻機群が遭遇したという記録が海軍に残っているそうです。あれについては日本軍の特攻機183機と書いてありましたがね。

飛び出したけど大半が撃墜された。その中に我々菊水隊の9機も入っているんだらうと思いますね。まあ我々の方でも、特別攻撃隊というものの存在について、ほとんど事前に知識はなかったから。ただ《体当たり》だと。普通、そんな特別に爆弾を抱えて直接体当たりするようなことをしなくても、大暴れして弾尽き矢折れ：（笑）、もうどうしようもなくなれば自爆すると、敵の陣地に突っ込むというのは、これは昔から特別攻撃隊なんて言わなくても、空軍の兵士の最期の死に方としては、それが当たり前だったんですよ。それを特別攻撃隊というような形でもう…。私らは3000時間くらい乗っているわけだから中堅パイロットでしょ。後の沖縄戦の頃の特攻隊員のように、飛行時間も少ないのにブーツと離陸すればあとは体当たり、では戦争になりませんよ。やり方としては一番ダメな末期的症狀でしょうね…。

—特攻とかいろいろ戦争体験がある

んですけども、そういうことを周囲に語れるようになったのも、戦後しばらくしてからでしょうか？

中村…なるべくね、忘れたいとは思ってましたよ。私の戦争体験のことで、秦さんが警視庁に取材に来るまでは、誰にも特攻のことは話したことなかった。両親にも亡くなるまで黙っていたね。警部補になってからですよ、「中村警部補、こういう人が戦争のことで聞きたいって、インタビューに来てるぞ」っていうことで、私の部屋に来てもらって、それでいろいろ秦さんと話が始まったわけだ。そうなると話をするのにいろいろ思い出さなくちゃならないわけだ。ところが、当時のことを確かめようと思っても、みんな死んじゃってるから、確かめる相手がどこにもいない。

他に生き残ったのでは、出納軍曹っていうのが大分県にいたけれども、帰ってから山本という家に養子に行つて、ポコッと死んじゃったんだね。出納軍曹は編隊長機の通信士で少年飛行兵。だから戦後よく顔を合せて話をしたんだけど、最後に中隊長（丸山大尉）はどうして亡くなったの？って話を聞いても、どうも要領を得なくてはっきりしないんで、現地で捕虜になって「お助けください」って降参し

たのかなあ。そんで死んだのかなあなんて思うんだけど。でもそう思うのはちよつと失礼だもんね。本当のところは分からないんだから。出納軍曹本人も言わないんだもん。

隊長機が不時着して乗員が海に投げ出されたっていうことが書いてある本もあるし、海岸に不時着してゲリラと丸山大尉とみんなどの間でピストルで撃ち合いになって、それで戦死して自分捕虜になったと書いてある本もあるし。その辺りがはっきりしない。何か思い出しながら書いていても、あれはどうだったかねって、確かめる人がいないんだもん、誰も…。

今、第五飛行団会の世話人は、私と大原重造というのと松田功っていうのと3人でやっているけど、特別操縦見習士官だったり陸軍士官学校57期生だったり戦場には行ってないんです。だから留守隊で基地に残っていた人たち、第五飛行団会っていうのを作ったんですね。第五飛行団会も松田さんっていう人が、戦後は全日空に勤めていたのかな、それで田中角栄の贈収賄事件でロッキード社からお金を貰ったじゃない。その証人として国会喚問を受けた松田さんっていう人だ。ロッキード事件が終わってから松田さんが吞龍で死んだ人を慰めるのに何か

作ろうじゃないかと発案をして、島根県の上奥からお地藏さんを探して来て、北条時宗の建てた北鎌倉で有名な円覚寺、あそここの閻魔堂の前に《吞龍地藏大菩薩》として置いてあるんですよ。毎年9月にお祭りをやっています。



北鎌倉・円覚寺・吞龍地藏大菩薩

——中村さんも、そのお祭りに参加されているのでしょうか？

中村…私は世話人だから毎回参加しています。みんなよりちよつと年下になっちゃってるんで、連絡から通知から名簿作りから何から、全部こつちがやらないといけないんで；でも去年で終わらだね、年に1回やってたんだけど、もうくたびれたよ（笑）。

◆若い人たちに伝えたいこと

——書かれたご本にも、おじいちゃんが孫に伝えるみたいな形式で書かれていますんですけど、我々若者に対して、

これだけは伝えておきたいとか、これだけは忘れないで欲しいとか、そういう思いはありますか？

中村…うん。だからやっぱり、人間は無理をしないで生きていくってことに、徹底した方が良くと思うね。さっきも言ったように、時代の流れの渦巻きの中に生まれた人間は、その宿命としてその時代に果たさなくちゃいけない、若者としてやらなくちゃならないことが必ずある。兵隊が必要なら兵隊をやると。渦巻きから逃れた時代に生まれた人たちは、今もその時代だけではないかにも平穏だ。ところがここに北朝鮮がボンとミサイルを撃ち込んできたら、たちまち時代の渦巻きが大きくなって、若い者は銃を取って戦う立場にならないとも限らない。あるいは、日本が核兵器で武装するというような状況にならないとも限らない。だから、その時代時代の流れに逆らわないで、その運命のままに生きていくというよいうな生き方がいいよと。無理をして逆らうなど。無理した奴は、あんまり良い結果に終わってないから…。

——今仰ったように、北朝鮮問題などがクローズアップされて、改めて戦争が話題になったりしますが、中村さん自身が激しい戦争体験をされて振り返り、改めて戦争とは何でしょうか？



中村：戦争についてはいろいろな言われているけれど、結局、国と国との外交の手段の末端、外交が破綻した状況で始まるのが戦争であろうと思うので、政治家を選ぶ場合には、戦争に国の進路を持つていくような政治家を選んでダメだね。その代わり、もしどうしても戦争になるという形になったら、これはもう国民を挙げて戦争に参加して絶対に勝たなくちゃいけない。戦争になったら食うか食われるかだよ。だから戦争になるような状況を迎えるような政治家を選んでダメだということが根本だね。戦争というのは国益

を巡る究極の外交手段ということだから、国益を損なわず戦争にならないような外交をする政治家を選ぶということ。でも、そのときの雰囲気によって、何とも言えないよなあ。日本が国際連盟を脱退したときに松岡洋介外務大臣が、イガクリ頭をバツと振り立てて、国際連盟の会場を大手を振って歩いて、堂々と「国際連盟脱退」と言ったときは、もう日本国民は拍手大喝采。「よくぞ松岡、偉いな、よくやった」というような雰囲気から押しの押し付けでもなく国民全体にあったからね。それが結局、日独伊三国軍事同盟になり、戦争突入したからこそ今現在があるわけだから。その時代時代の風潮もあるからね。一概に「戦争はこうだ」とは言えないけれども、その時代に相応しいことを生きてゆく生き方がいいよと私は言いたいですね。そんなことだな（笑）。

——今日は貴重なお話をありがとうございました。（……了……）

中村 真（飛行第九五戦隊・陸軍曹長）軍歴

1923年（大正12年）3月	福島県郡山市で生まれる。
1941年（昭和16年）3月	逓信省航空局仙台地方航空機乗員養成所入所。
1942年（昭和17年）3月	同所卒業。
5月	飛行第二戦隊入隊。岐阜陸軍飛行学校派遣。
10月	同校卒業。下士官候補者課程修業。
11月	任陸軍伍長。
	飛行第一〇五戦隊配属（浜松）。
1943年（昭和18年）5月	教導飛行第九五戦隊配属（満州国鎮東）。
11月	任陸軍軍曹。
1944年（昭和19年）11月	出戦命令により飛行第九五戦隊と改称。
12月	任陸軍曹長（特攻出撃により）。
	陸軍特別攻撃隊菊水隊二番機正操縦員として出撃。
1946年（昭和21年）12月	故陸軍少尉任官・功四級勲六等旭日章授与内定通知あるも生還のため取り消し。

新刊図書紹介

○マクスウエル・テイラー・ケネディ著・中村有以訳『特攻 空母バンカーヒルと二人のカミカゼ―米軍兵士が見た沖繩特攻戦の真実―』



激しく炎上する空母バンカーヒル

のバンカーヒルに、菊水六号作戦で突入したのが、第七昭和隊に属する2名の特攻隊員、安則盛三海軍中尉（予備学生13期）と小川清海軍少尉（予備学生14期）である。

本書の著者マクスウエル・テイラー・ケネディ氏は、ロバート・ケネディ元司法長官の息子であり、ジョン・F・ケネディ元大統領の甥に当たる。現在、ブラウン大学の研究員として海洋史を研究する彼が注目したのが、1945年5月11日に特攻機の突入を受けた、米軍の空母バンカーヒルの物語である。

鹿屋基地を飛び立った安則・小川両機の500キロ爆弾を積んだ零戦による特攻で、バンカーヒルの乗員400名近くが死亡、260名以上が負傷した。本書は、この1945年5月11日の激闘を中心にして、そこに至る経緯、そしてその後を描いた、渾身のノンフィクションである。

バンカーヒルは、米軍の誇るエセックス級の大型空母であり、任務部隊の旗艦を務める重要な空母であった。そ

本書の内容は、まずこのように紹介される。「著者マクスウエル・テイラー・ケネディは本書で、日本の若き特攻隊員の人生を追うと共に、空母バンカーヒルの乗員たちの知られざる英雄的な行為―水兵とパイロットが力を合わ

せ、命がけで救助を行い、最終的に艦を守り抜くまでの一部始終―を見事に描き出した。何年にも及ぶ綿密な調査研究と、日米両国の生存者へのインタビューによって、極限の戦いの中でそれぞれの国のために尽くした男たちの真実の姿が今、明らかにされる」と。

そして、著者ケネディ氏は、本書の基本的なスタンスとして、日本の「特攻」に対し、次のように述べている。「彼らの最後の望みは、未来の日本人が特攻の精神を受け継いで、強い心を持ち、苦難に耐えてくれることだった。私たちは、神風特別攻撃隊という存在をただ理解できないと拒絶するのではなく、人々の心を強く引きつけ、尊ばれるような側面もあったのだということ、今こそ理解すべきではないだろうか」。

そして、あくまで日米双方の視点でこの戦いを描くべく、多くの元特攻隊員やその家族に、精力的な取材を行っている。その数、優に100人以上、取材のための来日は3度にわたった。

取材に応じた元特攻隊員の多くは、海軍予備学生として谷田部基地で訓練を共にした仲間たちである。著者は、彼ら予備学生たちが置かれた立場やその心境を丹念に追いつつ、何が軍部を特攻作戦に駆り立てたのか、隊員たち

は、いかにしてそれを受け入れ、実行することができたのかを探ってゆく。

圧巻は、本書のメインである5月11日の突入場面である。これまで、日本側の資料では、特攻における実際の場面を「当事者」の視点で描くことが難しかったが、アメリカ側の詳細な資料と、元隊員たちから集めた数多くのナマの証言を基にした本書は、米兵を震え上がらせた特攻の「実際」を、克明に、そして残酷に描き出している。

当日、まず最初に突入したのは安則中尉機、バンカーヒルの後方から突入し、500キロ爆弾を投下。爆弾は飛行甲板を貫いて左舷側壁を突き抜け、海上に達したところで炸裂、左舷側に多くの死傷者を出す。次いで機体が突入、甲板上の航空機をなぎ倒しながら横滑りし、そのまま海へと落下した。

この突入によって、多数の艦載機が発火・炎上し、バンカーヒルは大火災を起す。

安則機の突入に続き、小川少尉機も空母のアイランド（艦橋）上空から急降下し、爆弾を投下、その後、自身もこのアイランドの付け根部分に突入した。小川機の放った500キロ爆弾は、空母の三つの階層を貫いて中心部を破壊し、艦内に更に大規模な火災を巻き起こした。

また、機体そのものもアイランドを大破させて多くの死傷者を出したが、小川少尉の遺体は、奇跡的にほぼ無傷のまま艦上に残り、何とその遺品は、戦後56年経った2001年に遺族に返還されることになった。

本書は、「1945年5月11日の特攻」に関する事実を単に列記・記録したのではなく、あたかも一編の映画のように、迫真の人間ドラマとして生々しく「再現」した、戦う男たちの感動の物語である。

発行日 2010年7月17日
 四六判・ハードカバー・672頁
 定価 3990円(税込み)
 発行 (株)ハート出版
 〒171-0014
 東京都豊島区池袋3-9-23
 TEL 03-3590-6077(代表)

事務局からのお知らせ

1 第59回特攻平和観音年次法要について
 例年どおり、本年も9月23日(木・秋分の日) 14時から、世田谷山観音寺において、特攻平和観音年次法要が、駒繁社との神仏習合により斎行されます。その詳細に関しましては、同封の案内書に記載しておりますので、皆様お誘い合わせのうえ、ご参加くださるようご案内申し上げます。

2 フェリピン特攻隊慰霊祭への参加について
 毎年10月25日に、フィリピンのマバラカットで挙行されている現地主催の特攻隊慰霊祭に、今年も従来どおり、当協会の代表者が参加いたします。昨年も会員を含め、個人的に参加された方が二、三名おられました。「百聞は一見に如かず」で、現地慰霊祭に参加されることをお勧めいたします。当協会の代表者と同行を希望される方は、行動の詳細について、当協会事務局までお問い合わせください。

電話 03-57730-1016
 FAX 03-57730-1017

事務局からの報告等

寄附者御芳名(敬称略)

(平成22年4月1日～6月30日)
 (単位千円)

- 一〇 渡部 市郎 七 小堀桂一郎
 - 三 大地 達男 三 三浦 正之
 - 二 五味 和宣 二 川田 信雄
 - 二 潮田 貞 二 阿部 敏行
- 御芳志誠に有り難うございました。

◆ ◆ ◆

新入会員名簿(敬称略)

(平成22年4月1日～6月30日)

岩手県	及川 宏行	福岡県	今井 正己
秋田県	榎谷 政夫	鹿児島県	壽 穂美
茨城県	本間 尚衛	岩崎 佑美	
群馬県	五十嵐啓吉	澤田江里子	新潟県
埼玉県	大地 達男	岩崎 佑美	富山県
千葉県	菊池 孝	長野県	星野 正男
東京都	阿部 長男	山近 義幸	右井 幸作
	森本 益夫	宇都 隆史	柳澤喜三郎
	櫻村 保貞	近藤 幹子	山口県
	鈴木 岩雄	佐々木 充	田村 誠一
神奈川県	中村 武		
京都府	稲田 正弘		
大阪府	上田 浩寛	松尾 利夫	
岡山県	石井 修		

会員訃報(敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

北海道	荻野 巖	(21・9・14)
宮城県	大友 夏男	(21・2・14)
埼玉県	仁平 勝	(22・4・11)
東京都	杉本 明	(21・3・4)
	永瀬 毅夫	(21・12・22)
	武田 輝和	(22・5・18)
	木島 勝美	(22・3・22)
	角折 幸輝	(20・11)
	内田 孝吉	()
	村田 宏生	(22・4・15)
	田中 見義	(21・10・12)
	星野 正男	(22・5・10)
	右井 幸作	(22・1・21)
	柳澤喜三郎	(19・11・12)
	三谷 富彦	(20・2・17)
	村田 俊夫	(22・6・16)
	田村 誠一	(21・5・26)

◆ ◆ ◆

暑中お見舞い
申し上げます

財団法人
特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会

会長 山本卓真
副会長 菅原道熙
同 深山明敏
同 杉山幸生
理事長 藤田幸宏
常務理事 栗原徹也
事務局長 羽測也

財団法人
偕行社
会長 山本卓真
副会長 齋須重一
同 塩田章
同 志摩篤
理事長 福田一彌
事務局長 菊地勝夫

財団法人 水交会

会長 林崎千明
副会長 福地健夫

同 杉本光

理事長 夏川和也

副理事長 巖岩壯吉

専務理事 藤田幸生

事務局長 池田正男

財団法人 海原会

会長 前田武

専務理事 羽田俊一

航空自衛隊退職者団体
つばさ会

会長 村木鴻二

副会長 竹河内捷次

同 杉山弘

同 横幕功

同 山本修三

当協会会員ご入会のご案内

当協会は、先の大戦において、祖国の安泰を願ひ、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊をお祀りして慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私たちは、彼らからその精神を学び、現在の日本の現況や自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の方のご入会をお願い申し上げます。

○協会の沿革

昭和27年5月設立
平成5年11月財団法人認可
初代会長 竹田 恒徳 元宮様
二代会長 瀬島 龍三 氏
現会長 山本 卓真 氏

- 協会の主な事業
- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
- ・講演会等の開催
- ・機関誌等の発刊その他
- 年会費
- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

〒105-0014 東京都港区芝2-5-19 T Aビル4階
(財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会事務局
電話 03-57730-11016
FAX 03-57730-11016

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要の場合、その旨お書き添えください。
- 5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当協会事務局宛とさせていただきます。

記

〒105-0014 東京都港区芝2-5-19 T Aビル4階
(財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会事務局
電話 03-57730-11016
FAX 03-57730-11016